

平成 27 年度

博士論文(指導教授 高橋 弥守彦)

現代中国語の存在表現

- 空間と時間の視点から -

大東文化大学大学院

外国語学研究科 中国言語文化学専攻

博士課程後期課程

(学籍番号 13231103)

洪 安瀾

目次

序章.....	1
0.1 目的と意義.....	1
0.2 先行研究及び問題点.....	3
0.2.1 存在文の範囲について.....	3
0.2.2 存在文について.....	6
0.2.3 “在字句”について.....	12
0.2.4 連語論について.....	16
参考文献.....	19
第一章 “在字句”と存在文.....	20
第一節 「動前系」の“在+处所”について.....	22
1.1.1 はじめに.....	22
1.1.2 本動詞の前に用いる“在”.....	23
1.1.3 「文頭式」の“在+处所”.....	24
1.1.4 「直前式」の“在+处所”.....	26
1.1.5 「文頭式」と「直前式」の区別.....	28
1.1.6 おわりに.....	29
第二節 「動前系」の“在+处所”に対する日本語訳.....	30
1.2.1 はじめに.....	30
1.2.2 「動前系」の両形式.....	30
1.2.3 “在+处所”と格付き場所名詞との対応関係.....	31
1.2.4 おわりに.....	36
第三節 「動後系」の“在+处所”について.....	37
1.3.1 はじめに.....	37
1.3.2 本動詞の後ろの“在”の品詞分類.....	38
1.3.3 文末式の“在+处所”.....	41
1.3.4 おわりに.....	43
第四節 “在+处所”と格付き場所名詞の対応関係.....	44
1.4.1 はじめに.....	44
1.4.2 “在”は本動詞である場合.....	44

1.4.3 「文頭式」の“在+处所”	45
1.4.4 「直前式」の“在+处所”	48
1.4.5 「直後式」の“在+处所”	50
1.4.6 「文末式」の“在+处所”	54
1.4.7 おわりに	55
第5節 小説に現れている“在字句”	57
1.5.1 はじめに	57
1.5.2 統計について	57
1.5.3 意味の分類	59
1.5.4 おわりに	64
第6節 存在文と“在字句”について	65
1.6.1 はじめに	65
1.6.2 存在文の文型について	66
1.6.3 存在文と“在字句”の関係について	68
1.6.4 おわりに	71
言語資料	72
参考文献	72
第二章 現代中国語の存在文	73
第1節 存在文における「図」と「地」	75
2.1.1 はじめに	75
2.1.2 認知言語学における「図」と「地」	76
2.1.3 存在文の主語	78
2.1.4 存在文の客語	80
2.1.5 おわりに	82
第2節 静態存在文に見られる名付け的な意味	83
2.2.1 はじめに	83
2.2.2 連語論の観点について	83
2.2.3 静態存在文に見られる名付け的な意味	88
2.2.4 おわりに	93
第3節 動態存在文に見られる名付け的な意味	95
2.3.1 はじめに	95
2.3.2 動態存在文に関わる先行研究	95

2.3.3 動態存在文の再整理.....	97
2.3.4 おわりに.....	102
第4節 単純存在文.....	103
2.4.1 単純存在文に関わる先行研究.....	103
2.4.2 “有・是・存在”存在文と“无动(∅)”存在文.....	104
2.4.3 おわりに.....	108
言語資料.....	109
参考文献.....	109
第三章 存在文における「時間」	110
第1節 存在文の語順について.....	111
3.1.1 はじめに.....	111
3.1.2 今まで「静・動態」についての先行研究.....	112
3.1.3 述語の「静態」と「動態」.....	114
3.1.4 場所名詞と連語のむすびつき.....	116
3.1.5 おわりに.....	120
第2節 存在文における“V着”、“V了”	121
3.2.1 はじめに.....	121
3.2.2 今までの存在文におけるアスペクト研究.....	122
3.2.3 はたらきかけの静態存在文.....	123
3.2.4 つくりだしの静態存在文	126
3.2.5 動態存在文.....	129
3.2.6 おわりに.....	131
第3節 静態存在文に用いられる“着”、“了”	132
3.3.1 はじめに.....	132
3.3.2 語用論における「長」と「短」.....	132
3.3.3 構造から見る存在文の“V着”、“V了”	134
3.3.4 おわりに.....	137
第4節 動態存在文に用いられる動態助詞について.....	138
3.4.1 はじめに.....	138
3.4.2 動態存在文の“着”と“了”についての先行研究	138
3.4.3 “着”が置き換えられる場合.....	139
3.4.4 おわりに.....	140

第5節 動態助詞が“过”の場合.....	142
3.5.1 はじめに.....	142
3.5.2 “过字句”についての先行研究.....	143
3.5.3 過去の“过字句”.....	144
3.5.4 現在の“过字句”.....	145
3.5.6 おわりに.....	147
言語資料.....	148
参考文献.....	148
第四章 存在表現における「報告・発見」	150
第1節 数量詞および発見表現についての先行研究.....	152
4.1.1 数量詞.....	152
4.1.2 発見表現.....	153
4.1.3 本節の観点.....	154
第2節 「報告」、「発見」を表す存在表現.....	157
4.2.1 「既知」を伝える場合.....	157
4.2.2 「未知」を伝える場合.....	159
4.2.4 「発見」を表す存在文の述語.....	160
言語資料.....	161
参考文献.....	161
終章.....	162
5.1 結論.....	162
5.2 今後の課題.....	164
参考文献.....	165

序章

0.1 目的と意義

言葉は現実を反映する。単語は現実のなかのひとときれを表す文法単位であり、連語は単語より具体的な意味概念を表し、文は単語と連語とによって作られ、人の意思を表す最小の文法単位である。連語が文を作る文法単位であるにもかかわらず、これまで大多数の専門家は現実のひとときれを表す単語と人の意思を表す文に注目してきた。本稿では単語と文の中間単位である連語にも注目する。

連語は具体的な意味を表す 2 単語以上の単語のくみあわせであり、単語“吃”[食べる]より具体的な意味概念“吃苹果”[リンゴを食べる]を表す。文“我们吃苹果。”[私たちはリンゴを食べます。]は単語“我们”[私たちは]と連語“吃苹果”[リンゴを食べる]とによって作られ、人の意思を表す最小の文法単位である。文は単語と連語とによって作られるので、これまでのように単語や文に注目するだけでなく連語にも注目する必要がある。

存在文はヒトやモノの存在を表す文である。存在文は一般に場所詞“图书馆”を文頭に用い、場所詞と関連のある存在を表す動詞“有/是”が次に選ばれ、最後に存在の対象であるヒトやモノが選ばれて、存在文“图书馆有很多学生。”[図書館には学生がたくさんいます。]、“窗外是一个花园。”[窓の外は花園です。]となる。

従来の存在文研究には多くの専門家が従事し、様々な学説がある。各専門家は存在文の構造と意味の定義について、大筋では一致しているものの、細部では必ずしも一致しているとは言えない。本稿では連語論の観点を加えて存在文を分析している。

存在文について、范方莲(1963)、宋玉柱(1982)などは、文構造では“处所词+有/是/动词‘着’+数量名词组合”「場所詞+有/是/动词‘着’+数量名詞連語」「墙上挂着一幅油画。」[壁に油絵がかかっている。]と“名词谓语存在句”「名詞述語存在文」「满地垃圾。」[どこもかしこもゴミだらけだ。]の二種類の文が典型的な「(狭義的)存在文」と指摘している。李临定(1988)では“油画在墙上挂着。”[油絵が壁にかかっている。]、“油画挂在墙上。”[油絵が壁にかけてある。]のような文も、“他在床上躺着。”[彼はベッドで横になっている。]、“他躺在床上。”[彼はベッドに横になっている。]と同じ存在文であると指摘し、“状态存在句”「状態存在文」と名付け、「広義の存在文」と呼んでいる。周祖谟(1957)では「出現」、「存在」、「消失」を意味する存在文を“存現文”「存現文」と言い、それを意味上の「広義の存在文」と名づけている。范方莲(1963)、宋玉柱(1982)などには「狭義の存在文」という存在文に対する観点があり、「出現」と「消失」を意味する文は存在文ではないと指摘している。

90年代以降の存在文研究では、主に張先亮、范晓など(2010)の文構造“NP₁(処所)+VP+NP₂(事物)”が研究対象の中心であり、呂叔湘が“表示事物存在的句子(1980:24)”「事物の存在を表す文(1983:29)」と定義付けると、これに基づき多くの研究が行われてきた。存在文の下位分類には、文中の述語動詞の種類によって「単純存在文」、「静態存在文」、「動態存在文」に分類する先行研究もあれば、述語動詞の後ろに用いる動態助詞“着”、“了”、“过”の有無によって分類を行う先行研究もある。

本稿では「連語」の概念を取り入れる。一類のイベントを言語に反映する基本的に文意の同じ異なる種類の文は、同じ「単語」を用いて文を作る。例えば、存在文の“桌子上放着一本书。”[机の上に本が(一冊)置いてある。]と“在字句(所在文)”の“一本书放在桌子上了。”[一冊の本を机の上に置いた。]とは、基本となる同じ単語“书、放、桌子上”で文を作る。連語は前者がこのうちの“(桌子上)放书”[(机に)本をおく]、後者が“(书)放桌子上”[(本は)机に置く]である。連語レベルに両者の区別がすでに現れている。文レベルになると、まず文頭に前者は“桌子上”、後者は“一本书”を用い、さらに前記の連語に数量詞、動態助詞などの語句を加えて、存在文(前者)と所在文(後者)を作る。これにより両者の構造上・意味上の区別がいつそう明らかになる。

上記2例中、存在文“桌子上放着一本书。”の「出現、存在する空間」“桌子上”と「存在(残存)状態」“放着”が、所在文“一本书放在桌子上了。”では「動作」“放”及び「到達する空間」“桌子上”となる。言い換えれば、存在文と所在文は同じ単語を用いて同じ出来事の異なる発展段階に注目しているとも言えよう。この発展段階は「時間の推移」と関係する。この発展段階から連語と文との密接な関係が明らかになる。50年代から80年代まで、両者をすべて「存在文」として扱う研究が多かった。90年代以降になると、存在文と所在文の関係についての研究はほとんど見られなくなった。

これまでの存在文研究においては、場所名詞、文構造、述語動詞、日中対照などの問題が数多く考察されてきたが、存在文と「時間の推移」との関係についての分析はまだ不足している。本稿は存在文に現れた「時間の推移」に関わる幾つかの問題、例えば動態助詞“了”“着”“过”の互換の問題、およびいかなる条件を満たせば存在文が「報告文」または「発見文」に用いられるかなどの問題について検討する。

本稿の第一章では、存在文と関連する“在字句”(本稿では「隠現文:消失と出現を表す文」とも言う)について検討する。特に存在文と同じ単語を用いて異なる連語構造を作る“在字句”について考察する。第二章は、連語論、認知論などの観点に基づき、第一章における“在字句”を分析する方法を用いて、存在文の下位分類を行う。第三章では存在文の文構造、そして存在文に用いる動態助詞について分析する。第四章では存在文で旧状況の「報告」または新状況の「発見」を陳述する場合の使用状況を考察して、存在文と“在字句”の使い分けについて検討する。

0.2 先行研究及び問題点

0.2.1 存在文の範囲について

存在文に関する研究は多数ある。先行研究を見る限り、存在文の範囲に対する各専門家の観点は必ずしも一致しているというわけではない。本節では先ずこの点から言及していこう。

0.2.1.1 存在文の分類について

存在文の分類について、これまでは主に二つの問題をめぐって各専門家が議論を巡らしてきている。一つは“存在句”と“存現句”とに区別があるか否かの問題であり、もう一つは存在、所在、所有を如何に区分するかの問題である。

0.2.1.1.1 “存在句”と“存現句”について

当初、筆者は「存在」「存在句」と「出現/消失」「存現句」を意味する文を同じように扱っていた。このような観点を持つ専門家もかなりいて、筆者はその影響を受けたからである。しかし、存在文に関する各専門家の先行研究を比較し例文を検討するうちに、存在文に対する筆者の研究が進み、両者の区別が徐々に明確になってきた。ここでは、まず存在文に関する代表的な先行研究からみていこう。

I、吕叔湘(1946、1990)

吕叔湘(1946、1990:458-463)では、以下に挙げる3類の例文はすべて存在文である。

- (1) 街北蹲着两个大石狮子。(吕叔湘 1946、1990)

通りの北側には大きな石の獅子が一對うずくまっている。(筆者訳)

- (2) 羊群里跑出骆驼来了。(吕叔湘 1946、1990)

羊の群れの中からラクダが現れた。(筆者訳)

- (3) 难道……普天下死绝了男人了。(吕叔湘 1946、1990)

まさか世の中の男がすべて死んでしまったわけではあるまい。(筆者訳)

吕叔湘(1946、1990)は、“有/是存在句”「“有/是”存在文」を単純な存在文として考えている。吕叔湘によれば、例(1)は“以某种姿态存在”「ある状態での存在」を表す存在文である。例(2)は“出现”「出現」の意味を表す存在文である。例(3)では“消失”「消失」の意味を表す存在文である。吕叔湘は、この3類を合わせて“存在句”「存在文」と言っている。換言すれば、吕叔湘は“存在和它的开始、终止”「存在はその開始と終始」も含むと、見なしているのである。この観点は、その後、中国の文法学界に大きな影響を及ぼす。

その後、吕叔湘(1980:18)では“表示事物出现或消失的句子”「事物の出現や消失を表す文」は、存在文とよく似ている性質を持つが、存在文ではないと指摘し存在文から除外する。

II、陈庭珍(1957)

陈庭珍(1957:16-19)では、ある場所でのモノの出現、及びある場所からのモノの消失を意味する文も、存在を意味する文と同一範疇に属する存在文と考えている。その理由については、出現は存在の開始であり、消失は存在の終止であるという観点を持つからであり、次のように述べている。

从结构上说，和处所词做主语的存在句很相似；从意念上看，对说话的人来说，“出现”是“存在”的开始，“消失”是“存在”的结束，所以它们可以归入存在句的一个句型。
(陈庭珍 1957:19)

III、周祖谟(1957)

周祖谟(1957)では、事物の存在を表す存在文は事物の出現と消失を表す文と形式と意味の面で近いので「存現文」とする、という観点を初めて提起し、“动词谓语句里面有一类表示事物存在的句子，它的结构比较特别，称为‘存在句’……跟‘存在句’性质相近的是表示事物出现或消失的句子……这种句子在形式和意义上都跟存在句很相似，可以合起来成为存现句。”と指摘した。

この観点に基づけば、周祖谟は存在文を存現文の下位分類のように捉えている。この影響を受け、その後の研究者は“存在句”と“存現句”を同一視する場合もある。例えば、戚雨村(1993:164)では“存現句又叫存在句”と指摘している。

IV、李临定(1986)

李临定(1986 :73-91)では“马背上骑着一个男孩。”「馬の背中に男の子が乗っている。」のような“名_主+動+名”の構造の存在文を“着字句”と名付け、“有/是字句”と若干の違いはあるものの、“有/是字句”のような単純存在文と同じ類型と見なせる“谓语动词”を用いる存在文であると指摘している。

“有/是字句”と“着字句”の区別については、前者は事物の存在を単純に表すだけだが、後者は具体的な動詞によって、事物の存在の状態と方式を描写していると見なし、次のように述べ、“‘有/是字句’只是单纯地表示事物的存在，而‘着字句’通过具体动词把事物存在的状态和方式形象地描写出来。”と指摘し、存在文における両者の違いを明らかにしている。また、“出現”“消失”を意味する文は“隱現句”と名付け、存在文ではないとしている。

V、宋玉柱(1982、2007)

宋玉柱(1982、2007:2)では李临定(1986 :73-91)の言う“着字句”の他、“了字句”と“过字句”(動態助詞“了/过”を用いる文)も存在文として考えている。

宋玉柱は存在文の定義について、存在・出現・消失を表す文を存現文と言い、そのうちの存在を表す文を存在文とし、“表示某处存在、出现或者消失某物的句式统称为存现句，其中表示存在的句式叫做存在句。”と述べ、両者の区別に言及している。宋玉柱は存在文を存現文の下位分類のように捉えている、と言えよう。

0.2.1.1.2 存在、所在、所有は如何に区分しているのか

「存在」、「所在」及び「所有」は混同しやすい概念である。存在文のなかで、これらの概念が各専門家によって、どのように区別されているのか、以下に挙げるような各専門家の観点がある。

I、中国科学院语言研究所语法小组（1952）、丁声树（1961）

丁声树（1961:35-36）では以下の例文を挙げたている。

- (4) 黑影里站着四五个人。（丁声树 1961:35）

暗い影のところに人が4、5人立っている。（筆者訳）

- (5) 柜子里有书。（丁声树 1961:36）

戸棚に本がある。（筆者訳）

- (6) 书在书柜里。（丁声树 1961:86）

本が戸棚にある。（筆者訳）

丁声樹は例(4)(5)を“存在句”とすると同時に、例(6)のような文も“表示存在的句子”「存在を表す文」である、と考えている。

II、范方莲（1963）

范方蓮（1963:386-395）では、“处所词+有/是/动词‘着’+数量名词组合”と“名谓存在句”が典型的な存在文であると指摘している。その説は典型的な狭義的存在文であると考えられる。宋玉柱（1982、2007）もこの説に基本的に賛同している。宋玉柱（2007）の調査では、狭義的存在文中の述語動詞の後ろに用いられる動態助詞は、“着”のほか、“了”“过”も用いられる。

III、汤廷池（1977）

湯廷池（1977:181）では、“书在桌面上”のような文だけが存在文であると指摘している。湯廷池の説によれば、文の主語は必ず“有定的事物名词”「特定のモノ名詞」であり、補語¹⁾は“有定的处所名词”「補語は特定の場所名詞」である。

IV、张静（1980）

張静（1980:172）は以下のような文を挙げ、これらはいずれも存在文であるとしている。

- (7) 明亮的大玻璃窗上挂着丝质的湖色窗帘。（张静 1980:172）

明るい大きな窓ガラスにシルクの水色のカーテンが掛けてある。（筆者訳）

- (8) 我们还存在着缺点。（张静 1980:172）

私たちには欠点はまだある。（筆者訳）

- (9) 这座钟就在柏树底下。（张静 1980:172）

この鐘はコノテガシワの下にある。（筆者訳）

¹⁾ ここは述語動詞“在”の客語のことを指しているであろう。

V、李临定(1988)

李临定(1988:212)では、多くの存在文の専門家がこれまで唱えていた存在文の定義とほぼ同様な李临定(1986)の観点“在某处存在着某种物件或某种人”「ある場所にあるモノや人が存在している」を若干修正し、モノ名詞も存在文の主題になれるとした。

(10) 油画在墙上挂着(呢)。(李临定 1988:212)

油絵が壁にかかっている。(筆者訳)

(11) 油画挂在墙上(呢)。(李临定 1988:212)

油絵が壁にかかっている。(筆者訳)

(12) (在)墙上挂着一幅油画。(李临定 1988:212)

壁に油絵がかかっている。(筆者訳)

李临定(1988:212)によれば、例(10)(11)の文構造は異なるが、ともにモノ名詞を主語とする文である。このような文も存在文のなかに入れてとしている。例(12)は存在文に対する李临定(1986)の観点の踏襲である。この観点は存在文に関する一般の専門家の観点とほぼ同様である。上掲の文構造の異なる3つの例文は、李临定(1988)により“状態存在句”と名付けられる。

VI、李临定(1993)

李临定(1993:329-337)では、存在文を「静態存在文」(例13)、「動態存在文」(例14)、「単純存在文」(例15)の3類に分けている。

(13) 大门上挂着一块木牌。(李临定 1993:330)

表門には木製の札が掛けてある。(筆者訳)

(14) 空中飘着雪花。(李临定 1993:335)

空中で雪が舞っている。(筆者訳)

(15) 我们学校里有两个大操场。(李临定 1993:336)

私たちの学校には大きなグラウンドが二つある。(筆者訳)

李临定(1993)以降の研究の多くは、李临定の唱える静態と動態の分類を活用して、「存在文」と「所在文」、「所有文」とに分けて分析するようになる。

0.2.2 存在文について

現代中国語の存在文における下位分類については、本稿では主に以下の五人の専門家の観点を参考として取り上げる。

I、吕叔湘(1980、1982 日本語版:41、1999 重版)

吕叔湘(1980、1982 日本語版:41、1999 重版)の研究には、「静的な」存在の事柄を叙述する存在文の特徴についての指摘がある。この観点は存在文を研究する多くの研究者に影響を与えるものの、モノの「動的な」存在の事柄を表す存在文については言及していない。

[表 0-1] 吕叔湘(1980:31、1982 日本語版:41、1999 重版:36)

	处所(时间)词语	状语	动词	名词	助词及其他
A	屋子里 古代 大门外	曾经	有 有过 是	人 这么一个勇士 一个荷花池	吗?
B	门口 槐树底下	并排	站着 坐着	一个小孩 几位老大爷	
C	沿着水渠 东屋里 墙上	靠墙	栽着 放着 挂着	一排杨树 各种农具 一副世界地图	

(1)A 类表示单纯存在；B、C 两类表示以何种姿态存在。

(2)B 类的名词代表施动者；C 类的名词代表受动者。

(3)B、C 两类动词后面经常带着‘着’，但是都不表示动作进行，而是表示动作产生的状态。

(4)动词后边的名词一般代表无定的事物，前边往往有‘一个、几个’等词语。有时候这个名词代表有定的事物(如专名)，但仍然需要在前面加上‘[一]个’等字样。

(吕叔湘 1999 重版:36)

吕叔湘(1980、1999 重版)では存在文に用いる名詞と動詞の特徴により、存在文を上掲の 3 種類に分けている。この点は高く評価できる。しかし、主語となる名詞は時間詞一例(Aの“古代”)を除いてすべて場所名詞である。また、動詞と名詞で作る連語はすべて静態である。これらの点から見ると、伝統的な存在文を分類しただけと見えそうである。

II、李临定(1993)

李临定(1993: 329~337)は存在文を「静態存在文」、「動態存在文」、「単純な存在文」の 3 類に分けている。李临定(1993)における動詞の意味分類に基づき下記「表 0-2」のようにまとめる。

李临定は「一般に存在文といえ、主として静態存在文を指す。」(李临定 1993:330)と指摘している。文中の動態助詞については「文中動詞の後ろに動態助詞“着”を伴うのが常で、“了”を用いることもできる。“靠墙根放了/着十几盆菊花。”/墀の根元に菊の花が十数鉢置いてあります。(李临定 1993:333)]また、動態助詞を用いなくてもよい時もある。[“上面凌乱地放些颜色杂乱的坐垫。”/その上にはまちまちの色をしたクッションが雑然と置いてある。(李临定 1993:334)]と指摘している。李临定は存在文を以下の 3 類に分けている。

[表 0-2] 李臨定(1993)における存在文の分類

	動詞	本書の説明	本書に挙げた例文と訳文
静態存在文 (330-335)	動詞が“坐” など	体が置かれている 姿勢を表す	・床上 <u>躺着</u> 一个病人。(ベッドに患者 が一人 <u>寝</u> ています。)
	動詞が“挂” など	物が置かれている 方式を表す	・大门上 <u>挂着</u> 一块木牌。(正門に一枚 の木の札が <u>かか</u> っています。)
	動詞が“戴” など	場所連語がいずれ も体のある部分に なっている。	・他手里 <u>托着</u> 一个盘子。(彼の手に大 皿が一枚 <u>うけ</u> られています。)
	動詞が“刻” など	行為の結果ができ ことというような 一種の結果関係が ある。	・黑板上写着你的名字。(黑板にあな たの名前が <u>書</u> かれています。)
	動詞が“种” など	植えるという意味 を表すのもである。	・花园里 <u>盛开着</u> 一株株的月季花。(花 園にはひと株またひと株とコウシン バラが <u>咲</u> き誇っています。)
動態存在 文(335)	動詞が“飘、 奔跑”など	文中の“飘着”が動 態を表す。	・空中飘着雪花。(空に雪がひらひら と舞っています。)
単純存在 文 (335-337)	動詞が“是、 有、存在” の3つ	人及び物の存在す る具体的状態を表 さないことである。	・屋子里还有几个人。(部屋にまだ数 人います。) ・抽屉里是一些乱七八糟的东西。(引 き出しの中はごちゃごちゃしたもの がすこしです。) ・这里边还存在着一些问题。(この中 にはなおいくらか問題が存在してい ます。)

李臨定はこれまでの“有/是”を用いる存在文と新たに存在義を表す存在文を考慮に入れ、動詞の種類によって存在文を上記の静態義を表す「静態存在文」、動態義を表す「動態存在文」、単純な存在を表す「単純存在文」の3類に分けている。存在文を3類に分ける李臨定の観点は、中国語学界に大きな影響を与えている。

存在文の日本語訳はそれぞれ特徴がある。単純存在文は客体がヒトであれば、「いる」で訳し、モノであれば「ある」で訳す。静態存在文と動態存在文はともに「～し

ている」で訳すが、前者は「～して」と存在を表す「いる」で「～して+いる」と訳し、後者は進行を表す「～している」で訳す。

Ⅲ、宋玉柱(2007)

宋玉柱(2007:P15)では、主に存在文に用いる述語の完成度の違いによって存在文を分類し、静態存在文と動態存在文の二類に分け、存在文の全体像を以下のようにまとめている。

[表 0-3] 宋玉柱(2007:15)における存在文の全体像

存在句	静態存在句	“有”字句	门口有一个人。
		“是”字句	窗前是个花园。
		“着”字句	墙上贴着一张画。
		“了”字句	床上贴了一盏灯。
		经历体存在句	窗子上贴过几张剪纸。
		定心谓语句	山下一片好风光。
		名词谓语句	满地垃圾。
	動態存在句	进行体动态存在句	天上飞着一只鸟。
		完成体动态存在句	门前挖了一道沟。

宋玉柱の研究では、存在文を「静態存在文」と「動態存在文」の二類に分けている。李临定(1993)が指摘する「単純存在文」を“‘有’字句”「‘有’構文」、 “‘是’字句” 「‘是’構文」の2つに分け静態存在文の中に入れ、李临定(1993)の言う静態存在文を“‘着’字句”「‘着’構文」、 “‘了’字句” 「‘了’構文」、 “经历体存在句” 「經歷体存在文」の3類に分けている。これらはいずれも静態存在文である。そして “进行体动态存在句” 「進行体動態存在文」と “完成体动态存在句” 「完成体動態存在文」を動態存在文のように考えている。

上表中の静態存在文における “经历体存在句” 「經驗体存在文」、 “定心谓语句” 「偏正述語文」、 “名词谓语句” 「名詞述語文」が宋玉柱の独創的な分類である。

Ⅶ、张先亮、范晓などなど(2010)

张先亮、范晓など(2010)は、存在文に関するこれまでの研究者の観点をまとめ、語用と文構造とによって、存在文を“一级”、“二级”のように分類している。下記の表の中の“一级分类”はモノの存在する状況の違いによって “单纯存在句” 「單純存在文」、 “断定存在句” 「断定存在文」、 “状态存在句” 「狀態存在文」のように分けている。それに対して、上位レベルの“一级分类”の3類を“二级分类”で再分類している。

[表 0-4] 张先亮、范晓など(2010:59)による存在文の分類

一级分类	二级分类		例句
单纯存在句	“有”字存在句(“名 _处 +有+名物”)		门口有一个人。/墙上有一幅画。
	“存在”存在句(“名 _处 +存在+名物”)		宇宙中存在着不计其数的星球。
	“无动”存在句(“名 _处 +[]+名物”)		天上一片乌云。/屋后一片荒山。
断定存在句	“是”字存在句(“名 _处 +是+名物”)		村前是一条小河, 村后是一片荒山。
状态存在句	“V着”存在句 (“名 _处 +V着+名物”)	活动动词存在句	草原上奔驰着骏马。/天上飞着大雁。
		非活动动词存在句	门口坐着一个人。/墙上挂着一幅画。
	“V[着]”存在句(“名 _处 +V+名物”)		壁炉旁边搁放一个粗制的煤斗同木柴。右边门口左侧, 挂一张画轴。 (曹禺)
	“V了”存在句(“名 _处 +V了+名物”)		墙上挂了一幅画。/台上坐了主席团。
	“V有”存在句(“名 _处 +V有+名物”)		墙上挂有油画。/屋里放有许多杂物。
“V满”存在句(“名 _处 +V满+名物”)		果园里挂满沉甸甸的柑橘。	

V、刘街生(2013)

刘街生(2013:13~19)では、李临定(1986)、谭锦春(1996)、潘文(2006)などの説を参考にし、及物動詞と不及物動詞との区別、およびそれらの動詞をさらに2類に下位分類することによって、存現文²⁾に用いる述語動詞を分類し、代表的な動詞を指摘している。本稿では、刘街生(2013)が分類し指摘する述語動詞と注釈も[表 0-5]のようにまとめる。

刘街生(2013)によると、存現文に用いる及物動詞には、文中に現れない及物動詞の“论元”(Argument Structure)がある。動詞が“施事及物动词”である場合は、“论元”は動作の仕手であり、動詞は“非施事及物动词”である。

²⁾ 刘街生(2013)は“存在句”という術語を使っているが、刘街生は“动作动词则相对复杂, 构成的存在句, 既可表示存在, 也可表示出现或者消失。”(P16)と述べ、存在文のなかに存在・出現・消失を加えている。本稿は原文が言う“存在句”を「存現文」と訳し、出現や消失などを表す文は別稿で論じる。

[表 0-5] 刘街生(2013)による述語動詞の分類

动词分类		代表性的动词	作者注释		
及物动词	施事及物动词	塞, 挂, 栽, 贴, 插, 装, 悬, 搁, 穿, 戴, 腌, 叨, 镶嵌, 晾晒; 例: “墙上挂了一幅画。” (P14)	表示“放置”的意义	动词的论元表示施事。表示动作造成的静态的结果状态。动作状态的持续不需要外力支持, 可以用表示动作完结的动态助词“了”。	
		印, 画, 写, 建, 挖, 修, 搭; 例: “墙上画了一幅画。” (P14)	表示“创造”的意义		
		撞, 磕, 划, 捅, 抓, 砸, 撕, 掐, 碰, 扯, 咯, 蹭, 剁, 叮, 割; 例: “头上碰了一个包” (P14)	谭景春(1996) 破损义存在句		
	非施事的及物动词	多, 少, 露, 透, 泛; 例: “桌子上少了一件东西。” (P14)			动词的论元不是施事, 是经验者, 不是变化的外力的提供者, 动词表示刺激性的心理动词。
		鼓, 肿, 炸, 塌, 陷, 破, 开, 裂, 豁, 冻, 漏; 例: “牙床上肿了一个包。” (P14)	谭景春(1996) 破损义存在句		
		有, 没, 是; 例: “教室里没人。” (P14)	纯粹的存在句		
不及物动词	状态动词	蹲, 躲, 跪, 流动, 趴, 住; 例: “门边蹲着一对石狮子。” (P15)	表示空间配制的动词		
		病, 昏迷, 活动, 生活; 例: “广场上已病了不少人。” (P15)	部分表示位置、状态变化的结果动词		
	动作动词	蹦, 爬, 跑, 飘, 跳, 走, 搬, 飞, 游; 例: “在她头顶, 盘旋着一群呱呱乱叫的乌鸦” (P15)	表示形成某种状态并延续的状态动词		
		亮, 冒, 闪, 响, 刮, 流传, 飘扬, 长, 沉, 开; 例: “水面上冒着水泡。” (P16)	能带非有生 S(这里的 S 指进入宾语位置指主语)的动作用动词		

※刘街生(2013)が述語動詞と例文を明示した点は高く評価できる。

その場合、“论元”はまた経験者でもある。文中に用いる述語動詞が不及物動詞である場合は、主語が客語の位置に入り³⁾、動詞の対象である客語が動詞の“论元”でもあると指摘している。

0.2.3 “在字句”について

“在字句”「在」構文」では、本動詞の前に用いる“在+处所”「在」+場所」についての研究が数多くある。范继淹(1982)では、文頭の“在+处所”は“事件发生的处所”「事柄の発生する場所」と指摘し、本動詞の前の“在+处所”は“动作发生的处所和状态呈现的处所”「動作の発生する場所、あるいは状態の現れる場所」と言っている。沈家煊(1999)の観点では、本動詞の前の“在+处所”は“在某处所发生某动作”「動作の行われる場所」と指摘している。高橋弥守彦(2008、2011)では、連語論の観点から“在+处所”の位置と場所名詞の格について検討している。この他、本稿が引用する先行研究を以下にまとめて挙げる。

I、王还(1957、1980)

王还(1957:25-26、1980:25-29)では、文中に用いる“在 L-VP”の構造の位置によって、“前置式”「前置式」(在花瓶里插一朵花。[花瓶に花が一輪さす。])と言い、“VP-在 L”を“后置式”「後置式」(一朵花插在花瓶里。[一輪の花が花瓶にさしてある。])と言う。

述語の前に用いる“前置式”の“在+处所”は“某个动作在什么地点发生或者某种状态存在于什么地点”「ある動作がどこで発生するか、あるいはある状態がどこに存在するか」を意味し、述語の後ろに用いる“在+处所”は“动作发生的地点”「動作の発生するところ」並びに、“受事因动作而到达的地点”「受事が動作によって到達するところ」を示すと指摘している。

II、范继淹(1982)

范继淹(1982:71-86)では、文中における“在字短语”「在」連語」の機能を以下の三つに分類している。

- i、“在+处所”を文頭に置く場合は、“动作发生的处所”「動作の発生する場所」を指す。(“在北京，我跟他在远东饭店住在一个房间里。”[北京では、私は彼と遠東ホテルで同室だった。])
- ii、“在+处所”を本動詞の前に置く場合は、“动作发生的处所和状态呈现的处所”「動作の発生する場所と状態の現れる場所」を示す。(“我们在椅子上坐着。”[私たちは椅子に坐っている。])

³⁾ 本論文は存在文が主述文であると考えている。存在文の文末にある名詞成分が客語であると考えられる。また、本論文では“论元”の考え方に賛同している。話し手は場合によって“论元”と同じ人物であると考えられている。

iii、“在+处所”を動詞の後ろに置く場合は、“動作到達的处所或状态呈现的处所”「動作の到達する場所あるいは状態の現れる場所」を示す。（“我们坐在椅子上。”
[私たちは椅子に坐っている。]）

“动词后面‘在+处所’被带数量词的宾语隔开”「動詞の後の『“在”+場所』は数量詞を伴う客語によって切り離される」（“他挂了一张地图在书房里。”[彼は地図を書斎にかけた。]）の場合について、范继淹は“分裂式”と名付け、上掲の「iii、“在+处所”は動詞の後ろに置く場合」の一つとして考えている。

III、吕叔湘(1980, 1982 日本語版)

吕叔湘(1980:571-574, 1982 日本語訳版:485~486)では、以下に挙げる“在+处所”で作る連語は、文中のどの位置に用いても介詞連語であり、三種の用法があるとしている。

i、動作を行う場所または事物の存在する場所を指している。

(16) 在高空飞翔(吕叔湘 1982:485)

空高く飛翔する。(同上)

(17) 在草地中央有一个喷水池，在喷水池的两边是两个精致、美丽的花坛。(吕叔湘 1982:485)

草原の中央に噴水があり、その両側に手入れのゆきとどいた美しい花壇がある。(同上)

ii、生まれる、発生する、作られる及び住む場所は、動詞の前と後ろの両方に用いることができる。

(18) 出生在北京。(吕叔湘 1982:485)

北京で生まれる。(同上)

(19) 在北京出生。(吕叔湘 1982:485)

北京で生まれる。(同上)

iii、動作が到達する場所を表す場合は、動詞の後ろに用いる(例 20)。動詞が受事客語を伴う場合(例 21)は、客語の前に数量詞を用いる。さもなければ、“把字句”(例 22)、あるいは客語前置(例 23)の構文構造とする。

(20) 掉在地上。(吕叔湘 1982:486)

地面の上に落とす。(同上)[床に落ちる(筆者訳)]

(21) 写一个名字在上头。(吕叔湘 1982:486)

上に名前を書く。(同上)

(22) 把名字写在上头。(吕叔湘 1982:486)

名前を上を書く。(同上)

(23) 名字写在上头。(吕叔湘 1982:486)

名前は上を書く。(同上)

IV、沈家煊(1999)

沈家煊(1999:94-102)は、本動詞の前の“在+处所”は“在某处所发生某动作”「動作の行われる場所」⁴⁾(例24)を表すと指摘し、本動詞の後ろに用いる“在+处所”は“动作作用下事物到达的处所”「働きかける客語の動作行為による到達する場所」(例25, 26)を示すと指摘している。

そのうち、下記に挙げる例(25)の文末に用いる“在+处所”は“动作和达到是两个分离过程”「動作と到着が出来事の異なる段階」を表し、例(26)の述語動詞の後ろに用いる“在+处所”は“动作和达到是一个统一过程”「動作と到着が出来事の統一した段階」を表すと考えられている。また、“把字句”(我把几个字写在黑板上。)は例(25)、(26)の“在字句”の“变体”「派生形式」であるとも指摘している。

(24) 在黑板上我写了几个字。/我在黑板上写了几个字。(沈家煊 1999:95)

黑板に私は数文字書きました。/私は黑板に数文字書きました。(筆者訳)

(25) 我写几个字在黑板上。(沈家煊 1999:95)

私は数文字を黑板に書きました。(筆者訳)

(26) 我写在黑板上几个字。(沈家煊 1999:95)

私は数文字を黑板に書きました。(筆者訳)

V、李临定(1993)

「“在”+場所」介詞連語に関する以下に挙げる李临定(1993:203~206)の観点も、基本的には吕叔湘(1980)と同様の分析であり、“在+处所”「“在”+場所」連語を介詞連語として扱っている。

本節では、この説に対して、述語の前に用いる“在+处所”連語は介詞連語だが、述語の後ろの“在+处所”は、存在義があるので動詞連語と認識している。“在+处所”がすべて介詞連語とは限らないと考えている。

A、“在+場所”を述語の前に用いる場合、「連語は動作の発生する場所」を表す。

(27) 她在院子里晒了两床被子。(李临定 1993:203)

彼女は庭に掛け布団をふた組干しました。(同上)

B、“在+場所”を主語の前に用いる場合は、「連語は事件の発生する場所」を表し、“在+場所”を述語の前に用いる場合もあるが、一般的にはお互いに位置を入れ替えることができる(例28、29)。

(28) 在电话里我听到了熟悉的声音。(李临定 1993:204)

電話で⁵⁾、私はよく聞き覚えている声を耳にしました。(同上)

⁴⁾ 述語動詞の前の“在+处所”が「動作を行う場所」(我在飞机上看长江大桥。沈家煊 1999: 98)を示す役割の他に、「働きかけの場所」(例16)、「話題の範囲」(在中国, 香烟被认为是交流的工具之一。)などの意味を示すこともできる。委細については本稿の第一章を参照されたい。

⁵⁾ 中国語の“在电话里”は抽象的な空間を表しているに対して、日本語訳の「電話で」は、使用する道具を表す「で格」の名詞であると判断する。

(29) 他在银行里已经工作了5年。(李临定 1993:205)

彼は銀行ですでに五年間働きました。(同上)

例(28)では“在+場所”を主語の前に用い、例(29)では述語の前に用いている。この2例は“在+場所”がどちらにも用いられることを意味している。しかし、李临定は以下の例文を挙げ、客語を伴わない場合(例30)と介詞“在”の前に“都”などの副詞がある場合(例31)であれば、“在+处所”は述語の前にしか用いることができない、と指摘している。

(30) 他在银行里工作。(李临定 1993:205)

彼は銀行で働いています。(同上)

(31) 我们都在办公室里住了一个晚上。(李临定 1993:205)

我々はみな事務室に一晩泊まりました。(同上)

C、“在+处所”介詞連語が述語の後ろにある場合、文構造の文法的な特徴は次のとおりである。

i、連語は人あるいは物が動作行為によって、その場所に到達することを表す。(例32)

ii、受事客語をともなう場合、“把字句”を用いる。(例33)

iii、自動詞も述語になれる。(例34)

(32) 一进屋，我们便都坐在沙发上。(李临定 1993:206)

部屋に入るや、我々はみなソファに腰を下ろしました。(同上)

(33) 他们把钱都存在银行里。(李临定 1993:206)

彼らは金を全部銀行に預けました。(同上)

(34) 一只羽毛球落在我脚前。(李临定 1993:206)

バドミントンの羽根がひとつ、私の足のまえに落ちました。(同上)

例(32)は動態で、介詞“在”の後ろに“了”を加えることができるが、例(35)は静態で、介詞“在”の後ろに“了”を加えることができない⁶⁾と指摘している。

(35) 他坐在沙发上，怎么叫他也不起来。(李临定 1993:207)

彼はソファに腰をおろして、どんなに呼んでも立ち上がろうとしません。(同上)

D、“在+处所”介詞連語が客語の後ろにある場合、文型の特徴は次のとおりである。

i、連語は場所を示す介詞連語である。

ii、述語になるものは、居場所を与える意味を表す他動詞に限られる。

iii、受事客語を伴い、しかも述語が他動詞の場合、直後式と文末式は置き換

⁶⁾ 例(35)では“了”を付けて、“他坐在沙发上，怎么叫他也不起来。”が言えると思っている。しかし文意は「彼はソファに腰をおろすと、どんなに呼んでも立ち上がろうとしません。」となる。

えられる。例えば“把几本书放在桌子上=他放了几本书在桌子上。”である。

(36) 他塞了一块糖在嘴里。(李临定 1993:207)

彼はキャラメルをひとつ口に押し込みました。(同上)

VI、邢福义(2009)

邢福义(2009:220-221)では、「述語の後ろの介詞はよく述語の後ろに粘着する」と指摘している。伝統的な構造主義言語学では、“在+处所”の連語全体は述語の補語だが、介詞の「粘着性」の原因ということから、“在+处所”を連語全体とせず、“V+在了”を一つの“动补结构”と説明している。

(37) 她全身的力量集中在了她胸中的一点。(邢福义 2009:221)

彼女の全身の力が胸の中の一点に集中した。(筆者訳)

例(37)のような文は、読み方から見ると、“她全身的力量集中’在了她胸中的一点。”は不自然で、“她全身的力量集中在了’她胸中的一点。”と読む方が正しい。音節の角度からも「“在+处所”の連語全体性を突破し、“V+在了”が一つの“动补结构”になる。」ことを証明している。

(38) 婆婆病倒在床，我精心照顾。(邢福义 2009:221)

おばあちゃんが病気で倒れたので、私は心を込めて看病した。(筆者訳)

しかし例(38)の場合は“病倒’在床”と読む方が妥当で、“在床”の部分は補語となる。述語が複雑で、「粘着性」の説は全ての例文に通用しない。邢福义(2009)もこの問題についてまだ十分に検討しているわけではないが、筆者は“婆婆病倒”“婆婆在床”と分析し、“婆婆病倒在床”は連動文と考えている。

近年、邢福义(2009)を代表とする少数の研究者達は、動後系の“在+处所”の“在”を動詞として扱っている。これは筆者の観点と同じである。

VII、成戸浩嗣(2009:117-123)

成戸浩嗣(2009:117~123)では、「V+在・トコロ」構造に関する文意の「非意図性」を強調している。成戸浩嗣の言う非意図性とは偶然な状況によって生じる事柄である。たとえば、“他踢在自行车车条上。”[彼は自転車のスポークを蹴った。]と比べると、“到处乱踢，他踢在自行车车条上。”[あちこち蹴りつけているうちに、たまたま自転車のスポークを蹴ってしまった。](2009:117)のような偶然的な状況である。このような状況を設定していれば、初めて自然な表現となる。

0.2.4 連語論について

中国語の“在+处所”及び存在文に用いられている場所名詞の日本語訳を見てみると、よく日本語の格付き場所名詞の格「に格」、「で格」、「へ格」、「を格」などで訳されて

いる。以下では二人の日本人研究者による「に格」、「で格」、「へ格」、「を格」の場所名詞の格に関する連語論の角度からの分析を簡単にまとめる。

0.2.4.1 「ありかのむすびつき」とその下位分類の「立ち居のむすびつき」

高橋弥守彦（2009:197～223）では、主体のありかを意味する連語を「ありかのむすびつき」と言う。その下位分類として「出現のむすびつき」（「(熊が)川原に現れる」）、「立ち居のむすびつき」（「椅子に座る」）、「存在のむすびつき」（「(妹が)母のそばにいる」）、「消滅のむすびつき」（「人ごみの中へ消えていく」）などがある。「ありかのむすびつき」の下位分類の一つである「立ち居のむすびつき」（「夏枝は再びピアノの前に座った。」p250）は、ある場所に立ち居する主体の運動を意味する連語である。

鈴木康之（2011:30～33）では、「立ち居のむすびつき」（「教壇に立つ」）についての指摘がある。鈴木康之では、「教壇に立つ」のように、「に」のカザリ名詞が場所を表していて、カザラレ動詞がその場所へ「立つ」とか、「寝る」とかのように、その存在を実現させることを意味する連語を「立ち居のむすびつき」と考えている。「立ち居のむすびつき」について、二人の研究者の意見は一致している。

0.2.4.2 「とりつけのむすびつき」と「とりはずしのむすびつき」

高橋弥守彦（2009:21）は、「バッジをポケットにつける」「だんごをくしからはずす」のような「に格」の場所名詞を用い、とりつけ動詞、そしてとりはずし動詞をカザラレとし、場所を意味する名詞をカザリとする連語をそれぞれ「とりつけのむすびつき」「とりはずしのむすびつき」と言っている。

鈴木康之（2011:18）によれば、「ものへのはたらきかけ」の下位分類として、「壁にポスターを貼る」（「とりつけのむすびつき」）、または「はしらから時計を外す」（「とりはずしのむすびつき」）のように、ものの存在する空間的な環境に関わって実現される人間の行為を意味する連語がある。

0.2.4.3 「到着のむすびつき」

高橋弥守彦（2009:109～128）は、「学校に着く」と「二階へ駆け上がった」のように、「に格」と「へ格」の場所名詞を用い、到着を意味する動詞をカザラレとし、場所を意味する名詞をカザリとする連語を「到着のむすびつき」と言っている。鈴木康之（2011:26）は、「空間的な到着のむすびつき」は「駅に着く」のように、「に格」のカザリ名詞が場所を表し、カザラレ動詞がその場所に到着する連語を言うと言っている。

0.2.4.4 「移動のむすびつき」

高橋弥守彦（2009:79～85）では、ある空間を移動する「川沿いの小道を走った。」のように、移動を意味する動詞をカザラレとし、場所を意味する名詞をカザリとする連語を「移動のむすびつき」と名づけている。鈴木康之（2011:28）では「を格」の飾り名詞で示される場所を舞台として、そこでの移動動作を実現させることを「空間的な移動のむすびつき」（「いなか道を帰る」）と指摘している。

0.2.4.5 「つくりだしのむすびつき」

鈴木康之（2011:22）には、カザラレ動詞で示されるはたらきかけによって、ヲ格のカザリ名詞で示されるものがつくりだされることを意味する連語が、「つくりだしのむすびつき」（「小屋を立てる」）であると指摘している。また、人類が「ものにはたらきかけて、なにかをつくりだす」という具体的な活動を繰り返して、「ごはんをたく」「おゆをわかす」というような結果の状況を想定するようになったのだろうとも指摘している。

0.2.4.6 「消滅のむすびつき」

高橋弥守彦（2009:233）では「消滅のむすびつき」は、消滅を意味する動詞をカザラレとし、主体の消滅する場所、または消滅する前にいる主体の離れる場所をカザリとする連語によって実現されている。

参考文献

- 吕叔湘(1943) 《中国语法要略》商务印书馆。
- 吕叔湘(1946) 《从主语、宾语分别谈国语句子的分析》商务印书馆
- 周祖谟(1957) <表示存在或出现的宾语和表示处所的状态语>《语法和语法教学》
- 陈廷珍(1957) 《汉语中处所词作主语的存在句》《中国语文》
- 王还(1957) <说“在”>《中国语文》第二期
- 丁声树(1961) 《现代汉语语法讲话》商务印书馆
- 范方莲(1963) <存在句>《中国语文》第五期
- 汤廷池(1977) 《国语的“有字句”与“存在句”》
- 吕叔湘(1980)(1999) 《现代汉语八百词》商务印书馆
- 张静(1980) 《新编现代汉语》上海教育出版社
- 王还(1980) <再说说“在”>《语言教学与研究》第二期
- 范继淹(1982) <论介词短语“在+处所”>《语言研究》第一期
- 宋玉柱(1982) <定心谓语存在句>《语言教学与研究》
- 呂叔湘編、牛島徳次、菱沼透訳(1982) 『中国語文法用例辞典一『現代漢語八百詞増訂本』日本語版』東方書店
- 言語学研究会編(1983) 『日本語文法・連語論』
- 鈴木康之(1983) 「連語とは何か」『国語教育 73号』むぎ書房
- 李临定(1986) 《现代汉语句型》商务印书馆
- 李临定(1988) 《汉语比较变换语法》中国社会科学出版社
- 吕叔湘(1990) 《吕叔湘文集》商务印书馆
- 戚雨村(1993) 《语言学百科全书》汉语辞书出版社
- 李临定(1993) 『中国語文法概論』宮本一郎訳光生館
- 谭景春(1996) <一种破损意的隐现句>《世界汉语教学》第二期
- 刘月华潘文娛等著(1999) 『現代中国語文法総覧』相原茂監訳、片山博美、守屋宏則、平井和之訳くろしお出版。
- 任鷹(2000) <静态存在句中“V了”等于“V着”现象解析>《世界汉语教学》
- 宋玉柱(2007) 《现代汉语存在句》语文出版社
- 邢福义(2009) 《汉语语法学》东北师范大学出版社
- 成戸浩嗣(2009) 『トコロ表現をめぐる 日中対照研究』好文出版社
- 张先亮、范晓等(2010) 《现代汉语存在句研究》中国社会科学出版社
- 鈴木康之(2011) 『現代日本語の連語論』日本語文法研究会(彭广陆、毕晓燕译(2013))
《现代日语词组学》北京大学出版社)

第一章 “在字句” と存在文

本節では沈家煊に倣い、“在+处所”を用いる文を“在字句”⁷⁾という。中文日訳をする場合、一般的に“在+处所”は、日本語では格付き場所名詞で訳す。一般的なことを言えば、日本語には形態変化があり、名詞の格が決まっているので、語順は中国語より自由で、文構造は豊富となる。しかし、中国語では、“在+处所”を用いる文の語順は、下記に挙げる例文のとおり、日本語の格付き場所名詞の文中における位置より豊富である。

筆者は“在字句”を分類する李臨定(1993:203-208)の分け方に倣い、用法及び語順の違いにより、例(1)を基本用法として、“在字句”を以下の5種類に分ける。

(1) 书在桌子上。(作例)

本は机の上にある。(筆者訳)

(2) 在桌子上他放了几本书。(李臨定 1993:204)

机のうえに、彼は本を数冊置きました。(同上)

(3) 他在桌子上放了几本书。(李臨定 1993:203)

彼は机のうえに本を数冊置きました。(同上)

(4) 他把几本书放在桌子上。(李臨定 1993:206)

彼は本を数冊、机の上に置きました。(同上)

(5) 他放了几本书在桌子上。(李臨定 1993:207)

彼は本を数冊机の上に置きました。(同上)

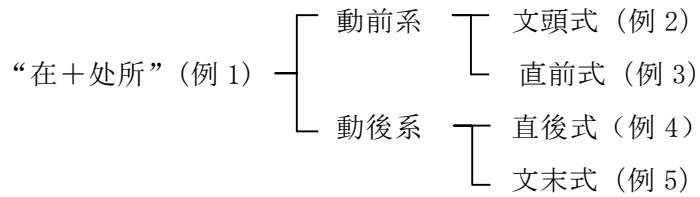
上記に挙げる5つの例文では、例(1)の“在”は文中の本動詞で、“在+处所”の基本用法だと見られている。動詞との関係で、“在+处所”を文中のどの位置に用いるかにより、下記の[表 1-1]が作られる。[表 1-1]で示すように、本稿では基本用法から派生した用法を「動前系」(例 2、3)と「動後系」(例 4、5)の二つに大きく分ける。“在+处所”における“在”の用法から見ると、「動前系」の“在”が介詞であり、「動後系」の“在”は動詞である。語順から見ると、「動前系」の“在+处所”は文中の述部の前に用い、「動後系」の“在+处所”は動詞“放”の後ろに用いる。

「動前系」⁸⁾は、更に二つの文構造に分けられる。“在+处所”を文頭に用いる「文頭式」(例 2)と述部の直前に用いる「直前式」(例 3)である。「動後系」にも二つの下位分類がある。“在+处所”を本動詞の直後に用いる「直後式」(例 4)と数量詞付きの客語の後ろに用いる「文末式」(例 5)である。これらは以下に表示する。

⁷⁾ 沈家煊《“在”字句和“给”字句》(1999)では、“在”を用いる文を“‘在’字句”と呼んでいる。

⁸⁾ 「動前式」の述部は動詞に限らず、形容詞なども「動前式」の述部になれる。例えば“在国外，奢侈品比国内便宜。”[海外では、ブランド品が国内より安い。](作例)

[表 1-1] “在字句”の全体像



上記の5つの文構造は、いずれもモノ“書”の「存在」を意味する。この5例の中では、動詞“在”で作る例(1)が基本的な用法である。この文以外は、文中における場所名詞の位置が明らかになっている。場所名詞の明らかな例(2)から(5)までの基本的な文意は同じだが、各文構造には使いやすい会話の場面があり、文中の述部にも使いやすい動詞があり、動詞の種類も多少違ってくる。また、例(2)(3)は文中の施事成分“他”を省略すると、“在桌子上放了几本书。”のような、典型的な存在文となる。

中国語では例(1)から(5)までの文は、いずれも主述文だが、上記の例(2)(3)の主述文から施事成分“他”を省略すると、典型的な存在文“(在)桌子上放了几本书。”となる。施事成分“他”の省略から、モノの存在を意味する主述文はやはりモノの存在を意味する存在文と密接な関係のあることが証明できるであろう。

中国語の“在+处所”に対応している日本語の格付き場所名詞の訳例と語順も幾つかある。たとえば、例(1)から(5)までの“在+处所”の“在”は「ニ格」に訳されているが、筆者の調査によれば、出来事との関係により、場所名詞は「へ/デ/ヲ/カラ」などの各格でも訳されている。格付き場所名詞の格の違いは、出来事の内容により、場所名詞をどのようにみるかによって、場所名詞の格が分かれてくる。たとえば、「ニ」格の場所名詞は文中に現れるモノのありかを表す。

日本語の語順も例(2)の訳例[机のうえに、彼は本を数冊置きました。]を例にとれば、[彼は机のうえに本を数冊置きました。][彼は本を机のうえに数冊置きました。][彼は本を数冊机のうえに置きました。]などとも訳される。日本語の語順が多様なのは、これらの訳文からも判断できるように、名詞の格が発達しているところに起因している。

本章では連語論などの学説を用いて、“在字句”の“在+处所”と日本語の格付き場所名詞の格との対応関係を探ることにする。

第一節 「動前系」の“在+处所”について

一文頭式及び直前式

1.1.1 はじめに

文中における“在+处所”構造と本動詞との位置関係から、本節では本動詞の前に用いる中国語の“在+处所”構造を「動前系」構造と名付ける。文構造から見ると、「動前系」構造には二つの構文形式がある。一つは“在+处所”を主語の前に用いる「文頭式」⁹⁾(例6、7)であり、もう一つは“在+处所”を本動詞の前に用いる「直前式」(例8、9)である。この二構造の“在”は介詞として、文中でどちらも物事の行われる場所を表す標識として使われている。

- (6) 她在生人面前，她努力奋斗，努力给人家以聪明、大方、讲礼、讲理、文明可亲的印象。(《插队的日子》)

人前では聡明で上品で、礼儀正しく、道理をわきまえ、教養豊かに見えるよう、懸命に努力した。(『遙かなる大地』)

- (7) 在电话里我听到了熟悉的声音。(李临定 1993:204)

電話で、私はよく聞き覚えている声を耳にした。(同上)

- (8) 我在家里刚喝了茶来的，倒是你恐怕渴了，我出去找点水你喝。(《关于女人》)

わたしは家でお茶を飲んできたところだけど、あなたはのどが渴いているでしょう。お湯をもらってきます(語料庫『女について』)

- (9) 彼得在海员俱乐部工作。(刘月华 1999:237)

ピーターは船員クラブで働いている(同上)

先行研究によると、これまでの研究者は“在+处所”を動詞の前後に用いる「動前系」と「動後系」についてはよく研究してきている。しかし、動前系の下位分類である文頭式と直前式の区別についての研究はあまり見当たらない。本節では両者の違いについて検討する。例(6)(7)は文頭式構造で、例(8)(9)は直前式構造である。一般に文頭式と直前式構造は文中で下記のように置き換えられるが、まれに両構文形式が置き換えられない場合もある。

- (10) 她在生人面前努力奋斗，努力给人家以聪明、大方、讲礼、讲理、文明可亲的印象。(作例)

彼女は人前では一生懸命頑張り、聡明で、おおらかで、礼儀正しく、理路整然とし、進歩的で親しみやすい印象を人に与えようと努力した。(筆者訳)

- (11) 我在电话里听到了熟悉的声音。(作例)

私は電話でよく聞き覚えている人の声を聴いた。(筆者訳)

⁹⁾ “在我们的银河系之外还有别的星系吗? [我々の世界の外に他の宇宙があるのだろうか (Internet Corpus)] のような、“在+处所”は文中の主題になるケースも文頭式と考えている。

(12) 在家里我刚喝了茶来的，倒是你恐怕渴了，我出去找点水你喝。(作例)

家で私はお茶を飲んできたばかりだったが、あなたはのどが渴いているでしょう。お湯をもらってきます。(筆者訳)

(13) *在海员俱乐部彼得工作。(作例)

船員クラブで、ピーターは仕事をしている。(筆者訳)

動前系である直前式と文頭式の置き換えは、一般的には可能である。たとえば、直前式の例(10)(11)は、文頭式の例(6)(7)を置き換えた構文形式であり、文頭式の例(12)(13)は、直前式の例(8)(9)を置き換えた構文形式である。置き換えた作例のなかの例(13)は非文で、直前式の例(9)は、このままでは文頭式に置き換えることができないことが分かる。しかし、例(6)(7)と例(10)(11)のように置き換えの可能な文もしばしばみられる。たとえば、以下の文であれば置き換えが可能である。

(14) 彼得在海员俱乐部已经工作五年了。(作例)

ピーターは船員クラブでもう5年働いている。(筆者訳)

(15) 在海员俱乐部彼得已经工作五年了。(作例)

船員クラブで、ピーターはもう5年働いている。(筆者訳)

本節では、中国語“在+处所”の「文頭式」構造と「直前式」構造の語用的な区別を比較する。

1.1.2 本動詞の前に用いる“在”

これまでの研究者による本動詞の前に用いる“在+处所”についての指摘は、いろいろと多彩である。本節で、これまでの研究者の観点を総合的にまとめると、以下のようになるであろう。

「動前系」の“在+处所”は、ある動作や行為が発生する前、或いはある状態になる前にすでに存在している何らかの空間や範囲¹⁰⁾を示す。その“处所”はありさまや出来事¹¹⁾が実現¹²⁾する空間、或いは範囲である。

(16) 在她想来，北京还有治不了的病么。(《插队的故事》)

彼女の考えでは北京には治せない病気などなかった。(『遥かなる大地』)

(17) 在他家里我遇见了一位老朋友。(李临定 1993:204)

彼の家で、私は一人の古い友人に出会いました。(同上)

¹⁰⁾ 本稿では「範囲」を「抽象的な空間」と考え、“在+处所”は「抽象的な空間」と「実在的な空間」が示すことができると考えている。

¹¹⁾ 主体の「状態」「状況」「動作」「様子」などを総括して「主体のありさま」という。客体に対する主体の働き掛けを「主体の出来事」という。

¹²⁾ 主語、客語などは「実在する物質が空間に存在する」とみなされているのに対して、動詞、形容詞などは「抽象的なモノが空間に実現する」と考えられている。

(18) 爷爷在阳台上放了几盆花。(同上)

おじいさんはバルコニーに数鉢の花を置きました。(同上)

(19) 两个老太太在小厨房里躲了老半天啦。(《丹凤眼》)

婆さま二人は半日近くも台所に隠れていたのである。(『鳳凰の眼』)

例(16)(17)は「文頭式」構造であり、例(18)(19)は「直前式」構造である。例(16)の“在她想来”は“在+处所”ではないが、“她想来”が“处所”の位置にあることにより、“处所”と見なせる¹³⁾。[彼女の考え]は[北京に治せない病気がない]という状態が「実現する範囲」である。[彼女]はそのように考えているが、ほかの人のなかには必ずしもそうとは限らない考えもあるだろう。例(17)では、[彼の家]は[古い友人に出会った]という状況が「実現する場所」である。例(18)では[数鉢の花を置いた]という状況の「実現している空間」が[バルコニー]である。例(19)では、[台所]は婆さま二人が[半日近くも隠れていた]という状況が「実現する場所」である。

この4例はみな「ありさま」が何らかの空間や範囲で「実現」をする文である。しかし、「文頭式」と「直前式」両構造は、伝えようとする意味が明らかに違っている。その違いについて、筆者は“在+处所”と主語と本動詞との語順関係に起因するものと考えている。

1.1.3 「文頭式」の“在+处所”

文構造から見ると、「文頭式」構造は他の文成分に先んじて、“在+处所”を文頭に用いている。本構造は空間がはじめにあり、次に主体が出てくる。文頭にある場所名詞は、一般には主語と述語となる動詞や形容詞の状況語となり、状況を強調することにより、主語と述語を修飾する機能を果たしている。

(20) 在生人面前，她努力奋斗，努力给人家以聪明、大方、讲礼讲理、文明可亲的印象。(《插队的日子》)

人前では聡明で上品で、礼儀正しく、道理をわきまえ、教養豊かに見えるよう、懸命に努力した。(『遥かなる大地』)

(21) 在河边他小心地走着。(李临定 1993:205)

川べりを、彼は気を付けて歩いています。(同上)

(22) 在银行里他已经工作了5年。(李临定 1993:205)

銀行で彼はすでに5年働きました。(同上)

¹³⁾李临定(1993:212)には“警察在群众的协助下捉住了罪犯。”[警察が大衆の協力で、犯人を捕まえました。]のような例文が挙げられ、“在群众的协助下”のような場合は抽象的な意味を表すと指摘している。ここの“在她想来”も抽象的な意味を表し、「場所」の意味のメタファ用法である。“在+处所”の場所を示す基本用法とメタファ用法との関係について別稿に譲る。なお、高橋弥守彦(2011)では枠組み理論により、この言語現象を理論化している。

(23) 在一万一千米以上的高空，温度是不随着高度而改变的。(刘月华 1983:172, 1999:328)

一万一千メートル以上の上空では、温度は高度に応じた変化を見せません。
(同上)

(24) 在我们同祖先共享的这个古老文化空间里，堆积着多种神秘性的转喻符号。(CCL 語料庫)

我々と先祖代々が共有している古い文化の空間には、様々な神秘的な比喻記号がうずたかく積まれています。(筆者訳)

例 (20) から (24) まではいずれも「文頭式」構造である。例 (20) (21) (22) は、主体が人間である。例 (20) は「彼女」の努力の様子を描写し、例 (21) は「彼」の立ち居の状態を描写している。例 (22) では「彼」の経歴のことを描写している。例 (23) では主体がモノ“温度”であり、「ありさま」では「温度変化は見せません」ということを説明している。例 (24) では、“在+处所”は状況を表しているが、文頭にあり、客体“多种神秘性的转喻符号”はあるが主体がないので、空間を表す主語である。その場合の本動詞は一般には自動詞であり、状態を表している。

文頭式は構造から見ると、“在+处所”を文の一番前に用い、状況語として空間を表している。結果から見ると、文中の空間は人間や物が誕生する以前に存在している。具体的な空間である場合、「ありさま」が実現する場所(例 21)を示す。抽象的な空間なら、「ありさま」は実現する範囲(“在社会主义社会中……”[社会主義社会では…])や条件(“在发展生产的基础之上……”[生産の発展を土台にして…])など(刘月华 1999:239)である。

「文頭式」構造の「主語+述語」だけでも完全な文である。換言すれば、「文頭式」の述語は動詞の場合が極めて多く、述語にあたる本動詞は一般に目的語を伴うか、動態助詞が付いている。文頭の“在+处所”は、述語にとってかならず必要とするパーツ(状況語)ではないであろうと考えている。

意味的には、“在+处所”を取ると、残る文成分は主語と述語¹⁴⁾で、「誰かが(なにかが)どうした」の意味である。時間、空間に関連する文成分が述語の部分に出ない場合が多いが、「どうした」を説明するには、述語の部分では「いつか、どこかの空間で、どんな様子で実現する」の意味を表さなければならない。つまり、既に「時間」「空間」「動作・変化」¹⁵⁾の意味を伝えている述語部分は「主体のありさま」についての描写であり、意味的には「どんな様子で実現する」のかが文の一番重要な点である。

¹⁴⁾本節では、文頭に用いる“在+处所”は一般には状況語であり、一般の文構造と同様、主語の後ろの部分に「述語」という。

¹⁵⁾述語が形容詞の場合(“在国外，奢侈品比国内便宜。”「海外では、ブランド品が国内よりやすい。」)は「状態」で、動詞の場合(“在院子里，爷爷在纳凉，妈妈在洗碗。”「庭では、おじいさんが涼んでいて、ははが茶碗を洗っている。」)は「動作」である。

一般には「時間」と「空間」の要素は常識とされていて、重要視されていない、述語は普通「ありさま」だけを述べている。しかしながら、仮に「時間」「空間」の要素が述語に加わっても、文は成立する。そうであっても、文の重点は同じく「主体のありさま」である。たとえば、次の例文を見てみよう。次の文には状況語“在銀行里”があるが、文の重点はやはり「主体のありさま」である。

(25) 他在銀行里已经工作了5年。(李临定 1993:206)

彼は銀行ですでに5年働きました。(同上)

よって、文頭にある“在+处所”は文の付加成分であり、場所の強調か、抽象的な範囲の限定か、条件の強調を表すかの役割を果たしているだけである。「文頭式」は状況語の強調であり、主体の「ありさま」を描写するのによく用いられている、と言えるであろう。

1.1.4 「直前式」の“在+处所”

「直前式」構造は本動詞の前に“在+处所”がある構造である。一般的には主体があつて、その後に空間がある。“在+处所”は主語と本動詞の間に用い、動詞連語の状況語となる一番基本的な構文形式「主語+状況語+述語+客語」を作る。直前式は文頭式と違い、“在+处所”は「状況語+述語(+客語)」の構造で、「ありさま」の一部になっている。

(26) 国内首座赛车城在北京石景山游乐园建成，日前通过国家有关部门检测后对外营业。(语料库 cncorpus.org)

国内最初の自動車競技場は北京の石景山遊園地に造りました。数日前国家の検査機構の点検に合格したことにより、市民に開放して、営業を始めました。(筆者訳)

(27) 星期日我们全家在张老师那儿玩了一天。(刘月华 1999:237)

日曜日に我々一家は張先生のところで一日遊んだ。(同上)

(28) 年轻人的言语十分激烈，逼迫得倪吾诚无法遁逃。所有的这些问题，比这些更多得多也更严重得多的问题都在倪吾诚的头脑中、心目中存在着。(语料库《活动变人型》)

若者たちの言葉は鋭く、倪吾誠は逃げようがなかった。これらの問題全部と、それより遥かに由々しい問題が倪吾誠の頭にも胸にも詰まっている。(語料庫『応報』)

(29) 每一个庄稼人都在心里边掂着分量。(《金光大道》)

百姓たちのだれもが内心、このスローガンの真意をはかりかねていた。(『輝ける道』)

(30) 为了观察方便她们在窗户纸上插了一个小洞，完全够放得下一只眼睛。(《金光大道》)

観察しやすいように、女たちは窓に小さな穴を開けた。(『輝ける道』)

例(26)から(30)までは「直前式」の例である。例(26)は「ありさま」についての描写で、「競技場を築き上げた」ことを描写している。例(26)から(29)までは主体の「出来事」を描写する。例(27)は「我々一家が一日遊んだ」について描写している。例(28)では「問題が詰まっている」ということについて描写している。例(29)では「スローガンの真意を測りかねている」ことについて説明し、例(30)では「窓に穴を開けた」ことを説明している。

上記の直前式の文のうち、「文頭式」に置き換えられないのは例(26)(28)(29)である。例(26)では、客語が意味上の主体であり、述語は“在北京石景山游乐园建成”である。本動詞“建成”は自動詞であり、動態助詞も伴っていない。主体(目的語)が受けた動作の結果を表し、ありさまを述べる文である。その行為“建成”も状況語が必要で、動詞は状況語の“在+处所”の後ろに用いられ述部を作る。述部は出来事を表し「時間」「空間」「行為」を伝えている。例(28)(29)では総括を表す副詞“都”が文構造に影響を与えるので置き換えられない。この問題は別稿で検討する。

“在+处所”を動詞の前に用いる上記の直前式を文頭に用いる文頭式に置き換えられる文もある。

(31) 星期日, 在张老师那儿我们全家玩了一天。(作例)

日曜日、張先生のところで我々一家は一日遊んだ。(筆者訳)

(32) 为了观察方便, 在窗户纸上她们插了一个小洞，完全够放得下一只眼睛。(作例)

観察しやすいように、窓に女たちは小さな穴を開けた。(筆者訳)

「直前式」と「文頭式」の意味上の重点は違っている場合もある。例(31)(32)は例(27)(30)から置き換えた「文頭式」の作例である。例(27)と(31)を比べると、両例文の文意の重点はあまり変わっておらず、どちらも“我们全家”の「出来事」“玩了一天”である。ただし、例(31)のように時間と空間はどちらも主体の前後に用いられる。

例(27)(31)に比べ、例(30)(32)はどちらも「彼女たち」の「出来事」を描写しているが、例(30)の意味上の重点は“她们”の「出来事」“在窗户纸上插了一个小洞”で、例(32)の重点は状況語“在窗户纸上”の「ありさま」“她们插了一个小洞”にある。“在窗户纸上”が状況語であり、“小洞”が行為“插”の客語だからである。

上記の例文からも分かるように「直前式」では、客語の「ありさま」を描写する機能もあれば、主体の「出来事」を説明する機能もある。「出来事」を描写する比率は「文頭式」より多い。

1.1.5 「文頭式」と「直前式」の区別

「文頭式」と「直前式」両者の意味はほとんど同じである。しかし、「文頭式」は主体の「ありさま」の描写に用いる頻度が極めて高いが、逆に「直前式」は主体の「出来事」を描写する時によく使われる傾向にある。

- (33) 在我们的银河系之外还有别的星系吗? (CCL Corpus)
我々の世界の外に他の宇宙があるのだろうか (CCL Corpus)
- (34) 在他家里我遇到了一个老朋友。(李临定 1993:204)
彼の家で、私はひとりの古い友人に出会いました。(同上)
- (35) 我们牵着“黑黑”在大山上跑, 喊。(《插队的故事》)
われわれは“黑黑”を連れて喚声をあげながら大きな山を駆け回った。(『遙かなる大地』)
- (36) 说你在矿上工作? (《盖棺》)
あなた炭鉱で働いていらっしゃるんですってね。(『棺を蓋いて』)

「文頭式」の例(33)(34)の主語は“银河之外”、“我”であり、述部は“有别的星系”, “遇到了老友”である。例(33)では、空間が主語となっているため、それ以外の「空間」と「時間」の意味は字面からは見えないが、それらはいずれも「空間」、「動作」、「時間」の要素のある事件を表している。例(34)は「空間」“在他家里”が状況語となっている。

「直前式」形式の例(35)(36)では、主語が“我们”、“你”であり、文中の(状況語と)述語は“在大山上跑, 喊”“在矿上工作”である。その中の本動詞“跑, 喊”, “工作”は、ただ「動作」を表しているだけであり、「空間」は“在+处所”が加わってから生じ、「時間」は文中には現れていないが、文意は時間のなかで発生する、と言える。

文中から、“在+处所”の部分を取っても、文が「空間」、「動作」、「時間」の三要素揃えているならば、両形式を置き換えてもほぼ同じ意味を表せる。そうでなければ、置き換えることができない。

[表 1-2] 動前系の文構造について

動前系	付加成分	主語	述語 (空間&時間&行為・変化)
文頭式 ¹⁶⁾	“在+处所”	誰か&何か	出来事
直前式	なし		“在+处所” + 行為・変化

¹⁶⁾文頭式の“在+处所”は対象語でありながら、主語でもある存在文の場合を除く。

上表から見れば、文頭式の構文形式は直前式の構文形式に比べると、文頭に加わっている“在+処所”の部分の多いことが分かる。文頭式は「空間」の意味を更に強めることができ、「ありさまの描写」をより明らかにするのに適する文になっているからであろう。

1.1.6 おわりに

これまでの研究者はよく本動詞の前に用いる“在+処所”を一つの分類として分析している。しかし、筆者の分析によれば、動前系の“在+処所”は「ありさま」と「出来事」を述べる二種類の意味の状況を表すことができる。

本節での上記の分析により、文をより明確に分析するには、「動前系」の“在+処所”を「文頭式」と「直前式」の二つに分けて分析の方がさらに詳しい結論が得られることを明らかにした。

「文頭式」の“在+処所”は主語と述語を修飾する“在+処所”自体が主語のケースである場合もある。文は空間、範囲を強調して、主体の「ありさま」を言うのがメインの用法で、場合場面の説明、定義を下すなどの場合によく用いる。「直前式」に置き換えると、文の重点は同じく主体の「ありさま」であると考えている。

「直前式」の“在+処所”は述語の一部分で、後ろに本動詞を伴っている。一般的に言えば、主体の「出来事」を描写する文である。時に“在+処所”の空間は次の文のように、主語“桌上”である場合、たとえば、“(在) 桌上放着书。”[机には本が置いてある。]では、文の重点は主体の「出来事」を描写することではなく、主語の「ありさま」を描写する存在文になる。

第2節 「動前系」の“在+处所”に対する日本語訳

1.2.1 はじめに

“在+处所”は上掲の例(1)“书在桌子上。”[本は机の上にある。]を基本用法として、(2)“在桌子上他放了几本书。”[机の上に、彼は本を数冊置きました。](3)他在桌子上放了几本书。[彼は机のうえに本を数冊置きました。]のように、本動詞の前に用いることができる。本動詞の前に用いる“在+处所”を「動前系」と言う。構文構造から見ると、「動前系」には二つの形式がある。主語の前に用いる“在+处所”を「文頭式」と言い、本動詞の前に用いる“在+处所”を「直前式」と言う。この二構造の“在”はいずれも介詞として使われている。

(37) 在电话里我听到了熟悉的声音。(李临定 1993:204)

電話で、私はよく聞き覚えている声を耳にした。(同上)

(38) 在生人面前，她努力奋斗，努力给人家以聪明、大方、讲礼、讲理、文明可亲的印象。(《插队的日子》)

人前では聡明で上品で、礼儀正しく、道理をわきまえ、教養豊かに見えるよう、懸命に努力した。(『遙かなる大地』)

(39) 两个老太太在小厨房里躲了老半天啦。(《丹凤眼》)

婆さま二人は半日近くも台所に隠れていたのである。(『鳳凰の眼』)

(40) 彼得在海原俱乐部工作。(刘月华 1999:237)

ピーターは船員クラブで働いている。(同上)

例(37)(38)は本節の言う文頭式の構文構造で、例(39)(40)は直前式の構文構造である。動前系の下位分類である文頭式と直前式とでは、どちらを用いても表現する内容はほぼ同様であり、一般的には両者の位置は互換できる。しかし、両者では表現上の傾向が多少違っている。“在”を介詞として扱う「動前系」の“在+处所”に対応する日本語訳は、その用法により場所名詞の格がいくつかに分かれる。

筆者の論文『“在+处所”の“在”に対応する日本語訳 - 本動詞の前に用いる場合 - 』で、「文頭式」と「直前式」の表現上の傾向を分析したが、中国語の“在+处所”に対応している日本語の格付き場所名詞は、どんな傾向を見せているのであろうか。前記の論文の結論を参考にして、本節では中国語の“在+处所”と日本語との対応関係について検討することとする。

1.2.2 「動前系」の両形式

「文頭式」と「直前式」について、以下に例文を挙げ、両者の違いについて分析してみよう。まず、「文頭式」の例文を見てみよう。

- (41) 在他家里我遇见了一位老朋友。(刘月华 1999:204)
 彼の家で、私は一人の古い友人に出会いました。(同上)
- (42) 在生人面前，她努力奋斗，努力给人家以聪明、大方、讲礼讲理、文明可亲的印象。(《插队的日子》)
 人前では聡明で上品で、礼儀正しく、道理をわきまえ、教養豊かに見えるよう、懸命に努力した。(『遙かなる大地』)
- (43) 在一万一千米以上的高空，温度是不随着高度而改变的。(刘月华 1999:328)
 一万一千メートル以上の上空では、温度は高度に応じた変化を見せません。
 (同上)

例 (41) (42) (43) はいずれも「文頭式」である。一般的に“在+处所”は主語と述語を修飾する、文頭の“在+处所”は文の主題¹⁷⁾と見られる場合が少なくない。文は空間、範囲を強調して、主語の「ありさま」を表すのがメインの用法で、場面の説明や定義を下す場合などによく用いる。これらが「文頭式」の主な特徴である。次に「直前式」の文を見てみよう。

- (44) 两个老太太在小厨房里躲了老半天啦。(《丹凤眼》)
 婆さま二人は半日近くも台所に隠れていたのである。(『鳳凰の眼』)
- (45) 为了观察方便她们在窗户纸上捅了一个小洞，完全够放得下一只眼睛。(《丹凤眼》)
 観察しやすいように、女たちは窓に小さな穴を開けた。(『鳳凰の眼』)
- (46) 星期日我们全家在张老师那儿玩了一天。(刘月华 1999:237)
 日曜日に我々一家は張先生のところで一日遊んだ。(同上)
- (47) 国内首座赛车城在北京石景山游乐园建成，日前通过国家有关部门检测后对外营业。(语料库 cncorpus.org)
 国内最初の自動車競技場は北京の石景山遊園地に作りました。数日前国家の検査機構の点検に合格し、市民に開放し、営業を始めました。(筆者訳)

例 (44) から (47) まではいずれも「直前式」である。本稿では“在+处所”を複合述語の一部として考えている。文は一般に主語の「出来事」を描写する(例 44 から 46)。しかし、時には主語“国内首座赛车城”が動詞“建成”の客体である場合、その客体の「ありさま」を描写する文になる(例 47)。

1.2.3 “在+处所”と格付き場所名詞との対応関係

本節は北京日本学研究中心の開発した《中日対訳語料庫》(第一版)(2003)を

¹⁷⁾ “在我们的银河系之外还有别的星系吗?” [我々の世界の外に他の宇宙があるのだろうか]
 (Internet Corpus) のような、“在+处所”が文中の主題になるケースも文頭式と考えている。

利用して、そのうちの6冊の小説の中から、“在+处所”を用いる例文を300例¹⁸⁾集めた。その中の132例は動前系の“在+处所”の例文である。動前系のうちの一つは、「主語+状況語+述語+目的語(客語)」を作るので、最もよく見られる形式である。意味的には、それらの例文は大きく「行為を行う空間」、「範囲を表す空間」、「存在義を表す空間」、「移動を表す空間」の4種類に分けられる。

筆者の収集した“在+处所”を用いる132例のうち、「行為を表す空間」の用例が一番多く56例である。「範囲を表す空間」、「存在を表す空間」、「移動を表す空間」の用例は、それぞれ32例、29例、6例である。この四種類の空間を表す用法以外に、働きかけの対象となる空間、到着を表す空間、消失を表す空間などを示す例文もあるが、合わせても10例にすぎなかった。これらは、いずれも空間における主体と出来事との関係を表している。

1.2.3.1 行為を表す空間

“在+处所”の最も基本的な用法は「存在を表す空間」だが、実際の例文の数から見ると、動前系の“在+处所”は、以下の例文に見られるように、主体の「行為を表す空間」を示すケースが一番多い。

(48) 这么着，在窗口遇见，可不止这一次啦，孟蓓对辛小亮的怨气，这一次也没出够哪。(《丹凤眼》)

そういうわけで、カウンターの窓口での二人の対決はこの一回にとどまらなかった。孟蓓の辛小亮にたいする怨みは、この一回で晴らせるようなものではなかったのである。(『鳳凰の眼』)

(49) 二弟在唐山读书，六妹在天津上学。(《关于女人》)

二弟が唐山で、六妹が天津の学校でそれぞれ勉強していた。(『女について』)

主体の「行為を表す空間」を示す場合は、主に「直前式」の“在+处所”である。日本語では、「で」格の場所名詞を用い、主体は一般に人間である。文は主に「人間の出来事」を表し、本動詞は主に“遇见”“读书”“上学”などの人間の行為である。

“在+处所”が指示する空間に、主体が存在するので、この用法が基本であり、主体の行為を表す空間の意味にとれる場合は、「存在を表す空間」の意味から発展したのではないかと考えている。

1.2.3.2 範囲を表す空間

筆者の収集した132例中、“在+处所”が空間的な範囲を表す例文は32例である。

(50) 在国外，如果你称赞一个女子长得漂亮，她会十分感谢你。在中国，如果你称赞一个女子美丽，她会打你一个嘴巴，骂你一声“流氓地痞”！（《活动变人型》）

¹⁸⁾中国語の“在+处所”を日本語に直訳している例文のみを集める。

外国の女の子は褒めると素直に喜ぶが、中国では逆に怒ってピンタを張られかねない、「不良、ゴロツキ」と罵られるのが落ちでしょう。(『応報』)

(51) 在轱辘把儿胡同9号，这话可就不同寻常啦。(《轱辘把胡同9号》)

轱辘把胡同九号においては特別な意味を持つ。(『轱辘把胡同九号』)

(52) 辛小亮在矿上是个人人瞩目的人物。(《丹凤眼》)

この辛小亮は炭鉱ではかなり目立つ存在であった。(『鳳凰の眼』)

「範囲を表す空間」は、日本語は一般的に「では」格を用いている。場合によっては「においては」などの後置詞も見られる。文意は「空間はある範囲に限られ、主語、主題が何らかの性質を表すか、主体が何らかの行為により、結果的にある状態を呈示する」の意味を示している。筆者の収集した“在+处所”を用いる文が「範囲を表す空間」を意味する例文は、大部分が「文頭式」であり、「直前式」の例文はほとんど見られない。

“在+处所”が「範囲を表す空間」を意味する用法も、「存在を表す空間」の意味機能から発展してきたのではないか、とは考えられる。

1.2.3.3 存在を表す空間

“在+处所”の最も中心的な意味は、ある空間における主体の存在である。筆者はこれを「空間的な存在」と名づける。300例の例文は、すべて前記の小説から集めた。「行為を表す空間」と「範囲を表す空間」を説明する“在+处所”のケースは極めて多いが、存在を表す空間の例文はわずか29例であった。

(53) 似乎在树端坐着一个人。(《活动变人形》)

梢に人が坐っているようだ。(『応報』)

(54) 一个倪藻吃着烤白薯上学去，另一个倪藻还在被窝里睡觉吧？我好象知道那个倪藻困得那个样儿，叫也叫不醒，一眼睛的眼眵……(语料库《活动变人形》)

一人は焼芋をかじりながら学校へ、もう一人は布団にくるまって眠りこけ、呼んでも起きはしない、目には目ヤニがいっぱい……(『応報』)

“在+处所”が主体の「存在を表す空間」を意味する29例では、「直前式」の例文の数が多く、文中の本動詞は人間の立ち居の動作を表し、日本語は全て「に」格の場所名詞を用いている¹⁹⁾。文は主に「人間やモノなどがある空間に結果として存在すること」を表している。

(55) 泥巴柜台上放着一只青釉酒坛，酒提儿挂在坛沿上。(语料库《红高粱》)

泥の勘定台には青磁の酒甕が一つ置いてあり、甕のふちに酒を汲むための長柄の杓子がかかっていた。(語料庫『赤い高粱』)

¹⁹⁾ 「に」格だけでなく、「へ」格の場所名詞も空間的な存在を表す機能があると考えているが、300例のなかでは、「へ」格の場所名詞を用いる例文は一例もでてこなかった。

筆者の集めた 300 例を分析すると、その中では“在+处所”がモノの存在する場所を意味する例文は一例もなかった。実例では、モノの存在を表す場合は、例 (55) に見られるように“在+处所”の“在”がすべて省略されていた。例 (55) のようなモノの存在する空間を表す場合 (存在文となる)、介詞“在”は場所名詞の前に用いないのが一般的である。

介詞“在”は場所を表す標識であり、文中の空間を明確にする役割を果たしている。「存在義」を表す場合は、主体の存在を表すだけなので、主体に変化が見られず、時間²⁰⁾と空間を明確にする介詞“在”の必要性を弱めるので、省き易くなっている。「存在義」以外の意味を表す場合、主体が不安定なので、場所名詞は“在”を求め、省き難くなっている。結果から見ると、“在”がある場合、“在+处所”は「存在義」より、「存在」以外の意味を表している。この原因によって、“在+处所”が存在義を表す用法の例文は少なく、主体が人間の場合に比べると、静態のモノが主語になる例文は一例もない。

“在+处所”の例文は、「文頭式」であれ、「直前式」であれ、主体の存在を表し、いずれも日本語の「に」格に対応している。しかし、「文頭式」の文は、主体の「存在」のありさまを描写し、「直前式」の文では、何らかの方式による主体の存在性を表している。

1.2.3.4 移動を表す空間

“在+处所”を用いる 300 例のうち、以下のように「を」格の場所名詞を用いて、主体が場所を移動する意味を表す例文は、わずか 6 例であった。

(56) 他们在狭窄的、每一阶都很高的楼梯上走着。(语料库《活动变人形》)

二人は狭くて嵩高い階段を上っていった。(語料庫『応報』)

(57) 我在各地飘泊，依然是个孤身汉子。弟弟们的家，就是我的家 (语料库《关于女人》)

私は各地を流れ歩き、あいかわらず独身であるが、弟たちの家は私の家だ。
(語料庫『女について』)

“在+处所”が「移動を表す空間」を意味する場合、中日両言語では表現方式が大きく異なっている。中国語では“在+处所”の基本用法「存在を表す空間」の意味機能から発展してきた「ある空間の中を移動などの方式で存在している」との角度から表現している。そのため、中国語ではいくら移動しようと、結果的に主体は場所名詞が指示する空間内にいる。文は主体の「移動」という出来事を表し、一般的には「直前式」の“在+处所”に対応している。日本語の場合は主体が「空間を移動する」視点から見ている。

²⁰⁾表面的には、“在+处所”は空間を限定しているが、本稿は“在+处所”が側面から、時間も限定していると考えている。

1.2.3.5 働きかけの対象を表す空間

今回、収集した 300 例のうち、“在+处所”が対象に働きかける行為の行われる空間を意味する例文は、結果的に合わせて 6 例であった。

(58) 对于讨厌一点的人，就在他们的情书上，打红叉子退了回去。(《关于女人》)
気に入らない相手には、恋文に真っ赤なバツ印をつけて送りかえした。
(『女について』)

(59) 辛小亮举起双掌……上上下下在脸上搓了好几把……(《丹凤眼》)
辛小亮は両手を眼に当てて強くこすり…顔を上から下まで何回もこすって… (『鳳凰の眼』)

上記の 2 例は 1 例が「に」格で訳され、1 例が「を」格で訳されている。例 (58) は「(彼女が) 恋文にバツつけ、恋文を送り返す」の意味で、「恋文」が主体の働きかける空間を表す場合、日本語訳では「に」格の場所名詞を用いる。例 (59) では、「辛小亮が顔を擦る」と訳されている。中国では“脸上”を主体の働きかける空間として扱っているが、日本語では「顔」は主体の働きかけるモノとして認識しているので「を」格で訳している。働きかけを表す空間が、もしも人間の体の部分なら、日本語は「モノ」として認識し、「モノ」なみに扱い、「を」格の場所名詞を用いる。

中国語では同じ働きかけの対象となる場所名詞であっても、日本語に翻訳する場合、行為の行われる空間を表す場合は「に」格を用いるが、空間をモノ的に扱う場合、「を」格を用いる。

主語の出来事を描写する文意の原因を表すためであろうか、収集した例文はほとんどが「直前式」である。

1.2.3.6 到着を表す空間

収集した例文のうち、“在+处所”が到着を表す空間の意味に用いられている例文は、結果的に以下に挙げる 2 例だけであった。

(60) 九点刚过，飞机在H市机场降落。(《活动变人形》)
九時を少し回った頃、H市の空港に着陸した。(『応報』)

(61) ……其中的小包裹是从各地方送到，在香港集中的。(《关于女人》)
……めいめいがいったん香港に送り、そこでひとつの小包にまとめて送ってきた (『女について』)

例 (60) は「飛行機が空港に着陸した、結果的に空港に存在した」の意味を表し、例 (61) では結果的に、「荷物が香港に届いた」の意味を表している。主体の出来事を描写するので、到着を意味する文はいずれも「直前式」である。

1.2.3.7 消失を表す空間

動詞“消失”などにより、“在+处所”は消滅を表す空間の意味を表せる。消失する空間を表すには、一般的に動作が発生する「に」格、及び出発点を表す「から」格を

用いる。300 例のうち、消失を意味する「に」格と「から」格に対応している実例は、わずか 2 例である。

(62) 老太太的脚声，渐渐的在甬道中消失了。(《关于女人》)

おばさんの足音は、少しずつ通路の中に消えていった。(『女について』)

(63) 那首歌谣和它所代表标志的生活，似乎从此在中国消失了。(《活动变人形》)

この歌とそれに象徴された生活も中国から消えたといえる。(『応報』)

例(62)は主体の消失する状態が、ある実在する空間で実現していることを意味し、例(63)はある事柄が空間から消えていることを意味している。前者であれば「に」格を用い、後者であれば「から」格を用いる。

1.2.4 おわりに

筆者の収集した例文から、「直前式」を使う頻度が「文頭式」より遥かに多いことが分かった。主語が省略されるケースを除いて、「直前式」の例文は約「文頭式」より 3 倍も多い。この点から“在+处所”で表す空間は、状況語として述語の前に用いられるのが一般的であると言える。これはごく一般的な「主語+状況語+述語+客語」の文型とも一致する。なお、本動詞の前の“在+处所”の両形式は、以下のグラフのように使う傾向が見られる。

[表 1-3] 動前系の使用上の傾向

場所名詞	場所名詞の格	文頭式	直前式
行為を表す空間 (132 例)	で	○	○ ²¹⁾
範囲を表す空間 (32 例)	では、においては	○	○
存在を表す空間 (29 例)	に	○	○
移動を表す空間 (6 例)	を		○
働きかけの対象を表す空間 (6 例)	に、を		○
到着を表す空間 (3 例)	に		○
消失を表す空間 (2 例)	から、に		○

²¹⁾ 例文の数から出した場所名詞の格である。一般的にはこのような傾向がある。「○」は例文の多いことを表す。直訳の場合は上のグラフのような傾向が見られるが、副詞と文構造の影響により、もっと複雑な文もある。

第3節 「動後系」の“在+处所”について

—直後式及び文末式—

1.3.1 はじめに

中国語の存在文には、“在+处所”を本動詞の前に用いる構造がある。これを「動前系」と名付け、その下位分類をさらに二種類に分け、「文頭式」と「直前式」と名付ける。一方、“在+处所”を本動詞の後ろに用いる構造もある。筆者はこれを「動後系」と名付ける。その下位分類を二種類に分け、「直後式」及び「文末式」と名付ける。本節ではこの2種類の異同について検討する。

(64) 紙片被主任拿过去, 郑重地放在死者的胸前。(《盖棺》)

主任はわたしから紙片を取りあげると鄭重に死者の胸に置いた。そして棺の蓋は再び閉じられた。(『棺を蓋いて』)

(65) 婆婆病倒在床, 我精心照顾。(邢福义 2009:221)

おばあちゃんが病気で倒れたので、私は心を込めて看病した。(筆者訳)

(66) 爱罗先珂君也跑出来, 他们就放一个在他两手里, 而小鸭便在他两手里咻咻的叫。(《呐喊》)

彼らは一匹をエロシエンコ君の両手のなかにおいてやった。あひるの雛は、彼の両手のなかでピイピイ鳴いていた。(『呐喊』)

(67) 你道共产党是傻瓜, 放一堆人在这儿, 让咱们吃么? (《金色的群山》

encorpus.org)

共産党はバカだと言いたいのか? わざと我が軍の前に軍隊を配置し、我々の好き放題にさせるというのか? (筆者訳)

上掲の四つの例文はいずれも動後系の“在+处所”である。例(64)(65)では“在+处所”を動詞の後に用いているので、この構文形式を「直後式」と筆者は名付ける。例(66)(67)では、“在+处所”を文末に用いているので、このような構文形式を「文末式」と名付ける。本節では、本動詞の後に用いる上記2種類の動後系の“在+处所”を巡って、主に以下の二つ問題について検討する。

一つ目は“在”の品詞分類の問題である。動詞の後ろに用いる“在”の品詞について、現段階の研究者の観点は大きく二つに分かれている。「“在”は介詞²²⁾」とする説と「“在”は動詞」とする説である。「“在”は介詞」の説では動詞の後ろの“在+处所”は、動詞の前と同様、すべて介詞と主張している。李臨定『中国語文法概論』(1993)、刘月华『現代中国語文法総覧』(1999)が、この説の代表的な研究者である。「“在”は動詞」とする説では、動詞とその後ろの“在”を複合述語と見なし、動詞と唱えてい

²²⁾テキストや文法書の中では、“介词”を「前置詞」と訳しているケースがある。

る。代表的な研究者は邢福义《汉语语法学》(1997)である。この二説はどちらが言語事実に相応しいのであろうか。

二つ目の問題は「文末式の“在+处所”は非文なのかどうか」の問題である。伝統的なテキストでは、文末式“他放了几本书在桌子上。”(例5)[彼は本を数冊机の上に置きました。]の構造を非文と判定している。しかし、李臨定(1993)や吕叔湘(1999)などの研究者は文末式の実在性を認め、“在+处所”の一種の用法として、各研究者の文法書に書いている。しかし、文末式の特徴や言語環境などの問題については、まだあまり言及されていない。

本節は先行研究と実例に基づいて、新たな視点から“在”の品詞問題、及び文末式の正否を検討する。

1.3.2 本動詞の後ろの“在”の品詞分類

現段階では、研究者達は「動後系」及びその下位分類の「直後式」と「文末式」の意味機能について、詳しく分析し、よく似ている結論を出している。直後式では「行為を行う地点」「文化大革命发生在中国。」「[文化大革命は中国で起こった。]、または「到達する地点」「一只羽毛球落在我脚前。」「[バトミントンの羽が私の足の前に落ちた。]を示す機能であり、文末式では、客体に「居場所を与える意味」「写一个名字在上头。」「[一つの名前を上を書く]を表す意味機能であると説明している。本節では動後系に用いる“在”の品詞分類に絞って検討する。

李臨定(1993)と吕叔湘(1996)を代表とする大多数の研究者は、文中の動詞の後ろの“在”を介詞(前置詞)として考えているが、しかし近年、邢福义(2009)を代表とする少数の研究者達は“‘在’是介词”の説を批判して、本動詞の後ろの“在”を基本的に動詞として見るべしと主張している。筆者は邢福义(2009)の説に倣って、本動詞に用いる“在”は動詞として捉えている。

1.3.2.1 直後式の“在”の品詞分類

直後式の“在”の品詞分類では、邢福义(2009)は本動詞の後ろに用いる“在+处所”の“在”を基本的に動詞として考えている(“V+在了”を一つの“动补结构”と説明している)。しかし、以下に挙げる「“在+名词”の“名词”が一文字である場合」(例65)、並びに「文中の本動詞が複雑な場合」(例68)、“在”はともに介詞と見る方が自然で、連語“在+处所”は連語ごと本動詞の補語になると指摘している。

(65) 婆婆病倒在床, 我精心照顾。(邢福义 2009:221)

おばあちゃんが病気で倒れたので、私は心を込めて看病した。(筆者訳)

(68) 那些年, 我们摸爬滚打在一起。(邢福义 2009:221)

あの頃、我々は苦労して、共に過ごしていた。(筆者訳)

邢福义 (2009) の説を部分的に取り入れるが、邢福义 (2009) が指摘していた「“在+名词”の“名词”が一文字である場合」、並びに「文中の本動詞が複雑な場合」では、「“在”は介詞と見る」という説に反して、筆者は直後式の“在+处所”の“在”の品詞は補語動詞と考えている。

(69) 我躺在床上还在不停地唱，但那声音微弱得只在我心里回响，希望的火焰一点点被绝望的泪水浇熄了，我的喉咙里再也不能发出一点声音。(语料库《轮椅上的梦》)

私はベッドに寝たまま歌い続ける。でも弱々しい歌声は窓の外にはとどかず、希望の炎は涙でだんだん小さくなる。もう、のどからかすかな声もしぼり出せない。(語料庫『車椅子の上の夢』)

(70) 从上小学第一天起，他们俩的座位就始终排在一起。(语料库《轮椅上的梦》)
ふたりは小学校に上がった最初の日からずっと隣り合わせにすわってきた。(語料庫『車椅子の上の夢』)

例 (65)’ (68) と比較するために、本節では例 (69) (70) のような場所名詞が“床”“一起”である例文を探し出した。例 (65)’ (69) の文中の“在”の後ろの名詞は、ともに“床”であり、例 (68) (70) では、ともに“一起”である。

例 (65)’ では、文意は [おばあちゃんがベッドにいる] ではなく、[おばあちゃんはいまベッドから起きられないほどの病気にかかっている。(今もいるかもしれないが、いるかどうかは重点になっていない。)] の意味を表している。このような場合、介詞“在”+名詞“床”が実在的な場所ではなく、原因と結果“病倒”の程度を言っている。逆に言うと、“卧病”“病倒”など「ベッドから起きあがれるかどうか」を基準とする動詞により、その後ろの名詞“床”は実在的な「ベッド」の意味の代わりに、それから派生する抽象的な意味を強調している。

例 (65)’ では、“在+抽象名词”の形式として考えてもよいであろう。程度の意味を表すには、本動詞と“在床”はお互いに影響し合っているので、“病倒’ 在床”と真ん中から二つに分けて読むことはできなく、連続して読まなければならない。

本節は、直後式の文中の動詞は主体の「状態」や「動態」などを表し、介詞は主体の状態や動態などが実現する時間、空間などの「実在的な範囲」、及びいろいろな「抽象的な程度」だけを意味する標識と分析する。換言すれば、介詞には「状態」と「動態」を表す機能はなく標識を表すだけであり、「実在的な範囲」と「抽象的な程度」の意味は動詞に内在している、と捉えている。例 (65)’ の“在+抽象名词”は抽象的な「病気の程度」を示す一方、病人の「倒れた結果的な状態」も表している。よって、ここの“在”は補語動詞と認識してもよいであろう。なお、例 (65)’ の連語“病倒在床”は状態を表すので、“在”は動詞であっても、実現を表す動態助詞“了”を付けることができない。

“病倒在床”の“床”は構造的にみれば目的語（客語）である。しかし、この連語は固定的な熟語とみなすべきであり、本動詞“病倒”および補語動詞“在”と名詞“床”の間には切っても切れない関連性がある。“病”は原因で、“倒”は結果であり、“在”は状態を表し、“床”は具体的な場所だけではなく、程度を表す意味も加わると認識する方が妥当であろう。

この連語には固定性と特別性があり、“？病倒在床上”、“*病倒在椅”のような例は非文である。現代中国語では熟語のように使われているよく似た連語に“失业/毕业在家”「失業/卒業後、仕事がないままだ」や“瘫倒在地”「両足が痺れて、立ってられない」などがある。抽象的な程度を意味する場所名詞に対応する日本語の格付き場所名詞は、一般的に言えば「に格」に対応していない。

例(65)’の“床”は抽象的な概念を表しているので、後ろに場所名詞“上”を付けられない。例(69)では、“床”は行為が到達する実在的な場所なので、場所名詞“床”の後ろに、更に方位詞“上”を加えている。連語は状態を描写しているので、文意によって、“躺在了床上”とも表現できる。“躺在床上”では、“在”は補語動詞で、“床”は客語である。日本語訳では「ベッドに」を用いる。

例(68)では、文意は「場所は近い」ではなく、「一緒に過ごした」ということを描写している。文中の動詞“摸爬滚打”のような四字熟語は、普通、客語を求めない不及物動詞である。動詞“摸爬滚打”の性質により、その後ろの“在一起”は空間ではなく、時間の概念を表す。“在一起”が時間の概念を表すので、例(68)では“在+时间词”の形式として見る方がいいであろう。このような場合、“在+时间词”は「空間を限定する」機能を持つと同時に、主体の「ずっと一緒にいる」状態を表し、文中の本動詞の補語になる。「そばに近づいたばかり」の意味ではなく、従来の状態を描写しているので、“在”の後ろに動態助詞“了”は付けられない。時間的な概念を表せる空間名詞は、“在一起”のほか“在一块”がある。たとえば、“他们俩打小在一块玩。”[彼ら二人は幼い頃から一緒に遊んでいた。]のように用いる。

例(68)の“摸爬滚打在一起”の“一起”は[行為が到達する]ところを指している。文中では一貫性を表す時間副詞“始终”の影響で、完了を表す“了”を付けることができないが、“在”は補語動詞で、“一起”は客語である。よって、例(65)’(68)はいずれも直後式である。“床”“一起”は、構造上であれば場所名詞だが、文中の動詞の特性により、“在+抽象名词”と“在+时间词”²³⁾の形式とみなすべきであろう。直後式の“在+处所”の“在”はいずれも補語動詞であると考えられている。なお、本節で扱った“在+抽象名词”と“在+时间词”の詳細については、別稿で論じる。

²³⁾ 李臨定『中国語文法概論』(1993:208~214)では、多数の例文を挙げ“在+时间词”と“在+抽象名词”に関する介詞連語の特徴について詳しく指摘しているものの、筆者の挙げる例文の類は挙げられていない。

1.3.2.2 文末式の“在”の品詞分類

李臨定（1993）と呂叔湘（1996）の説では、文末式の“在+处所”を介詞連語と指摘している。以下の例文の分析により、文末式の“在+处所”は兼語式構造の連語による“动宾短语”であると考えている。

(66)' 爱罗先珂君也跑出来，他们就放一个在他两手里，而小鸭便在他两手里咻咻的叫。（《呐喊》）

彼らは一匹をエロシエンコ君の両手のなかにおいてやった。あひるの雛は、彼の両手のなかでピイピイ鳴いていた。（語料庫『呐喊』）

(67)' 你道共产党是傻瓜，放一堆人在这儿让咱们吃么？（《金色的群山》
cncorpus.org）

共産党はバカだと言いたいのか？わざと我が軍の前に軍隊を配置し、我々の好き放題にさせるといえるのか？（筆者訳）

例(66)' (67)' では、客語の“一个（小鸭）”、“一堆人”は前の動詞“放”の受事であるとともに、後ろの連語“在这儿”“在他两手里”で説明する対象でもある。文中に用いる“在+处所”は主体の行為が到達する場所、及び客語の状態が存続する場所を表している。これらの点から、上記の例文は兼語式の文であり、“在”の品詞は動詞と判断できる。

1.3.3 文末式の“在+处所”

多くの中国語のテキストでは、例(5)“他放了几本书在桌子上。”のような文末式を非文として扱っている。しかし、文末式は言語事実として実在するので、李臨定(1993)と呂叔湘(1996)を代表とする研究者は、この文型についての言語分析を行っている。本節では、上掲の二名の研究者の説に基づいて、文末式の構造上及び意味上の特徴を分析する。

(71) 放一个小老鼠在我枕头下…（cncorpus.org）

私の枕の下に鼠を一匹隠した…（筆者訳）

(72) 多谢你，请你写一个年月在上边吧。（cncorpus.org）

それはありがとうございます。さて、ここに日付を書いてください。（筆者訳）

(73) 你在身上弄一点沙土，或者，装一点在口袋里，反正弄得脏一点才能显出变化来。（cncorpus.org）

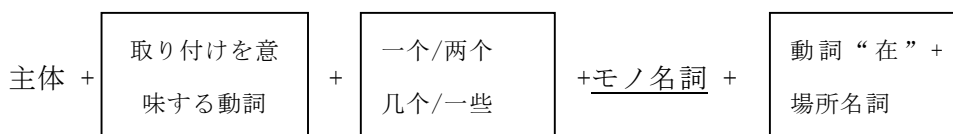
身体に泥を少し塗るか、あるいは、ポケットの中に泥を少し入れなさい。いずれにしる、少し汚れていてこそ、区別が出せるのです。（筆者訳）

- (74) 妇女们一听，就一个一个地下去了，徐区长最后才下去，还留一个头在外边的时候，李老汉叮嘱说：“你不要怕，有我活着就有你…”(语料库 cncorpus.org)
 女たちは話を聞くと、一人ずつ降りて行く。徐区長が最後だった。徐区長は上の階から見られるのが頭だけだったその時、李さんに声をかけられた、「心配などいらん、わしが生きている限り、大丈夫だ…」(筆者訳)
- (75) 随便放一点黄泥在里面搅一搅……(cncorpus.org)
 泥を少し中に入れてちょっと混ぜ…(筆者訳)
- (76) 如果你和它开个玩笑,放一粒砂子在它的叶子上,起初那些绒毛也有些卷曲,但是它很快就会发现这不是什么可口的食物,于是又把绒毛舒展开了。(cncorpus.org)
 この植物をからかうなら、砂を一粒葉の上に乗せ、柔らかい毛のある葉っぱもちょっと巻きます。しかし、この植物はすぐにうまい食べ物ではないと気づき、また柔らかい毛のある葉っぱをもとに戻した。(筆者訳)
- (77) 祖父颤巍巍地说着，又大声咳嗽，一面喘着气，吐了几口痰在地上。(《家》)
 祖父は怒りにふるえ、そう言いながら、また咳きはじめて、あえぎあえぎ痰を床に吐いては、ため息をもらす。(『家』)
- (78) 煮熟之后，横七竖八地插些筷子在这类东西上，可就称为“福礼”了，五更天陈列起来，并且点上香烛，恭请福神们来享用…(语料库《彷徨》)
 煮込みが終わると、それらの品々の上に箸を何本も不揃いに突きたてる。これが「福礼」で、明け方の四時ごろにそれを並べ、灯明をともして、うやうやしく福神に供える。(語料庫『彷徨』)

例 (71) から (78) まではいずれも“在+处所”を文末に用いる文末式である。文中では、数量詞付きの名詞連語が兼語で、兼語は前の動詞の受事であるとともに、後ろの連語で説明する対象でもある。

文末式は、構造から見ると、人間の行為を意味する及物動詞が数量詞付きの受事客語を伴うとともに、“在+处所”が実在的な空間を示している文構造である。文意から見ると、文末式はほとんどが人間の取り付けの行為を表している。これらの構造的・意味的特徴に基く“在+处所”を文末式として用いる構文形式は、下記のように図表化できるであろう。

[表 1-4] 文末式の構文形式について



本節は、文末式の兼語文を「取り付け」の意味を表す文と判断している。兼語の「モノ名詞」は前半の連語の客語である一方、後ろの“在+处所”連語の主語となっている。しかも、「モノ名詞+“在+处所”」は「存在」を意味すると考えられる。

受事客語を修飾する数量詞は文末式の特徴である。モノ名詞の前に必ず数量詞を付け、非特定のな意味を表す。例(71)から(76)の数量詞は単数で、例(77)(78)の数量詞は複数を表す“几口”“(一)些”である。モノ名詞の前の数量詞が単数である場合は、同じ種類の任意の一つを示し、複数である場合は同じ種類の任意のいくつかを意味している。数量詞は一般的に言えば、「一つ」(“一粒、一点”)或いは「いくつか」(“几口、一些”)などを用いる。それ以外の「二つ」、「三つ」など明確な数字を用いる場合もあるが、滅多に見られない。明確な数量詞を用いる場合は、同じ種類の「二つ」か「三つ」を指している。兼語のモノ名詞は非特定のなモノであるが、文末の場所名詞は必ず明確な実在的な空間を指している。

(79) 把一个老鼠放在我枕头下。(作例)

鼠を一匹私の枕の下にこっそりと隠した。(筆者訳)

(80) 多谢你, 请你把一个年月写在上面吧。(作例)

それはありがとうございます。さて、日付をここに書いてください。(筆者訳)

例(79)(80)は例(71)(72)を参考にして置き換えた文である。形式から見ると、文末式はいずれも直後式の“把字句”に置き換えられる。しかし、直後式の“把字句”と文末式の文意傾向が違っている。“把字句”はモノ名詞を強調しているが、文末式の兼語文は文末の空間を強調している傾向がみられる。

1.3.4 おわりに

本節では「動後系」及びその下位分類である2形式(「直後式」、「文末式」)の“在+处所”の“在”の品詞分類、並びに動後系の構造的と意味的な特徴について分析した。

上掲の分析から、直後式の“在+处所”の“在”をいずれも補語動詞とする。文末式の“在+处所”は李臨定(1993)と呂叔湘(1996)の観点と違い、兼語構造となる連語の“动宾短语”であると考えている。なお、文末式の文中における兼語のモノ名詞は、モノ名詞の前に必ず数量詞を付けて、非特定のな意味を表す。文成分が対等なので、文末式の“在+处所”は、いずれも直後式の“在+处所”に置き換えられるが、強調する文成分が異なってくる。筆者の分析によれば、文末式の兼語文は文末の空間を強調している。なお、“在+抽象名词”と“在+时间词”の詳細、及び動後系“在+处所”の日本語訳について、別稿で論じる。

第4節 “在+处所”と格付き場所名詞の対応関係

—連語論の説を利用して—

1.4.1 はじめに

前節で分析するように、“在+处所”で作る文の組み合わせの意味機能は、主体・行為・空間の関係に関する説明である。文中に置ける“在+处所”の位置が変わると、文の意味が変わる。存在を表す時には、しばしば“在+处所”の連語を用いるが、中国語の“在字句”は「空間的な存在の意味」を表すだけではなく、筆者の分析によれば、「行為が発生する空間」、「行為が達する空間」、「行為の状態が続く空間」などを示す機能もあり、単純に「存在」の意味と対応させることはできない。

筆者の研究とアンケート調査²⁴⁾の結果から分かるように、大勢の学習者は中国語の“在”と日本語の「に」「へ」「で」格などの場所名詞の格との関係をはっきりと区別していない。中国語“在+处所”と意味が対応している日本語の格付き場所名詞を含む連語において、「に」格の場所名詞が一番多く使われている。それ以外に「へ」「で」格などの場所名詞もよく用いられている。

日本語における連語論の意味分析から見ると、“在+处所”はしばしば「ありかのむすびつき」の連語と対応する。しかし、“在+处所”を用いる中国語の連語は、文中における意味も、ほかのいくつかのむすびつきと関係している。“在+处所”がほかのむすびつきを作るので、「へ」「で」格などの場所名詞も用いられるのであろう。

文構造から見ると、“在字句”は以下のような五つの種類に分けられる。“在+处所”は“在”が本動詞である構造」、および文中の位置による「文頭式」、「直前式」、「直後式」、「文末式」の4種類である。

本節では中国語“在+处所”と上掲の日本語のいくつかの格付き場所名詞の格との関係を巡って、中国語“在字句”の五つの構造ごとに、連語論の意味分析と構造分析の角度から、両言語の異同について検討する。

1.4.2 “在”は本動詞である場合

例(1) “书在桌子上。” [本は机の上にある。] は、文中の本動詞は“在”である。この場合、文意は「存在」を表す。これが“在字句”の基本形式と基本的な意味である。“在+处所”の連語“在床上”は実体の存在をしめす空間である。これは日本語の連語論における「ありかのむすびつき」[ベッドにいる]と対応する。

²⁴⁾2011年9月から10月にかけて、1箇月間で、中国人生徒約40名、及び大東文化大学、学部生約20名、合わせて約60名の中級レベルの学習者を対象にして、“在+处所”の“在”に関するアンケート調査を行なった。

1.4.3 「文頭式」の“在+处所”

「文頭式」の“在+处所”は“在+处所+短语”の構造で文を作る。文頭式は、例(2)の“在桌子上他放了几本书。”[机の上に、彼は本を数冊置きました。]の表現に見られるように、“在+处所”を文頭に用いる。文頭に用いる“在+处所”は、文の主体と出来事からなる“短语”を修飾する。

1.4.3.1 「文頭式」の意味的な特徴

“在+处所”を文頭に用いる本構造における“在+处所”の意味的な特徴は、出来事の発生する空間を示す。この種類の“在+处所”は文頭に用いられ、出来事における空間、あるいは範囲を明示する。

(81) 在生人面前，她努力奋斗，努力给人家以聪明、大方、讲礼、讲理、文明可亲的印象。(《插队的日子》)

人前では聡明で上品で、礼儀正しく、道理をわきまえ、教養豊かに見えるよう、懸命に努力した。(『遙かなる大地』)

例(81)の“在生人面前”は、文頭式の“在+处所”であり、後ろの“她”についての出来事の発生する空間、あるいは範囲を明示している。日本語の訳[人前では]は、中国語の“在+处所”と対応しているので、日本語でも「文頭式」と言ってよいであろう。

一般に“在+处所”の連語は短いので、構造的には区切らずに同一の文の一番前に用いられる場合もある。意味的には、同じく後半の内容の空間、あるいは範囲を明示する。なお、“在+处所”は発音上、区切ることもできる。

(82) “说到工作也许是是的。但是在以外的事情上就不同。”(《情系明天》)

「お仕事のことになったらそうでしょうが、それ以外のことでは…」(『あした来る人』)

(83) 她会背诵许多诗词歌赋和戏文。但在家里亲属们都管她背的这些韵文叫做“鼓儿词”。(《活动变人形》)

彼女は詩歌や台詞などを沢山諳んじていた。しかし、家では、家族のみならずがそれらの韻文を「鼓兒詞」と呼ぶ。(筆者訳)

例(82)、例(83)における“在以外的事情上”と“在家里”とは、文頭にあり、後ろにある内容の範囲、あるいは空間を説明する。例(81)は典型的な文頭式だが、この2例もそれに準じると言えるだろう。

(84) 在她想来²⁵⁾，北京还有治不了的病么。(《插队的故事》)

彼女の考えでは北京には治せない病気などなかった。(『遙かなる大地』)

²⁵⁾本稿のP23の例(16)を参照。

例(84)の“在她想来”は、[彼女の考え]という抽象的な範囲であり、その内容は“北京有治不了的病么”[北京には治せない病気などなかった]である。例(84)において、文頭式の“在+处所”は具体的な空間だけではなく、抽象的な範囲“在她想来”であっても、その範囲を表せることが判明した。

“在+处所”を用いる“在字句”は、先行研究と上記の例文分析から、以下の構造的・意味的な特徴のあることが判明した。

- i. 文頭における“在+处所”は、空間または範囲を表すが、陳述、否定、疑問、推測、命令などの語気は伝えられない。たとえば、例(81)において、“在生人面前”は空間を表すだけであり、例(84)の“在她想来”は範囲を表すだけに過ぎない。
- ii. 後半の部分は、一般的に自然現象、発生しているか、あるいは発生した事件、未来の予測、過去の回想などの内容である。

文頭式の“在+处所+短语”とそれに対応する日本語は、上記の二点に関する限り中国語であろうと、日本語であろうと同じである。

1.4.3.2 「文頭式」を用いた話者の視点、及び対応する日本語

上掲のように、中国語の「文頭式」の“在+处所+短语”を用いる文では、基本的に空間で行われた事件に対する描写であり、第三者の視点から見る事件の全貌であると考えられる。

例(81)から(84)にかけて、話し手はいずれも第三者の視点から出来事を述べている。そのため、中国語の「文頭式」に対応する日本語では、一般的に場所名詞には範囲を示す「で」格を用いる。「で」格の場所名詞に、主題を提示する「は」、あるいは「も」を用い、「場所名詞+では／でも」の表現が多々見られる。

1.4.3.3 “在”を用いない場所名詞が主語になる場合

“在”を用いない場所名詞とは、“在+处所+短语”の構造のなかで“在”を用いずに、“处所”だけで空間を表す、ということである。この場合、場所名詞の前に“在”は用いられていないので、“在字句”の「文頭式」ではない。このような構造の文レベルの意味と構造は「文頭式」と混同しやすいので、ここで両者を比較しつつ、分析することとする。

(85) 谈到职业妇女，在西洋的机器文明世界，兼主妇还不感到十分困难。在中国则一切须靠佣人。(《关于女人》)

機械を備えた西洋の文明社会なら、職業婦人が主婦業を兼ねるのは難しくはない。ただし中国ではすべて使用人に頼らないわけにはいかない。(『女の人について』)

(86) 在亲生母亲的教导之下，倪吾诚抽上了大烟。(《活动变人形》)

生みの母の手ほどきで、彼はアヘンを吸うようになった。(『応報』)

(87) 在桌子上放着一支钢笔。(作例)

テーブルの上には万年筆が一本置いてある。(筆者訳)

(88) 桌上放了一支钢笔。(作例)

テーブルの上には万年筆が一本置いてある。(筆者訳)

(89) 道路两边，板块般的高粱坚固凝滞，连成一体，拥拥挤挤，彼此打量，灰绿色的高粱穗子睡眠未开，这一穗与那一穗根本无法区别，高粱永无尽头，仿佛潺潺流动的河流。(《活动变人形》)

道の両側では、すっかり動きをとめた高粱が一つになってひしめきあい、互いに相手の様子をうかがっていた。暗緑色の高粱の穂はまだ眠たけに目を閉じており、どれもみな同じに見えてしまう。サラサラと流れる河のように、高粱はどこまでもつづく。(『応報』)

(90) 天上，鸟在飞；水里，鱼在游。(作例)

空では、鳥が飛び、水の中では、魚が泳いでいる。(筆者訳)

(91) ?在天上，鸟在飞；在水里，鱼在游。(作例)

例(85)、(86)、(87)は“在字句”の「文頭式」である。例(85)、(86)の“在中国”、“在亲生母亲的教导之下”から、それぞれ“在”を取り、“中国”、“亲生母亲的教导之下”と表現すると違和感がある。しかし、例(87)の場合、“在”を取って、例(88)のように表現しても、違和感がない。

例(87)、(88)の比較から場所名詞“桌上”を“在桌上”と表現しても、文意は全く変わらないことが分かる。それと同様に、例(89)の文中に“道路两边”は“在道路两边”に置き換えても、文意はまったく同じである。日本語の訳文も多重述語文の形で訳されている。それぞれの場所名詞は、後半部分の内容の空間または範囲を明示している。

一方、例(90)の場所名詞“天上”の前に“在”を付けると、例(91)となるが、これでは不自然な文となる。例(90)と(91)の例文の比較から、“在+处所+短语”の“在”は、簡単に省くことはできないことが判明した。筆者の分析によれば、同じ文頭の“处所”であれば、“在”を用いることができるかどうかは、一般的には下記の3種類の状況に分かれる。

i、例(85)、(86)のように、“在+处所”の部分に固有名詞、或いは所有格名詞があつて、しかも文中の“在”が重ねて使われていない文の場合、文頭の“在”を省くことができない。

ii、例(87)のように、“在+处所”の中に所有格名詞のない場合、文頭の“在”があつてもなくても構わない。“在”を用いる場合は「文頭式」の“在字句”である。そして、例(87)(88)は典型的な存在文であり、文頭の場所を意味する“(在)+处所”が文の主語になる。

iii、例(90)のように、文が短く、しかも文中の主語が動的な事物“鳥”である。文頭の“在”と後半の“在”が重複した場合、並列の音節の影響を受け、文頭式の“在+处所”を用いる場合が少ない。

文頭に“在”があるかどうかにかかわらず、日本語の訳文はほとんどが一緒である。このことから、文頭に置ける場所名詞が後ろの内容の空間と範囲を限定するのであって、“在”はあくまでもこの場所名詞を提示している標識に過ぎないということが分かった。

文頭式の“在”については、大量の言語事実を収集して、更に深く研究を重ね、別稿で検討するので、本節における「文頭式」の“在”についての研究は、ここまでとする。

1.4.4 「直前式」の“在+处所”

本構造は「文頭式」とよく似ているが、例(3)の他在桌子上放了几本书。[彼は机のうえに本を数冊置きました。]のように、主語が文の一番前に現れ、“在+处所”は出来事を修飾する。

「文頭式」の本動詞は一般に二文字の動詞、または二文字以上の動詞連語であることが多い。「直前式」では本動詞が一文字の場合、本動詞の前後によく“了”、“着”、“过”などのアスペクト助詞や“不”などの副詞を用いる。

1.4.4.1 「直前式」の意味的な特徴

「直前式」の文構造は、“在+处所”が本動詞(四角で囲った動詞)の前に用いられ、その意味機能は二つである。一つは主体の行為を行う空間(「で~する」)を示すことであり、もう一つは主体が行なった行為の結果を表す空間(「に~する/ておく/てある」)を示すことである。この二つの意味機能の特徴は、以下の二例に見られるように、意味的に重なる部分がある。

(92) 他在食堂吃了一顿午饭。(作例)

彼は食堂でお昼を食べた。(筆者訳)

(93) 他在桌上放了一束花。(作例)

彼はテーブルに花を一束置いた。(筆者訳)

「直前式」の意味的な機能の違いは例(92)(93)から、はっきりと見えてくる。例(92)では、“食堂”は“吃了一顿午饭”という行為を行なった空間である。例(93)では、“桌上”は“放了一束花”という行為を行なった空間である。両者の構造と意味関係はまったく対等である。しかし、行為が発生した後、“一束花”はまだ“桌上”にあるが、“一顿饭”はまだ“食堂”にあるのだろうか?明らかに、“一顿饭”は既に“食堂”からなくなっている。

動詞の種類による行為の結果に対する両者の違いにより、例(92)は行為を行う空間を示す「直前式」であり、例(93)は行為の結果を表す空間を表す「直前式」であることが分かる。筆者は「直前式」の二つの意味機能について、以下のように分析している。

人間の行為は「動的な運動の意味」と「静的な結果の意味」の二つの側面がある。「直前式」の本動詞は「動的な運動の意味」を示し、場所名詞は行為の発生する空間または範囲を示す。この場合、本動詞は運動を描写する動詞、或いは動詞連語である。「直前式」の本動詞は「静的な結果の意味」を示し、場所名詞は行為の結果の存在する空間または範囲を示す。このような場合、本動詞は一般的に様態を描写する動詞、或いは動詞連語である。

(94) 父亲更是由着我，我在家里简直没有进过厨房……（《关于女人》）

父も好きなようにさせてくれて、実家では台所なんて入ったことも……
（『女について』）

(95) 我在家里刚喝了茶来的，倒是你恐怕渴了，我出去找点水你喝。（《关于女人》）

わたしは家でお茶を飲んできたところだけど、あなたはのどが渴いている
でしょう。お湯をもらってきます（『女について』）

(96) ……一位在家里也不离手杖的一跛一拐的教育局的督办……（《活动变人型》）

……家でも杖を手離せない足の不自由な教育局の視学官……（『応報』）

(97) 是什么约会呢？他在家里是想不起来的。（《活动变人型》）

何の約束だったか、家では思い出せない。（『応報』）

例(94)から(97)までの本動詞“进”、“喝”、“离”、“想”は、いずれもヒトの行為を描写する動詞なので、文中の出来事は空間、または範囲内で行った行為を描写している。

(98) 祖父和父亲为了他的婚礼特别在家里搭了戏台演戏庆祝。（鲁迅《家》）

祖父と父親は彼の婚礼のためにとくに家の中に芝居を掛けて祝ってくれた。
（『家』）

(99) 为了观察方便她们在窗户纸上捅了一个小洞，完全够放得下一只眼睛。（《活动变人型》）

観察しやすいように、女たちは窓に小さな穴を開けた。（『応報』）

(100) 越在家里呆的时间长倪吾诚就越喜欢自己的两个孩子（《活动变人型》）

家に居る時間が長くなるにつれ、倪吾誠は二人の子供にますます愛着を
おぼえた。（『応報』）

例(98)、(99)、(100)のように、四角で囲った本動詞は行為の結果を表している。文中の出来事は空間で行われる行為により、そのもたらされた結果のことに言及している。

1.4.4.2 「直前式」を用いる話者の視点、及び対応する日本語

直前式と文頭式は、意味的にも構造的にも混同しやすい二つの文構造である。しかし、文頭式は一般に事実を述べる場合に用いるが、直前式の場合は事実のなかのある具体的な出来事について述べている。

「直前式」の中国語の構造に近い日本語は、「は」と「が」を用いる多重述語文である。主題と主語を省かない場合、「は」「が」を用いる、しかも主題と主語を提示する「は」と「が」は極めて省きにくい²⁶⁾。

意味論の観点から分析すると、例(92)の訳文において、「お昼」を「食べる」空間「食堂」を明示するため、動作の発生する空間を表す「で」格の場所名詞を用いている。例(93)の訳文における行為の結果として、[花束はテーブルの上にあった]のである。存在の意味を表すには、「に」格の場所名詞が多く使われる。

日本語の連語論の観点から見ると、「で」格の場所名詞を用いる場合、行為の発生する場所を提示する。本節は、動詞は様態義を取り、主体のある状態が空間または範囲内に存在する意味を表し、「で」格で現す「空間的な行為のむすびつき」²⁷⁾と考える。

「に格」の場所名詞を用いる場合はやや複雑で、空間的な事物の存在及び空間的な出来事の発生する場所を表す意味機能がある。例(98)、(99)は「はたらきかけのむすびつき」である。例(100)のように、本動詞“呆”の結果は存在義の意味であって、日本語の訳文は空間的な存在の構文形式で訳している。換言すれば、「ありかのむすびつき」の形で訳している。

1.4.5 「直後式」の“在+处所”

直後式の“在+处所”は、例(4)の他把几本书放在桌子上。[彼は本を数冊、机の上におきました。]のように、“在+处所”を本動詞の補語として、その後ろに用いる。連語“本動詞+在+处所”の意味的な重点は空間であり、本連語はよく兼語文(“他插了一束花在瓶子里。”)、“把字句”(“他把一束花插在了瓶子里。”)、“被字句”(“一束花被他插在了瓶子里。”)に使われる。

1.4.5.1 「直後式」の意味的な特徴

本構造の意味的な特徴は二つである。一つは主体の行為が達する空間(「へ／に～する／て行く／て来る」)を示すことであり、もう一つは行為が達した状態が存続する

²⁶⁾ 多重述語構文の場合、前にある「が」あるいは「は」は固有の意味を持っているゆえ、省くことができないと『構造から見る日本語』では述べている。しかし、「佐藤君が頭(が)いい」のような文の後半の括弧の中にある「が」は、省略しても大丈夫だと指摘しているが、やや抵抗があるようである。

²⁷⁾ 日本語の連語論では、「で」格の場所名詞は、行為の発生する場所を提示する格助詞として認識しているため、「で」格の場所名詞にかかるむすびつきがない。日中対照研究をすると、「で」格の場所名詞と動詞からなる連語が実際に存在するので、本節はこのような連語を「空間的な行為を行うむすびつき」と呼ぶ。

空間（「に～ある／てある」）を示すことである。この二つの特徴は、はっきりと線引きできるわけではなく、意味の重なる部分もある。

(101) 長い間倉庫へ入れたままになっている。／長期放在仓库里。『小学館日中辞典 V2』

(102) 吕瑞芬望着男人的身影消失在夜色里，轻轻地叹息一声，转回屋。（《金光大道》）

呂瑞芬は闇の中に消えて行く夫の後ろ姿を見送ると、ホッとため息をもらして部屋に戻った（『輝ける道』）

(103) 这小子却偏要去插队，跟家里也吵翻了，住在学校不回去。（《插队的日子》）
彼はどうしても農村へ行くといい張って家族と大喧嘩し、学校に住み着いて家に帰らなかった。（『遙かなる大地』）

例（101）、（102）では本動詞は“放”、“消失”であり、「動的な運動の意味」と「静的な結果の意味」の二つ意味に取れる。空間を表す“仓库里”、“夜色中”は行為の達する「目的地」とも取れるし、到達してからの状態「入れた」、「消えた」が存続する空間ともとれる。

例（103）の場合であれば、行為の動態の意味よりも、静的な存在の語感が強く感じられる。これについて、筆者は以下のように考えている。

例（103）の本動詞“住”は、移動的な動詞ではなく、人間の立ち居の動作を示しているので、空間へ達する（動的な運動の意味）語感が弱化している。それに、文全体が過去形なので、状態義がさらに強まっている。ただし、「直前式」の“在学校住，不回去” [学校に住んでいて帰って来ない] と比べると、「直後式」の“住在学校不回去” [学校に住み着いて帰ってこない] の方が“住到学校不回去” [学校に泊まっていた帰って来ない] に近く、“去学校住下去了” [学校に行って、住み着いた] の語感が感じられる。

1.4.5.2 「直後式」を用いた話者の視点、及び対応する日本語

(104) 棺材放在垆畔山腰的一眼闲窑里，窑口堆满了柴草以遮挡风雨。（《插队的日子》）

棺桶は垆畔山の中腹の使われていない窑洞の中に置かれ、入口に柴を積み上げて風雨を防いでいる。（『遙かなる大地』）

(105) いよいよ種牛は引出されることになった。一同の視線は皆その方へ集つた。（『破戒』）

種牛终于要牵出来了，人们的视线都集中在它身上。（《破戒》）

(106) 男も、女も、懐中から紙入を取出して、思い思いに賽銭を置の上へ置くのであった。（『破戒』）

男男女女都从怀里掏出纸包，纷纷把香火钱放在铺席上。（《破戒》）

(107) 村里的一群孩子也提了小镢，追在我们屁股后头。(《插队的日子》)

村の子どもたちも小さな鋤を持ってわれわれの後を追ってきた。(『遙かなる大地』)

例(104)から(107)まではいずれも「直後式」である。例(104)は“棺材”が“闲窑里”にあることを描写しているので、日本語の訳文は存在を表す「に」格の場所名詞を用いている。例(105)の“人们的视线”は“视线”が“种牛”まで集中している意味で、「へ」格の場所名詞を用いている。例(106)のように、日本語の原文は「へ」格の場所名詞を用いているが、中国語では行為“放”の達する空間“铺席上”である。例(107)の場所名詞“屁股后头”は、行為“追”の達する空間である。しかし“屁股后头”は移動的な空間なので、「を格」の場所名詞を用いている。

上掲の4例から分かることは、「直後式」も「直前式」と同じく具体的な出来事を叙述していることである。ただし「直前式」の場所名詞は動作の行われる空間にも解釈できるが、「直後式」に用いられている場所名詞は一般に主体の達する空間にしか解釈できない。

日本語の連語論の観点から見ると、例(104)の“放在窑畔山腰的一眼闲窑里”は、“棺材”のありかを示す「ありかのむすびつき」である。例(105)の“集中在它身上”は、“视线”の達する空間を指す「到着のむすびつき」である。例(106)“把香火钱放在铺席上”は、“放”という働きかけの動作により達する空間を明示する「とりつけのむすびつき」である。例(107)では移動的な空間“屁股后头”に達する意味を呈示する「移動のむすびつき」である。

1.4.5.3 “把字句”“被字句”に用いる「直後式」

例(108)は、筆者の分析によれば“在+处所”を用いる文末式の兼語文である。例(109)、(110)のような“在+处所”を用いる「直後式」は、よく動詞の補語として“把字句”、“被字句”にも用いる。

(108) 他插了一束花在瓶子里。(作例)

彼は花を一束花瓶に入れました。(筆者訳)

(109) 他把一束花插在了瓶子里。(作例)

彼は一束の花を花瓶に入れました。(筆者訳)

(110) 一束花被他插在了瓶子里。(作例)

一束の花は彼によって花瓶に入れられました。(筆者訳)

“把字句”、“被字句”の本動詞の後ろの語句は、一般的に必ず行為に対する評価や説明などである。換言すれば、直後式には補語が必要であるということである。“处所”は行為の達する空間、または達した状態が存続する空間を示し、文意の重点となる。

(111) *把一束花在瓶子里插着。(作例)

(112) *一束花被在瓶子里插着。(作例)

例 (111)、(112) は非文である。“在+处所”を用いる「直前式」は、“把字句”、“被字句”に用いることができない。“把字句”“被字句”は主体または客体に対する処置(結果)を表す文だからである。「行為」と「結果」の関係は、論理的には一般的に言えば、まず行為を行なって、その後に処置の結果が現れる。そのため、直前式では本動詞を“在+处所”の後ろに用いることができないと、本節は分析している。

1.4.5.4 「直後式」の「簡易化表現」と“在”の省略

動詞の後に“在+处所”を用いる「直後式」“动词+在+处所”の構造は、「簡易化表現」²⁸⁾である“动词+处所”になりやすい。筆者は「本動詞+補語動詞+名詞」の「直後式」から、補語動詞が脱落して、「本動詞+名詞」の構造になる現象を「簡易化表現」と名付ける。“在字句”の「簡易化表現」は動詞補語“在”の脱落現象である。

(113) 彼はじっと家に閉じこもっている。(「日中対照の視点から見るありかのむすつき」)

訳文①: 他老实实在地呆在了家里。(筆者訳)

訳文②: 他老实实在地呆家里了。(筆者訳)

(114) 彼は監獄に入れられている。(「日中対照の視点から見るありかのむすつき」)

訳文①: 他蹲在监狱里。(筆者訳)

訳文②: 他蹲监狱 / 坐牢。(筆者訳)

例 (113)、(114) の訳文①は、いずれも“在”の現れる典型的な“在字句”の「直後式」“动词+在+处所”である。訳文②はいずれも“在”の現れない「直後式」“动词+处所”である。訳文①と訳文②を比較すると、訳文②の「簡易化表現」は「行為が達する」動的な意味がほとんどなく、「達した結果の存続」を表す静的な意味だけしか伝えられない。

“在字句”の「簡易化表現」では、本動詞は一般に一文字の立ち居を表す動詞である(“坐在车上”→“坐车”)。この構造は上記で説明するように、空間より行為の状態を説明しようとする意味機能を重んじるので、一般的に動詞“在”を用いないと考えている。

日常会話の場合、“放在桌上”は動詞“在”の現れない“放桌上”の形でよく表現される。この場合、“你把那本书放桌子上吧。”[その本を机の上に置きなさい。]は、元の表現“你把那本书放在桌子上吧。”[その本を机の上に置きなさい。]とまったく同じ意味を持っている。会話におけるこのような現象は、単なる「“在”の省略」であろうと考える。

²⁸⁾「簡易化構造」の「本動詞+補語動詞+名詞」に対応して、元の連語構造を「元の表現」と呼ぶ。本節では、本連語構造内の「名詞」は「空間」を示す名詞であり、補語動詞は“在”である。筆者は前の論文『日中対照の視点から見る「ありかのむすつき」』(2013)では、“在”の現れない「簡易化表現」を『「V+N」の常用表現』と呼んでいる。

「直後式」は「直前式」と比べると、「在」は「省略しやすい」。それは意味的には、「直後式」に用いる“在”を用いる連語が、存在義（基本義）だけではなく、「到着」、「取り付け」、「通過」などの意味で使われるからである。よって文中における空間は行為の「達する空間」として認識し、モノの存在義を必ず提示するとは限らないからであると判断している。

1.4.6 「文末式」の“在+处所”

「文末式」とは“他插一枝花在瓶子里。”[花を一枝花瓶に挿した。]のように、本動詞の直後に“在+处所”を用いず、両者を離して、その間に数量詞付きの述語を入れる表現である。現代中国語では、文末式表現は中国の南方地方でよく聞かれる表現である。沈家煊(1999:95)では、文が“双重宾语文”の場合、“间接宾语”が(“在字句”の場合)達する場所“我写了几个字在黑板上。”[私は数文字を黒板に書いた。](筆者訳)、或いは(“给字句”)給与の対象“我买了一所房子给你。”[私はハウスを一棟買ってあげる。](筆者訳)なら、“直接宾语”には数量詞が付くとしている。また、ある専門家は言語現象から、この構造を“分裂式”と言っている。筆者はこのような文を兼語文と見なしているが、沈家煊の指摘するこのような文の特徴については同意見である。

1.4.6.1 「文末式」の意味的な特徴

「文末式」の意味的な特徴について、「文末式」は「直後式」とほとんど一緒であり、主体の行為が達する空間、及び行為が達した状態の存続する空間を示すことである。しかし「直後式」は行為・状態を一つの出来事として述べるのに対して、「文末式」は行為と状態が前後して続いている2つの出来事のように叙述している。

(115) 爱罗先珂君也跑出来，他们就放一个在他两手里，而小鸭便在他两手里咻咻的叫。(《呐喊》)

彼らは一匹をエロシェンコ君の両手のなかにおいてやった。あひるの雛は、彼の両手のなかでパイパイ鳴いていた。(『呐喊』)

(116) 放一个小老鼠在我枕头下… (cncorpus.org)

私の枕の下に鼠を一匹隠した… (筆者訳)

しかし、「直後式」と比較すると、「文末式」では、本動詞は文末からずいぶん離れていて旧情報として、主語の後ろに用いる。“在+处所”の空間の指示は、行為の指示より重要な意味を表し、新情報として文意の重点となる。そのため、「文末式」は「直後式」より、本動詞、または動詞連語は「静的な結果の意味」を表し、「空間に達した結果の存続」の語感が更に強くなる。

1.4.6.2 「文末式」と「直後式」の区別

“动词+处所”を用いる「文末式」の例(108)“他插了一束花在瓶子里”は兼語文

である。文末式の後ろの動詞は“在”で、前の動詞“插”は一般的に働き掛けを表す動詞である。本用法の兼語文は、行為“插”の結果“在”を補充しているので、空間を表す語句“瓶子里”は「既に達した空間」としての語感が強い。「直後式」の例(109)“他把一束花插在了瓶子里”のように、直接客語“花”を本動詞“插”の前に置く場合、本動詞が“在+处所”と連用する構造となる。この場合は“花”に対する処置を表す文になり、“把字句”を用いる場合が多い。しかし、例(108)は過去の動作による状態の存続、例(109)は過去の事件に偏っている。

「文末式」の意味的な特徴からみると、「文末式」は「直後式」とほとんど一緒だが、連語論の意味的な分析から見ると、「文末式」は「直後式」と違い、働きかけの本動詞しか用いられないので、対応する日本語の連語は「働きかけのむすびつき」にしか翻訳できないことが判明した。

1.4.7 おわりに

上記の分析により、以下の4点が明らかになった。

i. “在字句”を用いる五つの文構造、“在”が本動詞である基本形式、および文中における“在+处所”の位置によって分類する「文頭式」、「直前式」、「直後式」、「文末式」は、よく似ているものの、それぞれの基本的な用法があり、文意の重点が異なることを明らかにした。

ii. “在字句”の五つの文構造、“在”が本動詞である基本形式、および文中における“在+处所”の位置によって分類する「文頭式」、「直前式」、「直後式」、「文末式」の用法と日本語との意味関係を明らかにした。出来事のあらわす意味により、日本語では場所名詞の格が変わることも明らかにした。それを図表化したのが[表 1-5]である。

iii. “在字句”の五つの文構造の形式上と意味上の特徴を分析し、また連語論の視点からみる日中対照を経て、“在+处所”は、「存在」の基本義に基づいて、文中における位置の違いにより、様々な構造の補充、或いは修飾成分の働きをする、という派生的用法が生じるということも判明した。

iv. 文頭式に用いる“在+处所”が出来事存在義を表す時にだけ、“在”の省略が可能なることも明らかになり、直後式に用いる“在+处所”は会話などでは、“在”が脱落することにより、“动词+处所”の簡易化表現ができ、その意味的な特徴も明らかにした。

本節では文構造の違いによる意味的な異同を比較し、“在+处所”に対応する日本語の格付き場所名詞を以下のようにまとめる。

[表 1-5] “在+处所”に対応する日本語格付き場所名詞

場所名詞の格	日本語における場所名詞の機能と実例		動前式	動後式
「で(は)」「においては」格など	話題の範囲を示す	轆轤把胡同九号においては特別な意味を持つ。(語料庫『轆轤把胡同九号』)	文 頭 式	
「で」格	行為を行う空間を示す	わたしは家でお茶を飲んできたところだけ……(語料庫『女について』)		
「に」、「へ」格	ありかのむすびつき	梢に人が坐っているようだ。(語料庫『応報』)		
「に」格	到着のむすびつき	九時を少し回った頃、H市の空港に着陸した。(語料庫『応報』)	直 前 式	直 后 式
「から」、「に」格	消滅のむすびつき	この歌とそれに象徴された生活も中国から消えたといえる。(語料庫『応報』)		
「に」、「を」格	働きかけのむすびつき	女たちは窓に小さな穴を開けた。(語料庫『応報』)		
「を」格	移動のむすびつき	二人は狭くて嵩高い階段を上っていった。(語料庫『応報』)		文 末 式

第5節 小説に現れている“在字句”

－《关于女人》を考察する－

李臨定（1993:203～214）は、“在字句”の“在+处所”について、これらをすべて介詞連語とみなし、言語事実から同じような文意を表せる文として、4種類の文を挙げ、動詞の動態と静態にスポットを当て、文法的側面から、その特徴を説明している。しかし、李臨定は、どこにその違いがあるのかについて、文法的側面・意味的側面・語用上の側面からほとんど言及していない。

筆者の調査と分析とにより、“在+处所”は“在”が存在を表す基本動詞として使われる以外に、文中の位置から文頭式、直前式、直後式、文末式の4種類に分けられ、“在”は介詞の用法もあるが、動詞の用法もあることを明らかにしている。また、“在+处所”を文中のどの位置に用いるかによって、上記にまとめるような文法的・意味的・語用的な特徴もあることを明らかにしている。

本節の(1)から(4)の構文形式で表す文意は、ほとんど同じと言っても、文中における意味上の重点が異なっている。そのため、“在+处所”を用いる5つの表現形式が存在すると言えるのであろう。

本節では筆者が調査・分析した上記の結果と、“在+处所”が実際に使われている状況を調査・分析し、筆者の分析結果の妥当性を検証する。

1.5.1 はじめに

前節の[表1-5]は、中国語の“在+处所”と日本語の格付き空間詞との対応関係を示している。本節は小説《关于女人》（『女について』）²⁹⁾に現れる“在+处所”の使われている“在字句”の状況を調査し統計する。本節の考察を通じて、この小説から“在+处所”の4つの構造が使われている意味的場面、並びに各意味的場面を表すのに一番よく使われる構造を明らかにする。

1.5.2 統計について

本節の研究では、“在+处所”を用いている文のほか、“在字句”の主語を省いた状況(1.5.2.3)も統計の項目として調査対象に入れた。調査対象は《中日対訳語料庫》(第一版)(2002、2003)の中の小説《关于女人》（『女について』）である。下記に示す[表1-6]のような統計の結果が出た。

²⁹⁾本節では著者冰心が小説《关于女人》の中に用いた“在+处所”の頻度と用法を分析し、日常会話に使う“在+处所”の用法を考察する。これからも他の作家の小説を利用し、文中に出ている“在+处所”の頻度と用法を分析する。

1.5.2.1 研究対象

《关于女人》の著者は冰心（1900-1999）である。対応している訳文『女について』は《中日対訳語料庫》（第一版）（2002、2003）に収められている。

小説《关于女人》の中で、“在”を用いる文は348例ある。348例中、“在+处所”を用いている文は202例ある。この202例を本節の研究対象として、“在+处所”の用法、及び“在+处所”と訳文に現れている格付き空間詞との対照関係を分析する。

[表 1-6] 《关于女人》（『女について』）における“在+处所”の意味分類

空間詞の機能と実例			例文の数 202	動前系			動後系	
				場所 主語	文 頭式	直 前式	直 後式	文 末式
《关于女人》から取り出した例文である								
範囲と条件を表す空間		在生人面前，她努力奋斗，努力给人…	33	4	13	<u>16</u>		
行為動作と状態が実現する空間	出来事を行う空間	我出去的时候，回来总在店里买些糖果…	84	12	9	<u>63</u>		
	移動する空間	看见他们坐在会议室里或是在校门口徘徊，我们总是大声咳嗽…	3			<u>3</u>		
	立ち居する空間	母亲只是默然的躺在床上	42			1	<u>41</u>	
	消滅する空間	老太太的脚声，渐渐的在甬道中消失了。	2			1	1	
結果的に達する空間	とりつけの空間	希望对方不在案侧或床头，挂些低级趣味的裸体画，或明星照片。	37			2	<u>35</u>	
	到着する空間	小包裹是从各地方送到，在香港集中的	1			<u>1</u>		

1.5.2.2 “在+处所”の意味機能の分類

前節では和訳の日本語の格付き空間詞の意味分類を基準として、原文の中国語の“在+处所”の用法を分類[表 1-5]したが、そのような分類の仕方では、中日両言語の

対応の面ではまだ若干問題が残る。本節では、[表 1-6] の空間の機能が示す 3 つの縦枠に基づき、例文の意味機能を大きく三つにまとめ、その下位では更に数種類に分け、空間詞の意味機能を細分化する。

1.5.2.3 “在+处所”の構造分類

前節では“在+处所”を用いる文を大きく「動前系」と「動後系」に分けている。動前系の“在”は介詞であり、動後系の“在”は動詞である。前者の「動前系」は更に「文頭式」と「直前式」に分けられる。後者の「動後系」は「直後式」と「文末式」に分けられる。主語が省かれた場合はいずれも「文頭式」として、これまでは分類していた。

(117) 在他们的回忆里,有许多甜蜜天真的故事,倘若他们肯把一切事情都告诉我,一定可以写一本很好的小说。(《女》)

ふたりの思い出の中には,甘く、天真爛漫な物語がたくさんあって、もし洗いざらい話してもらえたら、きっといい小説が書けるだろう。(『女』)

例(117)の場合では、文中の場所を示す“在他们的回忆里”³⁰⁾が主語である(所属、所有を表す文となる)。文中施事の主語が存在しないので、「動前系」の構造であるが、「文頭式」でもないし「直前式」でもない。本節ではこのような「場所主語」である場合をを単独の項目として、例文の数を統計した。

1.5.3 意味の分類

1.5.3.1 範囲と条件を表す空間

[表 1-6] の縦枠にある「範囲と条件を表す空間」とは、文中の評価や陳述などが成立する範囲あるいは条件である。文構造から見ると、“在+处所”は一般的に言えば、文中では状況語である。

(118) 谈到职业妇女,在西洋的机器文明世界,兼主妇还不感到十分困难。在中国则一切须靠佣人。(《女》)

機械を備えた西洋の文明社会なら、職業婦人が主婦業を兼ねるのは難しくはない。ただし中国ではすべて使用人に頼らないわけにはいかない。(『女』)

(119) H是我眼中所看到的最好的小姑娘,稳静大方,温柔活泼,在校里家中,都做了她周围人们爱慕的对象,这一点是母亲认为万分满意的。(《女》)

Hは私が知る中でも、とりわけすてきな娘さんである。おちついておおらかで、やさしくて、はつらつとしている。学校でも家でも、みんなから慕われる存在で、この点こそ、母が満足しているところである。(『女』)

³⁰⁾ この“在他们的回忆里”では、人間の記憶のことであるが、一般的の空間のように文章が表現している。

(117)' L女士是闽南人, 皮肤很黑, 眼睛很大, 说话作事, 敏捷了当。在同学中间, 疏通调停, 排难解纷, 无论是什么集会, 什么娱乐, 只要是L大姐登高一呼, 大家都是拥护响应的。(《女》)

L姉さんは福建省の人で、肌は黒くて眼は大きく、口のきき方や動作がきびきびしていた。同級生のなかにあって、いざこざの仲裁、もめごとの解決、集会や遊び、彼女が声をかければみんな従った。(『女』)

例(118)(119)(117)'では、文意から分析すれば、文中の“在+处所”は、その後の文中の陳述の範囲や条件を表している。

例(118)は文頭式の例文である。文頭の“在中国”は“一切須靠佣人”[すべて使用人に頼らないわけにはいかない]の範囲である。例(119)は直前式の例文である。“在校里家中”は“做了她周围人们爱慕的对象”[Hが慕われる対象となっている]を意味する場所と範囲である。例(117)'は主語が省かれた場合の例文である。対応している格付き空間詞は「に」格である。連語レベルから主体“L女士”は“疏通调停, 排难解纷”[いざこざの仲裁、もめごとの解決]などの問題を解決のために「存在」する。“在+处所”は文中の状況語であり、“在同学中间”は後ろのいくつかの行為を行う範囲である。例(118)(119)の訳文に用いる格付き空間詞は共に範囲を示す「で」格である。

“在+处所”が「範囲と条件を表す空間」である場合(“在老师面前, 他经常很紧张。”[先生の前で、彼はしょっちゅう緊張しています。])であれば、一般的に「で」格を用いる。主語と空間詞が、もし人間と居場所の関係である場合であれば、「に」格を用いる場合(“她在床上坐着呢。”[彼女はベッドに坐っています。])も多くある。しかし、例(118)(119)の空間を表す語句“在中国”、“在同学中间”は、本動詞が示す行為や状況が実現する範囲と条件を表す空間であるが、前者は主語なので、[中国では]と訳され、後者は後続する出来事が複数なので、[同級生のなかにあって]と訳されている。文中の機能により訳文が異なってくる。なお、小説《关于女人》では、「範囲と条件を表す空間」の“在+处所”はいずれも動前系である。

1.5.3.2 行為動作と状態³¹⁾が実現する空間

本動詞が人間や生命力のあるものなどの行為や動作などにより発生した出来事、たとえば、通過移動などの行為、立ち居や消失など人間の行う動作、およびそれら行為動作などが残した結果的状态であれば、“在+处所”はその行為や動作の実現する場所を意味する場合であり、いずれも「行為動作と状態が実現する空間」の枠の中に収められている。

³¹⁾ 行為や動作の結果が存続する場合は(“他在手上扎针” 范 1982、「彼は腕に針を刺す」筆者訳)、「状態の実現する場所」として考えている。逆に言うと、結果が存続しない場合もある(“他在食堂吃饭” 范 1982、「彼は食堂でご飯を食べる」筆者訳)、このような場合は、「行為動作の実現する場所」として考える。

i. 出来事を行う空間

“在+处所”が「出来事を行う空間」を意味する場合であれば、空間詞は一般的に述部の状況語である。統計による例文の数から見ると、202例のうち、「出来事を行う空間」を意味する場合が一番多く、全部で84例あり、ほぼ四割を占めている。

(120) 我自己也远远的搬到另一乡村里的祠堂里住下——在那里，我又遇到了一个女人！（《女》）

私自身も遠く、別の村の祠堂へ引っ越した。そして、そこでまた一人の女性に出会った。（『女』）

(121) 有一年，正是二弟在唐山读书，六妹在天津上学，一个春天的早晨……（《女》）
二弟が唐山で、六妹が天津の学校でそれぞれ勉強していた年の春の朝……（『女』）

(122) L大姐在西南的一个城市里，换上军装，灰白的头发也已经剪短了。（《女》）
L姉さんは西南のある町で、白髪まじりの髪を短く切って、軍服を着て奮闘している。（『女』）

(123) 想到今天在办公室里所受的种种的气，想到昨夜因为孩子哭闹，没有睡好，这一家穿的是谁，吃的是谁，你的太太竟不体恤你一点……（《女》）
今日会社でいろんなトラブルがあったなあ、そういえばゆうべは子どもが泣いたんでよく眠れなかった。まったく女房のやつ、誰のおかげで生活できていると思ってるんだ。ちっとも俺の身になって考えてくれない。（『女』）

例(120)から(123)の文中の“在+处所”はいずれも「出来事を行う空間」を意味する。例(120)は「文頭式」の例文であり、例(121)と(122)は「直前式」の例文である。「直前式」では「出来事を行う空間」を意味する場合が84例中の63例中に用いられている。例(123)は主語が省かれている文である。

訳文中の対応している格付き空間詞は、上記の例文に見られるように、行為を行う空間を示す「で」格が一番多い。例(124)(125)の場合、“捶”“挥手”などの行為の主体は、空間詞が指示する場所から離れていないが、行為の影響が場所から離れた場合は、下記の例文に見られるように「から」格しか使えない場合もある。

(124) 我只以为她是同我母亲拌嘴，便在后面使劲的捶她的腿，……（《女》）

母といさかいをしているのだと思った私は、うしろから力いっぱい乳母の足をたたいた（『女』）

(125) 他们还在车窗里挥手……（《女》）

二人は車窓から手を振っていた……（『女』）

ii. 移動する空間

本動詞は移動を意味するが、移動する主体及び行為が、“在+处所”が示す空間の範囲内で実現する場合であれば、格付き空間詞は一般的に「を」格を用いる。この点か

ら「ヲ」格の空間詞は主体の移動する空間を表すと言える。小説《关于女人》では、あわせて3例ある。3例はいずれも「直前式」である。

(126) 我在各地漂泊，依然是个孤身汉子……（《女》）

私は各地を流れ歩き、あいかかわらず独身であるが……（『女』）

(127) 他们坐在会议室里或是在校门口徘徊……（《女》）

彼らが応接室に座っていたり、校門の前をうろうろしていたりすると……
（『女』）

iii. 立ち居する空間

「立ち居する空間」とは、本動詞の行う立ち居の動作や消失などの動作を意味する場合であり、空間詞は本動詞の表す意味が実現する場所である。

空間詞が主体の立ち居する動作の客語となっている場合であれば、連語は「立ち居のむすびつき」³²⁾を表す。主体は空間詞が指示している場所に存在している。動詞はヒトの立ち居が今発生しているか、又は発生した行為を表し、動作の結果存続を表す。

(128) 母亲只是默然的躺在床上。（《女》）

母は黙って寝床に横たわっていた。（『女』）

(129) 日本的规矩，是侍女和客人坐在一起的。（《女》）

給仕する女が客といっしょに座るのが日本のきまりなの。（『女』）

給仕する女が客と同じところに座るのが日本のきまりなの。（筆者訳）

例(128)の“躺在床上”の空間詞“床上”は、主体“母亲”の立ち居“躺在”する場所である。例(129)の“坐在一起”の“一起”は空間を意味する単語であり、複数の主体の[動作が同時に起こる]ことを意味する単語ではなく、[同じところに座る]の意味である。

小説《关于女人》では、立ち居を意味する“在+处所”を用いる文は、いずれも直後式の構造である。

iv. 消滅する空間

主体が人間であれば(例130)、空間詞は消失などの動作を意味する動詞の客語である。主体がモノであれば(例131)、一般的に文中の述部は客語を伴わない。このような場合、空間詞と本動詞の関係は「消滅のむすびつき」³³⁾である。

(130) 我知道我若有了这一切，我就会很快乐的消失在里面去。（《女》）

そのすべてが手に入れば、喜んでそのなかにこの身をとけこませるでしょう。（『女』）

³²⁾高橋弥守彦(2009:197~223)では、「立ち居のむすびつき」はある場所に立ち居する主体の運動を意味する連語である。(夏枝は再びピアノの前に座った。P250)

³³⁾高橋弥守彦(2009:197~223)では、主体の在処を意味する連語を「ありかのむすびつき」と言う。その下位には「出現のむすびつき」、「立ち居のむすびつき」、「存在のむすびつき」、「消滅のむすびつき」などの分類がある。

(131) 老太太的脚声，渐渐的在甬道中消失了。(《女》)

おばあさんの足音は、少しずつ通路の中に消えていった。(『女』)

一般的に消失のむすびつきを意味する場合は「から」格と「に」格の格付き空間詞を用いる。小説《关于女人》では、消失を意味する例文は2例あった。2例は「直前式」と「直後式」が、それぞれ1例ずつである。「出現」などの意味を表す例文は見つからなかった。

1.5.3.3 主体または客体がある結果に達する空間

この項目に入る例文では、空間詞は一般に空間を意味する客語であるが、主体が受事のモノ名詞である場合と空間を意味する状況語である場合とがある。文中にはモノを意味する名詞を伴い、文の受事客語が主体である。日本語訳の場合、「を」格のモノ名詞に「に」格の空間詞を用い、動詞は一般的に働き掛けの意味を表す。文は主体あるいは客体が人間の行為により、何らかの場所に達する意味である。

v. とりつけの空間

この項目に入る例文では、動詞がとりつけの意味を表す。空間はモノをとりつける場所を意味する。文中ではモノ名詞が客語であり、一般的に空間詞も客語であるが(例32)、状況語である場合もある(例133)。空間詞が状況語である場合、文は「直前式」である(例)。空間詞が客語である場合では、文は「直後式」の構造である(例32)。このような空間詞とモノ名詞と本動詞とで作る連語は「とりつけのむすびつき」³⁴⁾と考えられている。

(132) 我对于屋内的挂幅，选择颇严，希望对方不在案侧或床头，挂些低级趣味的裸体画，或明星照片。(《女》)

悪趣味なヌードやスターの写真など、机のわきや枕もとに飾らないこと。(『女』)

(133) 她正预备上课，开门看见了我和我的礼物，不觉嫣然的笑了，立刻接了过去，挂在灯上，一面说：“谢谢你，你真是细心。”(《女》)

先生はちょうど授業の下調べをしておられた。ドアを開けて私と贈り物をご覧になると、おもわず顔をほころばせ、「ありがとう。ほんとに気を配ってくれてるのね」とおっしゃりながら、ランプの側にそれをつるされた。

(『女』)

小説《关于女人》では、「とりつけのむすびつき」を意味する文はほとんどが「直後式」である。筆者の収集した例(132)のような「直前式」の例文は、わずか2例だった。

³⁴⁾高橋(2009:21)では「バッジをポケットにつける」のような「に格」の空間詞を用い、とりつけ動詞をカザラレとし、場所を意味する名詞をカザリとする連語が「とりつけのむすびつき」と言っている。

vi. 主体の到着する空間

文中の本動詞が到着の意味を表し、主体が空間詞の示す空間に到着する場合、本動詞と空間詞の関係は「到着のむすびつき」³⁵⁾と考えられている。一般的に主体が人間で、空間詞が本動詞の客語であるが（「我们集中在操场」「我々は運動場に集合する」作例）、主体が受事のモノ名詞である場合、空間詞を状況語として使う場合もある。（例134）

「主体が到着する空間」を意味する文構造は一般的に「直後式」であるが、小説《关于女人》では、直前式の一例しかない。

(134) 小包裹是从各地方送到, 在香港集中的。(《女》)

めいめいがいったん香港に送り、そこでひとつの小包にまとめて送ってきた。小さな贈り物がいくつかはいていた。(『女』)

小包は各地から送られてきて、香港に集まった。(筆者訳)

1.5.4 おわりに

本節では“在+处所”の用法を[表 1-6]のように、大きく「範囲と条件を表す空間」、「行為行動と状態が実現する空間」、「結果的に達する空間」のように3つに分ける。その中の「行為動作と状態が実現する空間」と「結果的に達する空間」では、下位に細分類がある。[表 1-6]にある数字は、実際の言語環境における場合の空間詞の意味する各意味機能で使う頻度を示している。

本動詞の前に用いる「動前系」は一般的に「範囲と条件を表す空間」と「出来事を行う空間」を表し、日本語訳では範囲を意味する「で格」と動作行為を行う空間を意味する「で格」の空間詞を用いる。「動後系」は一般的に「立ち居る空間」と「取り付けの空間」を表し、日本語訳ではとりつけの空間を意味する「に格」と立ち居る（存在する）空間を意味する「に格」を用いる。

「動前系」は「動後系」と比べると、使う頻度が高く用法が豊かである。「場所主語」のケースでは、空間詞は「範囲条件を表す空間」より、「出来事を行う空間」に使う頻度が高く、しかもほとんどがアスペクト助詞付きで、行為動作の結果状態を意味している。

今回は小説《关于女人》に用いる“在+处所”の例文を分析したが、「文末式」の例文は見つかっていない。「文末式」が使われるのは中国の南方だからであろう。別稿では、ほかの小説を対象にして“在+处所”の例文を集め、統計図を作り、主語が場所である場合の“在+处所”の用法、及び「文末式」の用法を調査分析する。

³⁵⁾高橋 (2009:109~128) では、「学校に着く」と「二階へ駆け上がった」のように、「に格」だけでなく、「へ格」の空間詞を用い、到着を意味する動詞をカザラレとし、場所を意味する名詞をカザリとする連語が「到着のむすびつき」と言っている。

第6節 存在文と“在字句”について

本節では場所を主語とする存在文と文中に“在+处所”を用いる“在字句”を比較し、その異同について言及する。

1.6.1 はじめに

下記に挙げる例(135)、(136)のような現代中国語の存在文は、その右側に示すように、一般的に言えば“在字句”に置き換えることができる。

(135) 床上躺着一个人。→(有)一个人在床上躺着。(宋玉柱 2007:99)

ベッドに人が一人横になっている。→誰かが一人ベッドに横になっている。
(筆者訳)

(136) 街上跑着两辆汽车。→(有)两辆汽车在大街上跑着。(宋玉柱 2007:99)

大通りでは車が二台走っている。→二台の車が大通りを走っている。(筆者訳)

存在文から置き換えられた後の“在字句”では、存在文の客語(“一个人”“两辆汽车”)が文頭に用いて作られ、存在文と同じ出来事を表す。上記の“在字句”は有情物の動作(例136の“汽车”も有情物扱いであろう)を意味するのに対して、存在文はそのモノの動き(状態)を表している。例(135)は静的な状態であり、例(136)は動的な状態である。

存在文と“在字句”(例135、136のような兼語文の場合も含む)は、文レベルでは異なる角度から同じ出来事を表している。そして、連語レベルでは、文中の「連語」(“(床上) 躺+人”“(人) 躺+床上”)が同じ出来事を表していると言えよう。

有情物(ヒト)の動作とモノの動きの関係について、以下に挙げる鈴木康之(1983、2014)の連語論に関する観点を活用し、ここでは連語レベルにおける両者の関係を明らかにしたい。

動詞「流す」「動かす」は、なんらかの対象を想定したヒトの動作を意味していて、「汚水を流す」「電車を動かす」というような連語をつくる。また、その際には、モノの動きを意味する動詞「流れる」「動く」を使用して「汚水が流れる」「電車が動く」のような連語をつくることもできる。事実としては、ヒトの動作によって実現されるモノの動きである。

(鈴木康之 2014:1)

鈴木康之は、上記のようにヒトの動作(「汚水を流す」「電車を動かす」とモノの動き(「汚水が流れる」「電車が動く」と)との関係を連語レベルで体系的にとらえ、両者の関係を明らかにしている。両者の関係については、連語レベルで考えるべきであり、モノの動きについては主語と述語との関係でとられてはならないとし、上記の観点を裏付ける考えを次のように示している。

そうだとすれば、「汚水が」「電車が」と「ながす」「うごく」とのむすびつきを、主語と述語との関係として考えてはならない。

(鈴木康之 1983:39)

高橋弥守彦(2013)では、“我们吃馒头。”[私たちはマントウを食べます。]のように中国語の文は、単語“我们”と連語“吃馒头”で作るのが一般的だが、一語文“出发！[出発！]”もあるし、主述連語“我们走！[出かけよう！]”や述客連語“吃水果！[果物を食べて！]”で作る文もあると述べ、イントネーションを付ければ、単語も文になるし、連語も文になるとしている。鈴木康之の日本語に関する連語論の観点を支持し、[汚水が流れる][電車が動く]も連語であり、イントネーションをつけると文になる、としている。

高橋弥守彦は同論文で日本語も同様だと述べ、[汚水を流す][汚水が流れる]はともに連語だとする鈴木康之の連語に対する観点を支持している。なお、言語学研究会では、鈴木康之以前は[汚水を流す]は連語だが、[汚水が流れる]は文レベルで考えるべきだとしていた。鈴木康之により[連語は2つ以上の具体的な意味を表す単語のくみあわせであり単語より具体的な意味を表す。]という連語に対する概念が確立されるとともに連語の概念も大きく変わったのである。筆者も鈴木康之と高橋弥守彦の説を支持する。

本節では鈴木康之の現代日本語文法連語論の概念を運用し、例文と理論の両側面から、中国語の存在文と“在字句”に用いる「連語」を分析し、その共通点についての分析を試みる。

1.6.2 存在文の文型について

张先亮、范晓など(2010:111~119)には、“存在句为主谓句的基干句模”[存在文は主述文の基本文型である]と“存在句为非主谓句的基干句模”[存在文は非主述文の基本文型である]という項目がある。両者の観点は異なり、それぞれ存在文を「主述文」として扱うか否かによって、文成分の並び替え(原文は“语义成分的配置格局”)を分析する方式である。

存在文を「主述文」として扱う場合には、“基干句模”(これ以降は「基本文型」と訳す)には2つの文構造がある。

I “起事+动核+止事”構造であれば、動詞は一般に“有”か“是”かである。

(137) 屋里有入。(张先亮、范晓など 2010:110)

部屋に人がいる。(筆者訳)

(138) 袋子里是一件衣服。(张先亮、范晓など 2010:110)

袋の中に服が一枚ある。(筆者訳)

Ⅱ “位事+动核+系事” 構造であれば、客語は一般に自主性のない、ある状態を表す“系事”である。

(139) 房顶上积着一层雪。(张先亮、范晓など 2010:110)

屋上に雪が積もっている。(筆者訳)

(140) 河面上结了一层冰。(张先亮、范晓など 2010:110)

河に氷が張っている。(筆者訳)

(141) 门口坐着两个人。(张先亮、范晓など 2010:110)

入り口に人が二人腰掛けている。(筆者訳)

例 (138) (139) の客語“雪、冰”はモノ名詞であり意思を持たなく、連語レベル“积着一层雪、结了一层冰”でも意思を持たないが、例 (140) の“人”は単語レベルではヒト名詞であり意思がある。しかし、連語の中では“坐着两个人”は状態を表しているだけであり、ヒトとしての意思はなくモノ名詞と同様に扱われている。

存在文を「主述文」として扱わない場合の「基本文型」には、次に挙げる5つの文構造がある。なお、下記の“动核”は動詞が文の核になっていることを表す。

i “处所+动核+施事”であれば、動詞は普通不及物の動作動詞である。

(142) 门口站着礼仪小姐。(张先亮、范晓など 2010:111)

入り口にコンパニオンが立っている。(筆者訳)

ii “处所+动核+系事”であれば、動詞は普通不及物の状態動詞である。

(143) 湖面上漂着浮萍。(张先亮、范晓など 2010:111)

湖には浮草が漂っている。(筆者訳)

iii “处所+(施事)+动核+受事”であれば、本構造中の“施事”は文中の含意的な成分であるが、文中に現れることが許されない。

(144) 头上戴着一顶帽子。(张先亮、范晓など 2010:111)

〈頭に〉帽子をかぶっている。(筆者訳)

iv “处所+(施事)+动核+成事”、この“施事”も含意的な成分である。

(145) 枕头上绣着一对鸳鸯。(张先亮、范晓など 2010:111)

枕の表面に鴛鴦一对の刺繍がしてある。(筆者訳)

v “处所+(施事)+动核+工具”であれば、本構造中の“施事”と“受事”は文中の含意的な成分であり、動詞は“处所”と“工具”を求める。

(146) 中间绑着一根铁丝。(张先亮、范晓など 2010:111)

真ん中は針金一本で括っている。/(~何かをくくる)針金が一本ある。(筆者訳)

存在文を「主述文」として扱わない場合は、主体が文末の客語の位置に用いられるという考え方である。本稿では存在文を「主述文」の一種類として扱い、文頭の場合名詞を主語と考えている。それにしたがって、上記のⅠとⅡ(大文字)は文レベルの分析

で、i から v (小文字)は連語レベルでの分析である。連語レベルと文レベルの“系事”は共通であるが、連語レベルの“施事”“受事”“成事”“工具”などの成分も、文レベルでは“系事”となると言えよう。

[表 1-7] 存在文における文レベルと連語レベルの構造関係について

文レベルの分析	連語レベルの分析
I、起事+动核+止事	
II、位事+动核+系事	i、处所+动核+施事
	ii、处所+动核+系事
	iii、处所+(施事)+动核+受事
	iv、处所+(施事)+动核+成事
	v、处所+(施事)+动核+工具

1.6.3 存在文と“在字句”の関係について

存在文はいずれも“在字句”に置き換えることができるが、“在字句”はすべて存在文に置き換えることができるというわけではない。以下では存在文を「文構造」と「名付け的な意味」の角度から分析を行う。

1.6.3.1 存在文と“在字句”の文構造について

存在文を「主述文」とする単純存在文の客語は“止事”である。文中の動詞が“有”“是”又は動詞がない場合(名詞述語文)であれば、例(147)のように“在”を本動詞とする“在字句”に置き換えることができる。

(147) 桌子上有/是书。桌子上一堆书(作例)→书在桌子上。

机の上には本がある。机の上には本が一山ある。→本が机の上にある。(筆者訳)

存在文の客語が“系事”(上記の[表 1-7]のII)であれば、一般には「動前系」“雪在房顶上积着。”[雪が屋上に積もっている。]、あるいは「直後式」“雪积在房顶上。”[雪が屋上に積もる。]の“在字句”に置き換えることができる。

i “处所+动核+施事”と ii “处所+动核+系事”の“处所”は、動作の行われる(状態が実現する)空間である。空間は一般的に主体の動作と状態より先に存在するので、旧情報とされやすく、下記の例文に示すように、よく「動前系」の“在字句”に置き換えられる。(「有 NP₂物+在+NP₁处+V 着」で作る兼語文に置き換えられる場合もある)

(148) 湖里游着一群鸭子。(李临定 1993:335)

→一群鸭子在湖里游着。/在湖里，一群鸭子游着。(作例)

湖ではアヒルの一群が泳いでいます。(李临定 1993:335)

→アヒルが一群、湖で泳いでいます。(筆者訳)

(149) 草原上弥漫着晨雾。(宋玉柱 2007:56)

→晨雾在草原上弥漫着。/在草原上，晨雾弥漫着。(作例)

草原には朝霧が立ち込めています。→朝霧は草原に立ち込めています。(筆者訳)

場所名詞が到着する空間を表せば、動作が先に行われ、空間は新情報とされやすい。この場合「直後式」の“在字句”に置き換えることもできる。例えば、例(149)の a. と b. はそれぞれ「到着する空間」と「動作状態が実現する空間」と認識される。

(150) 沙发上躺着一个人。(李临定 1993:329)

→a. 一个人躺在沙发上。b. 一个人在沙发上躺着。(作例)

ソファに誰かがひとり横になっています。(李临定 1993:329)

→人が一人ソファに横になっています。

iii “处所+(施事)+动核+受事”、iv “处所+(施事)+动核+成事”、v “处所+(施事)+动核+工具”では、“施事”が文中に現れなければ、このような「動前系」の“在字句”は存在文でもある。例(150)のような“在+处所”を文頭に用いる存在文は、物のありかを更に強調している。

(151) 在桌子上(他)放着几本书。[文頭式]=(他)在桌子上放着几本书。[直前式](作例)

机の上に本が数冊置いてある。(筆者訳)

そして、“处所”は一般的に動作が実現した後、モノが到着する空間なので、新情報でもある。例(151)のように「直後式」の“在字句”に置き換えられる場合が多く、“把字句”に置き換えることもできる³⁶⁾。(“有 NP₂物+V 在+NP₁处”で作る兼語文に置き換えられる場合もある)

(152) 坟前摆着鲜花。→鲜花摆在坟前。→把鲜花摆在坟前。(张先亮、范晓など 2010:117)

墓の前に花が置いてある。→花が墓の前に置いてある。→花を墓の前に置く。(筆者訳)

存在文の“处所”がモノの「動作状態が実現する空間」と認識されている場合、旧情報となり、例(152)のように、「直前式」に置き換えることもできる。

(153) 鲜花在坟前摆着。(作例)

花が墓の前に置いてある。(筆者訳)

³⁶⁾ 张先亮、范晓(2010:117)には“‘V着’存在句都可以变换成‘NP₂(人或事物)+V在+NP₁处’句。(NP₂が施事ではない場合)可以变换为‘把NP₂+V在+NP₁处’”と指摘しているが、“湖里游着一群鸭子→*一群鸭子游在湖里。”のような動態存在文は例外である。

上掲の動前系と直後式とでは、両者の意味を的確に区別する日本語訳にすることはきわめて困難である。

本章の例(5)“他放了几本书在桌子上。”のような文末式は、モノへの処置を表す構造であり、文中に必ず“施事”と“受事/成事/工具”が現れるので、存在文へ置き換えることができない。

1.6.3.2 存在文と“在字句”に見られる名付け的な意味

存在文はそのモノの状態を表すだけだが、“在字句”は有情物の動作と、この動作と関わる何らかの状態を表す。本章第四節の[表 1-5]で示す“在字句”の各構造と日本語の格付き場所名詞との対応関係から、“在字句”に見られる名付け的な意味も把握できる。存在文と“在字句”に共通する連語のむすびつきは、次のように示せる。

連語が有情物の「とりつけ(鈴木康之 2011:13)」(例 154)、「つくりだし(鈴木康之 2011:22)」(例 155)、「道具の使用³⁷⁾」(例 156)を表す場合、文レベルであれば、存在文は動作による“受事”“成事”“工具”の存在だけを表すが、“在字句”は“施事”の動作、又は動作の結果を表す。

(154) a. 正中天然几上，玻璃罩子里，搁着珉琅自鸣钟……（《倾城之恋》）

中央の天然木のテーブルの上のガラスケースのなかには、七宝焼のオルゴール時計が納まっている。(同上)

b. 自鸣钟放在玻璃罩子里。/自鸣钟在罩子里放着。(作例)

七宝焼のオルゴール時計が中央の天然木のテーブルの上のガラスケースのなかに納まっている。(筆者訳)

(155) a. 维嘉走过来坐在老人身旁，这会儿，他的视线又被老人手中那拳头粗的竹烟管吸引住了，烟管上刻着一个奇怪的花纹。（《轮椅上的梦》）

となりに腰をおろした維嘉は、拳のように太い煙管に奇妙な模様が彫ってあるのを見た。(同上)

b. 奇怪的花纹刻在烟管上。/奇怪的花纹在烟管上刻着。(作例)

奇妙な模様が太い煙管に彫ってある。(筆者訳)

(156) a. 范克明听说，又跳出来，抬头一看，屋顶的烟筒口上，严严实实地盖着一块石板……（《金光大道》）

范克明も出てきて、煙突の口がひらたい石でピッタリふさがっているのを見あげた。(同上)

b.(用)石板盖在烟筒口上。/石板在烟筒口上盖着。(作例)

ひらたい石で煙突の口を塞いでいる。(筆者訳)

³⁷⁾(道具)その助けをかりて成立する動作の手段を示す「対象的なむすびつき(奥田靖雄 1983:235)」の指摘に基づいて、例(156)のような客語が“工具”を意味する場合、「道具の使用のむすびつき」と呼ぶ。

存在文の連語（下線部）が有情物の「空間的な移動(鈴木康之 2011:28)」(例 157)、「立ち居(鈴木康之 2011:30)」(例 158)、無情物(モノ)の「繰り返し・膨張・放射³⁸⁾」(例 159)を表す場合、文レベルであれば、存在文は動作による“施事”“系事”の存在を表し、“在字句”では存在文の客語が主語となり、“施事”の動作の持続、又は“系事”の現在の状態を表す。

(157) a. 草原上奔驰着一群骏马。(李临定 1993:335)

草原には駿馬の群れが疾駆しています。(同上)

b. 骏马奔驰在草原上。/骏马在草原上奔驰(着)。(作例)

駿馬が草原を走っている。(筆者訳)

(158) a. 桌边的长凳上蹲着几个赶车的庄稼人,他们把拧成麻花似的长鞭杆儿靠在肩头,……(《轮椅上的梦》)

長い腰掛けにうずくまっていた男たちは、麻花のように皮紐を巻き付けた鞭を肩にかけ……(同上)

b. 赶车的庄稼人蹲在桌边长凳上。/赶车的庄稼人在桌边长凳上蹲着。(作例)

男たちは長い腰掛けに蹲っている。(筆者訳)

(159) a. 这是件开心事,小伙子们都聚拢来,眼里闪着异样的光彩。(《金光大道》)

面白い話題なのでみんな集まってきて目をギラギラさせている³⁹⁾。(同上)

b. *异样的光彩闪在眼里。/异样的光彩在眼里闪着。(作例)

目をキラキラさせている。(筆者訳)

例(159)bの“*闪在眼睛里”の場合では、直後式の“在+处所”は、動作の主体または動作の結果が到達する場所を意味するので、“*异样的光彩闪在眼里。”は非文である。

1.6.4 おわりに

存在文と“在字句”が置き換えられる場合、ほぼ同じ意味を表す。文レベルでは出来事の具体的な側面を描写している。それに対して、連語レベルでは同じ出来事を名付けている。

今回は存在文と“在字句”の構造、そして名付け的な意味の角度から両者の関係を分析したが、連語レベルの研究は始まったばかりであり、まだ研究すべきところが多い。存在文と“在字句”の関係を明らかにして、連語レベルからの更なる分析が必要であるが、それは別稿に委ねる。

³⁸⁾ 本稿の「2.3.3 動態存在文の再整理」では、動態存在文を i 「空間的な移動」、ii 「無情物の繰り返し」、iii 「無情物の膨張・放射」の3類に分類している。ii 「無情物の繰り返し」とiii 「無情物の膨張・放射」の出来事の主体はいずれも“系事”なので、本節ではまとめて分析する。

³⁹⁾ 文学作品の日本語訳として前後文の影響を受け、下線部は「存在」を表していない場合もある。

言語資料

大辞泉辞書 小学館日中辞典 V2 新明解国語辞典

教育部语言文字应用研究所计算语言学研究室语料库 www.cncorpus.org

北京日本学研究中心《中日对译语料库》(第一版)(2002、2003)

《家》；《呐喊》；《盖棺》；《彷徨》；《黑雨》；《破戒》；《钟鼓楼》；《丹凤眼》；《人啊，人》；《情系明天》；《金光大道》；《关于女人》；《轮椅上的梦》；《活动变人形》；《插队的故事》；《轱辘把胡同9号》；《日本列岛改造论》

参考文献

王还(1957)〈说“在”〉《中国语文》第二期

范继淹(1982)〈论介词短语“在+处所”〉《语言研究》第一期

山口直人(1983)『文中における‘在+处所’の位置とその意味の研究』(未出版)

李臨定著、宮田一郎訳(1993)『中国語文法概論』光生館

沈家煊(1995)〈“有界”和“无界”〉《中国语文》第五期

吕叔湘(1996)〈现代汉语八百词〉商务印书馆

沈家煊(1999)〈“在”字句和“给”字句〉《中国语文》第二期

刘月华潘文娉等著(1999)『現代中国語文法総覧』相原茂監訳、片山博美、守屋宏則、平井和之訳くろしお出版。

北京大学中国語言文学系現代漢語教研室(2004)『現代中国語総説』三省堂

高橋弥守彦(2008)「介詞“在”とそれに対応する空間名詞の格について」『日本語言文化研究』第八輯 学苑出版社

三原健一(2008)『構造から見る日本語文法』開拓社

邢福义(2009)《汉语语法学》东北师范大学出版社

高橋弥守彦(2009)『格付き場所名詞と〈ひと〉の動作を表す動詞との関係 再考』

成戸浩嗣(2009)『トコロ表現をめぐる 日中対照研究』好文出版社

单宝顺(2011)《现代汉语处所宾语研究》中国社会科学出版社

高橋弥守彦(2011)「連語論から見る場所名詞の位置について」『外国語学会誌』NO. 40 大東文化大学外国語学会

鈴木康之(2011)『現代日本語の連語論』(日本語文法研究会)(彭广陆、毕晓燕 译(2013))《现代日语词组学》北京大学出版社)

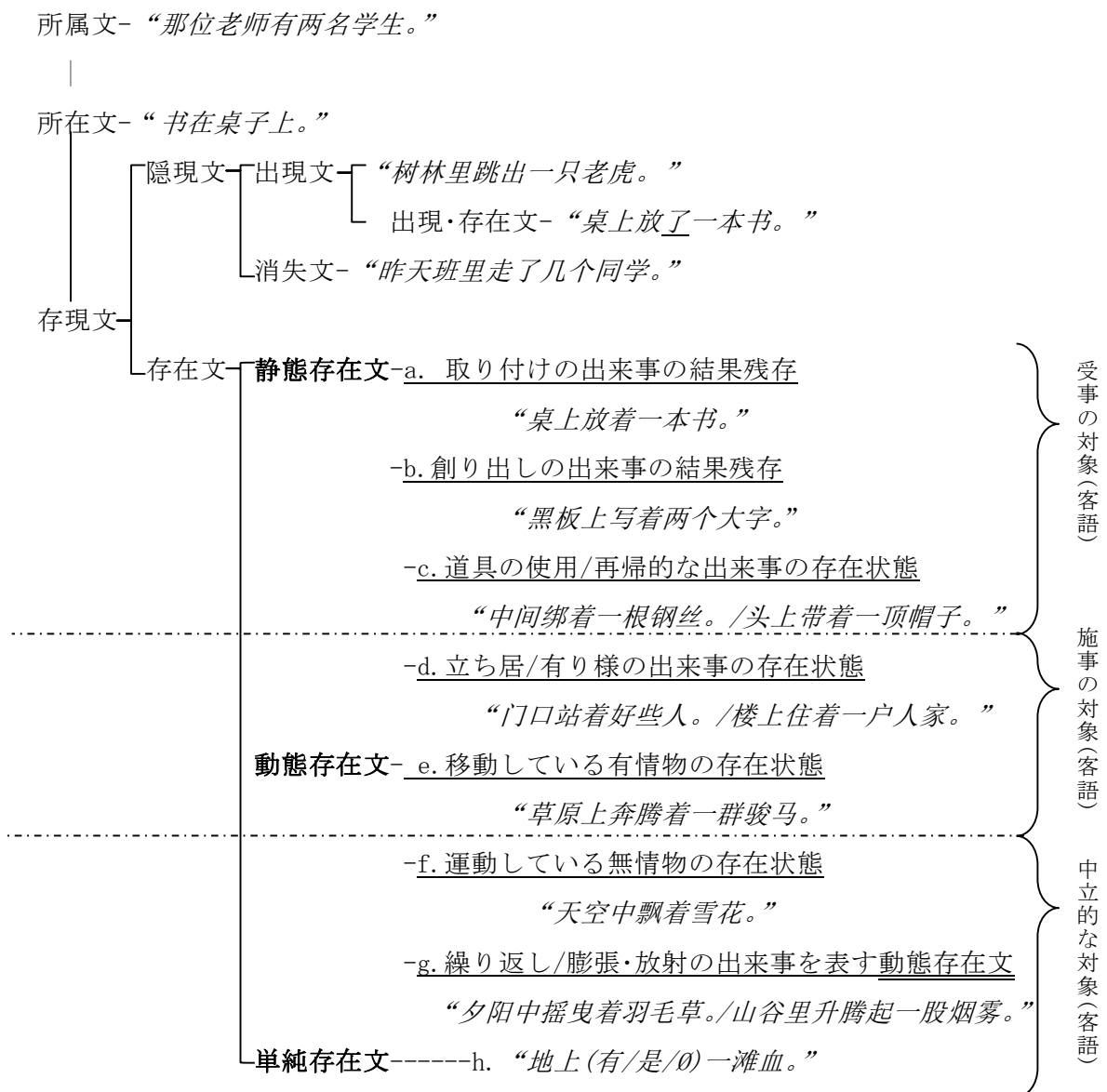
鈴木康之(2014)「モノの動きを意味する連語の特徴…連語論に関心をもつ若い研究者達に…」授業用プリント

第二章 現代中国語の存在文

前章では連語論の考え方を活用して中国語の“在字句”を分析し、“在+处所”と日本語の格付き場所名詞との関係を検討した。本章は同じ手段で現代中国語の存在文を分析し、下位分類を行う。

存在文と関連する「所属文」、「所在文」、「隠現文」の区別、及び存在文の下位分類を以下の[表 2-1]で示す。

[表 2-1] 所属文、所在文、隠現文、存在文の全体像



上記の[表 2-1]のなかの「所属文」⁴⁰⁾は、本動詞に“有”を用いる所謂“所有句”のことである。「所在文」は前節で分析した「“在”が文中の本動詞」の“在字句”のことである。「存在文」と「出現・消失文」を合わせて、「隠現文」と呼ぶ。先行研究では、一般に「出現・消失文」と「存在文」とは、同じ出来事の異なる段階を表す文と考えられている。

[図 2-1] 張先亮、范晓など(2010)の隠現文

・ 出現 → ・ 存在 ————— → ・ 消失

事物的“出現”、“存在”、“消失”都是事物的运动状态。虽然事物的这三种状态在时间轴上有连续性，但毕竟是事物运动状态的不同时间段的体现。……一般地说，“出現”和“消失”在时间轴上是比较短暂的，甚至是瞬间的，但“存在”在时间轴上是具有持续性的，显示相对比较长的一个时间段。

(張先亮、范晓など 2010:42 より)

对背景 N1 来说，N2 (事物) 要么是“突如其来”的事物，要么是“突如其去”的事物。不管是“来”的还是“去”的，冰雨名词 N2 都可以看作是“前景”(foreground) 化的凸显事物，是一个认知上的焦点。……从语义关系来看，隠現句所描写的“出現”和“消失”是彼此相反的对立情况，但从知识结构来看，“出現”和“消失”并不对立，而只是同一件事情的表里两面而已。

(古川裕 2001:266)

「所属文」「所在文」は、「隠現文」と同じ時間軸上の出来事ではない。また、「隠現文」の客語の事物が認識上の「焦点(図)」である点においても異なる。さらに、「隠現文」の下位分類の「存在文」と「出現・消失文」が反映する出来事の側面も異なる。よって、本章では「所属文」、「所在文」、「隠現文」、そして「出現・消失文」、「存在文」それらの構文を区別して、「存在文」に含まれる[表 2-1]の「a」から「h」の場合を分析する。

本章の第 1 節では、存在文における「焦点(図)」と「背景(地)」との関係について論じる。第 2 節から第 4 節までは、李臨定 (1993) の分類の順序に基づき、「静態存在文」、「動態存在文」、「単純存在文」を考察する。

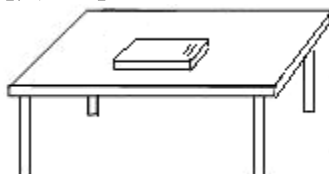
⁴⁰⁾ 「所有関係」の他に、「所属関係」を表す場合もあり、本章では「所属文」と呼ぶ。

第1節 存在文における「図」と「地」

2.1.1 はじめに

次の[図 2-2]のような現実を目の前にした際、あるいはその現実を誰かに伝達すると、例(1)のような存在文を用いるか、又は例(2)のような“在字句”を用いるか、という二通りの選択肢がある。

[図 2-2]



(1) 桌上放着一本书。→桌上有一本书。(作例)

テーブルには本が置いてある。→テーブルには本がある。(筆者訳)

(2) 一本书放在桌上。/一本书在桌上放着。→一本书在桌上。(作例)⁴¹⁾

本がテーブルの上に置いてある。→本がテーブルの上にある。

人間の影響(施事)を背景化して、例(1)、(2)のような表現の文が存在する。[図 2-2]を「図⁴²⁾(焦点)」と「地(背景)」に分けて認識すれば、一般には“書”が焦点になる。つまり、存在文の文末の“書”と“在字句”の文頭の“書”が「認識上の焦点」である。しかし語順の違いにより、「形式上の焦点」はそれぞれ存在文の文頭の“桌上”と“在字句”の文頭の“書”となる。存在文においては、「認識上の焦点」≠「形式上の焦点」という状況が生じ、それによって、存在文の主語と客語をめぐる問題が長い間議論されている。

「目立つ対象が主語になる」という原則に従えば、存在文(例1)では文末の部分“一本书”が主語になる。存在文研究においては、50年代に英語と同様、存在文の主語が文末にあるという指摘が盛んである。しかし、近年の研究では、存在文の主語が文頭の部分であるという考え方が主流となっている。本節では、この問題について、筆者の考え方を述べる。

⁴¹⁾ “在+处所”を用いる文構造は全部で以下に挙げる5種類である。本節では「施事」を背景化して、ものが主語となる“在字句”を取り上げる。

(1) 几本书在桌子上。—数冊の本が机の上にある。(作例)

(2) 在桌子上他放了几本书。—テーブルの上に、彼は本を数冊置きました。

(3) 他在桌子上放了几本书。—彼は机の上に本を数冊置きました。

(4) 他把几本书放在桌子上。—彼は本を数冊、机の上に置きました。

(5) 他放了几本书在桌子上。—彼は本を数冊机の上に置きました。(李臨定 1993:206-213)

⁴²⁾ 「図と地 (figure&ground)」(辻幸夫 2013:194)、又は「前景[化]と背景[化] (froeground [ing] & background [ing])」(辻幸夫 2013:204)

2.1.2 認知言語学における「図」と「地」

普通、「知覚上、目立つ対象を主語（の位置）、目立ち度の低い対象にそれ以外の文法機能（目的語、副詞的機能）を与えることにほかならず。」（辻幸夫 2013:204）と一般的な認知言語学では述べる。その「目立つ対象」が即ち「図(焦点)」で、「目立ち度の低い対象」が「地(背景)」である。

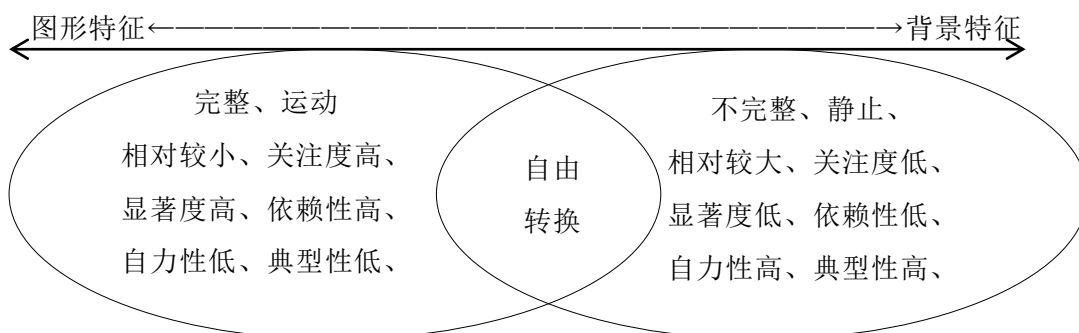
実例では、ある問題に焦点があてられると、図と地の役割が逆転することがあるが、一般的な知覚レベルでは、図(焦点)を特徴づける要因として、次のようなものが知られている。

- i. 2 次元的に閉じている図形が図になりやすい。（完結性）
- ii. 相対的に面積の小さい方が図になりやすい。（大きさ）
- iii. 垂直・水平なものの方が斜めのものより図になりやすい。（向き）
- iv. 単純・規則的・対称的な領域の方が図になりやすい。（バランス）
- v. 中央にあって、より近いところに見えるものが図になりやすく、背後に広がっているように見えるものは地になりやすい。（奥行き）
- vi. 明るいもの、鮮やかなものは図になりやすい。（明るさ）
- vii. 動くものは図になりやすい（動静）
- viii. 既存の意味や価値に関係付けられるものは図になりやすい。（価値）

（辻幸夫 2013:194）

例（1）の存在文は形式上の焦点“桌上”と認識上の焦点“书”ががあり、辻幸夫の挙げる図と地の規則に従っていない。例（2）の“在字句”は辻幸夫が上記に挙げる図と地の規則に従っている。そして、陈忠による以下のような図式もある（以下の図式は上記の辻幸夫とやや異なるところがある）。これらの「要因」の一部を満たせば、「図(焦点)」または「地(背景)」になれる。

[図 2-3] 陈忠 (2007:275) “图形特征”と“背景特征”



（陈忠 2007:275）

辻幸夫の説に従えば、[図 2-2] を以下の左側の文ように表現することができない。ここで列挙する非文は言葉が現実を反映するの規則に外れる。

(1)' *书下放着一张桌子→书下有一张桌子(作例)

*本の下にはテーブルが置いてある。→本の下にはテーブルがある。(筆者訳)

(2)' *一张桌子放在书下。/一张桌子在书下放。→一张桌子在书下。(作例)

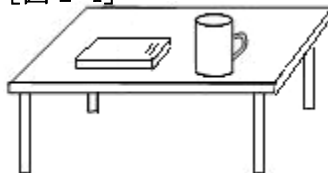
*テーブルが本の下に置いてある。→テーブルが本の下にある。(筆者訳)

陈忠では、その理由について、事物が独立して存在する自立性の強弱に求め、次のように指摘している。陈忠の説に従えば、“桌上”は“一本书”より自立性が高いので、例(1)の存在文が成立する。

“自力性”是指事物独立存在的程度。自力性强的事物，先于自力性弱的事物存在……桌子的自力性高于书，因为桌子现在这里，所以书才能在桌子上，而不是相反。

(陈忠 2007:268)

[图 2-4]



[图 2-4] では、テーブルの上に[本]と[コップ]がある。この現実は、どちらに焦点を当てるかにより、“书的旁边有一个杯子。”[本のよこにコップがある。]→“杯子的旁边有一本书。”[コップのよこに本がある。]のように、[本]と[コップ]両方の図と地の役割を簡単に逆転させることができる。この場合、[テーブル]と施事が更に背景化されたと言えよう。

ここの[本]、[コップ]、[テーブル]はいずれも一定の空間を占めるモノ名詞である。「地(背景)」とされるモノ名詞に[~の上/横]などを加えて、人間が関わり、方向性が生れ場所となる。そのため、組織名詞[学校]や固有名詞[東京]などは、そのまま場所を表せるが、モノ名詞は方位詞を加えると場所にもなれる。そこから、更に抽象的な「空間概念」も出てくる(岡智之 2013:3)。

一般的に言えば、例(2)の“在字句”のように、図(焦点)が主語でモノであり、地(背景)が客語で場所であるが、存在文はそうではない。陈忠は以下のように述べている。

句法图形、句法背景跟认知层面图形和背景有区别也有交叉。主语是句法图形，却不一定是认知层面的图形。句法结构上的图形一定在句首位置，认知层面的图形则不一定在句首位置。如“门口站着个人”当中，“门口”在句法上是图形，但是在认知层面上却是背景。“一个人站在门口”当中，“门口”是句法上的背景，在认知层面仍然是背景。(陈忠 2007:276)

陈忠は、「形式上の焦点」について、語順は“動作链”によって定められるとし、次のように指摘している。

能量源头——施事是最显著的角色，是能量的发起者……这就是为什么实施倾向于充当主语，受事倾向于充当宾语。

根据句内不同语义成分的显著度，可以把不同语义成分分为“图形-背景”的关系。句法图形对应于主语，句法背景对应于宾语。充当主语和宾语的语义角色优先顺序列：施事>感事>工具>系事>地点>对象>受事

(陈忠 2007:284)

力の伝わる方向によって「順位」が決められる。この順序は“動作链”と呼ばれる。この順位で文中の主語—「形式上の焦点」が決められる。

“動作链”は時間の順序を反映している。言い換えれば、「形式上の焦点」は現在、出来事がどんな段階に当たるかを示しているとも言えよう。(例えば“他吃饭。”の場合、受事の“饭”が主語になった文“饭被吃了。/饭吃掉了。”は、動作を実現、出来事の完了を意味している。) すなわち、「認識上の焦点」と「形式上の焦点」は異なる領域の概念を表している。認識上、「図(焦点)」と「地(背景)」にされるモノ間の関係に感心を持ち、形式上、「図(焦点)」とされる“语义角色”が出来事の異なる段階を反映している。(中国語の語順はアスペクトを表す機能を持つと考えられている、その点については本稿の第三章で分析する。)

2.1.3 存在文の主語

50年代に活発に議論された現代中国語の主語と客語の問題についての討論では、存現文が焦点の一つとなった。存在文の主語と客語が何に基づいて決めるべきかが曖昧だったからである。主に以下に挙げる3種類の考え方(①文末に主語が現れる“台上坐着主席团”。②文頭が主語、文末を客語“台上坐着主席团”とする。③無主語文“台上坐着主席团”とする。)がある。

按照施事标准划分主语的人把句末表“施事”的名词看作主语，叫主语后出现。例如“台上坐着主席团”“床上躺着一个人”，而把表示“受事”的名词看作宾语，如“墙上挂着一张画”“门口放着一辆车”。由于施事标准划很缺乏说服力，又难以贯彻，所以这种主张已经被淘汰。

主张按照词序标准划分主宾语的人，把句首表示处所的名词看作主语，把句末表存在的词语看作宾语。

另一种主张是把句首的处所词语看做状语，把句末的名词看作宾语，全句为“无主句”。

(宋玉柱 2007:72)

上掲の3種の考え方を参考にすると、[表 2-2] で示す通り、存在文では文頭の場所を意味する NP_L が主語であり、「形式上の焦点」として考えられる。

[表 2-2] 存在文における各文成分の役割について

NP _L	+	VP	+	NP	
主語 (形式上の焦点)		述語		客語 (形式上の背景)	——— 文法形式
<u>i</u> NP _L (地上/満地)	+	∅/有/是	+	NP (一摊血/烟头)	} 認知
场景役 (認識上の背景)				主体 (認識上の焦点)	
<u>ii</u> NP _L (桌子上)	+	VP (放着)	+	NP (一本书)	
场景役 (認識上の背景)		(主体) 受事 (認識上の焦点)			
<u>iii</u> NP _L (草原/桌子上)	+	VP (奔驰/坐着)	+	NP (一群骏马/一个人)	} 認知
场景役 (認識上の背景)		(主体) 施事・中性 ⁴³⁾		(認識上の焦点)	
主題 (旧情報)				客題 (新情報)	————— 語用

「主語—客語」、「主体⁴⁴⁾—场景役」、「主題—客題」は、それぞれ「文法形式」、「認知」、「語用」レベルの関係である。[表 2-2] にある「场景役」は、陈忠により以下のように説明されている。

(主語になれる) 施事、感事、工具、系事、地点、対象、受事等成分都是核心角色。实际上句子中还有另一种角色:场景角色。(本節は「场景役」と訳す)

一切事物都存在于一定的空间处所当中，空间处所是事物存在和运动必要构成要素。一般情况下人们关注的是能量传递的过程，而空间作为背景处理，除非空间处所作为关注的对象。这就是为何处所很少作为主语。

(中略)

……除了充当核心的语义角色外，句子往往还有时间、处所等场景角色。场景角色的凸显度比核心角色低。如：

他在上海学习。(“上海”是场景角色，凸显度低)

他住在上海。(“上海”是核心角色，凸显度高)

如果场景角色特别凸显，也可以当主语，如“台上坐着主席团”。所谓“特

⁴³⁾ “草原上弥漫着晨雾。(宋玉柱 2007:56) / (草原には朝霧が立ち込めています。)” のような場合、“晨霧”が施事でも受事でもなく、「存在物」を表す“中性宾语”と考えられる。

⁴⁴⁾ 「主体」とは『哲』〔ギリシャ hypokeimenon; ラテン subjectum〕以下のように説明されている。⑦何らかの性質・状態・作用などを保持するに当るもの。読書という行為における読み手，赤いという性質を具有する花，の類。⑧(「主観」が認識論の意味で用いられるのに対し，存在論的・倫理学的意味で) 行為・実践をなすに当るもの。(大辞林 第三版)

日本語の「～を」格から「～が」格に転換するように、「施事」が背景化され、「受事・客体」が施事の動作、行為による性質・状態・作用などを保持する場合であれば、「受事・客体」が「主体」となる。

別凸显”，是指语境，主题连贯等要素形成的客观环境和主观表达的要求。

(陈忠 2007:288)

上記の説明によれば、認知上の「場所役」は、一般的には「状況語」であるが、“客观环境”と“主观表达”を表す場合であれば、文頭に現れ主語となる。

[表 2-2] にある場所(NP_L)は、形式上の「主語」、認知上の「场景役」であると同時に、語用のレベルにおいては「主題」である。つまり、「主題」は「形式上の焦点」と「認識上の背景」の特徴を併せ持っているのである。「形式上の焦点」は出来事の主語を反映し、「認識上の背景」は出来事が行われる場所、そして主体が存在する場所を示す。「主題」が表しているその 2 つの情報が旧情報であり、既知となる。

2.1.4 存在文の客語

[表 2-2] で示すように、「i、ii、iii」の三者はいわゆるの“无主句”「無主語文」ではなく、すべて「场景役」が主語・主題の役割を担う文である。文中の客語は「認知上の焦点」であり、どちらも「主体」として考えられてよいであろう。

[表 2-2] の「i、ii、iii」は情報を伝達するときの情報の違いによって分類される。それぞれは「単純存在文」、受事客語を用いる「静態存在文」、施事・中立客語⁴⁵⁾を用いる「静態・動態存在文」に分類される。

「i」の場合では、「施事」がなく、客語が存在の「主体」である。存在文は主体が既に存在している場面を陳述している。聞き手や読者は主体が存在する状況を把握している。たとえば以下のような文が挙げられるであろう。

- (3) 一会儿，朱行健兜到这边来了，一进门，就说道：“满天乌云，大雨马上又要来了……”（《霜叶红似二月花》）

間もなく、彼がふたたび姿を見せたときは、すでにこちら側に来ていて、戸口をはいるなり、「真っ暗だな。この分ではすぐ夕立が来るぞ。……」（同上）

- (4) 倪萍的头开始晕眩，意识逐渐模糊，眼前一片云雾。（《插队的故事》）

倪萍は頭がクラクラして、意識は朦朧、目の前がポーッとしてきた。（同上）

- (5) 凡是树木茂盛处，就是一个村落。（《插队的故事》）

およそ木の茂っている所には必ず集落がある。（同上）

- (6) “花脑”是一只小母狗，浑身黄土色，脑袋上有些黑斑。

「花脑」は小さな雌犬で、全身黄土色で頭に少し黒いぶちがある。

- (7) 这篇文章里存在着许多问题。（高橋弥守彦 2006:352）

この文章には問題がたくさんあります。（同上）

⁴⁵⁾本稿の第一章第 6 節で分析した客語が“施事”、“系事”である場合、それぞれ「施事の主体」、「中性の主体」とし、客語が“受事”“成事”“工具”である場合も本節では「受事」とまとめる。

各研究者の分類は多少異なるが、本節では、上記のような文を「単純存在文」と見なす。

「ii」の場合であれば、述部の連語のむすびつきは、主に「とりつけ」あるいは「つくりだし」を意味している。連語のレベルでは客語が「受事(客体)」である。文レベルでは「施事」が背景化され、問題とされないので、「受事(客体)」が「主体」になる。聞き手や読者は簡単に述部の連語から、主体の出現・存在する原因と状態を把握することができる。

(8) 东院里有三间东厢房，住着烧酒伙计。东院里还搭着一个大夏棚，厦棚里安着大石磨，养着两匹大黑骡子。(《红高粱》)

東庭には三間の東屋があり、そこには杜氏たちが住んでいる。他に大きな下屋がはりだしてあって大きな石臼が置いてあり、二頭の大きな黒驃馬がいる。

(同上)

例(8)では、“大夏棚”が建てられて、存在している。その中に他のところから運ばれてきた“大石磨”もある。“大夏棚”、“大石磨”がそれぞれ「つくりだし」と「とりつけ」の受事でありながら、存在状態を持つ主体である。このような文は動的な出来事の静的な結果存在を表しているので、「静態存在文」である(文中の動詞は全て及物動詞である)。

「iii」の場合では、「施事」が客語の位置に入り、受事がない。動詞はいずれも“不及物动词”である。“施事(马)+不及物动词(奔驰)”から“不及物动词+施事”の語順変化は「動作・行為の実現」を意味している(刘街生 2013:15)。この種類の文から、聞き手や読者は述部の連語から、主体が具体的に存在する様態を把握することができる。「iii」に用いる連語としては、主として次の3種類があり、以下の例文が挙げられる。

- ① 主体の「立ち居」又は「有様」を意味する連語(例 9、10)(静態存在文)
- ② 主体の空間的に「移動」又は「繰り返し」を意味する連語(例 11、12)(動態存在文)
- ③ 主体の空間的に「放射」や「膨張」を意味する連語(例 13、14)(動態存在文)

(9) “注意，注意，那边蹲着一个人!”。(《金光大道》)

「気を付けて！あそこに誰かしゃがんでる」。(同上)

(10) 过了两天，要不是那个男孩子哭喊，众人还不晓得呐喊山的小庙里住着父子俩。(《插队的故事》)

二日後その男の子が泣き叫ぶ声を聞いて、村人はやっと呐喊山の廟に父子ふたりが寝泊りしていることを知った。(同上)

(11) 魏石头的老伴，木怔怔的，后面跟着三个孩子，大的十三四岁，小的才七八岁……(《盖棺》)

魏石頭のおかみさんは放心状態で、後に三人の子供たちがついてくる。上の子は十三歳か十四歳、下の子はまだ七つか八つで……(同上)

(12) 湖岸边的水面上漂浮着一团团黄白色的泡沫…(《危石》章贵生)

湖の岸沿いの水面上に、大量な黄色っぽい泡が浮かんでいる。(筆者訳)

(13) 溪水淙淙地响着，泛着微光。(《天云山传奇》)

水はかすかに光りながらさらさらと流れている。(同上)

(14) 那颗被浇了油、加了热的心，腾地升起一股火焰，燃烧起来了。(《金光大道》)

油が注がれ、熱した心にパッと一筋の炎がたちのぼった。(同上)

「①」の場合であれば、文は静態存在文であり、「②、③」の場合であれば、文は動態存在文である。そして「①、②」の主体は「施事客語」であり、「③」の主体は「中立客語」である。

2.1.5 おわりに

上記に述べるように、存在文の文頭にある場所名詞はいずれも主語でありながら、主題であり、旧情報である。「文法形式」「語用」レベルでは、主語と主題が統一されている。「認知」レベルでは、主語はいずれも「場景役」である。[表 2-2] の「i、ii、iii」はそれぞれは「単純存在文」、受事客語を用いる「静態存在文」、施事・中立客語を用いる「静態・動態存在文」に分類される。これらは場合によって異なるが、客語がいずれも「主体」であり、認知上の焦点である。

存在文でモノを認識するには、新情報であるモノが焦点となり、「認知上の焦点」(主体)となる。モノの存在を伝達するには、旧情報である場所名詞が焦点となり、「形式上の焦点」(主語)となる。

存在文も一種の主述文であるが、施事を主体とする一般的な主述文と違い、背景化されやすい「場景役」を伝達の焦点として、それを旧情報として、文頭に用い文を組み立てている。

第2節 静態存在文に見られる名付け的な意味

2.2.1 はじめに

中国語の静態存在文は、状態を表す文である。この状態とは、一般的には動作の結果が持続されていることを示す。

(15) 大门上 挂 着 一块 木牌。 (李临定 1993:330)

正門に一枚木の札が掛かっています。(同上)

(16) 她的头上 戴 着 一朵 红花。 (李临定 1993:331)

彼女の頭に赤い花が1輪さしてあります。(同上)

(17) 枕套上 绣 着 两朵 大菊花。 (李临定 1993:331)

枕カバーに大きい菊の花が2輪刺繍してあります。(同上)

(18) 黑板上 写 着 你的 名字。 (李临定 1993:332)

黑板にあなたの名前が書かれています。(同上)

(19) 菜园里 种 着 不少 黄瓜。 (李临定 1993:332)

畑にたくさんのキュウリがつくられています。(同上)

(20) 沙发上 躺 着 一个 人。 (李临定 1993:329)

ソファに誰かがひとり横になっています。(同上)

本節は、連語論の蓄積(鈴木康之 2011、言語学研究会編 1983 など)に基づき、上記の静態存在文は、以下のように分類できると分析する。

- i 「とりつけのむすびつき」(例 15)
- ii 「再帰的なとりつけのむすびつき」(例 16)
- iii 「つくりだしのむすびつき」(例 17、例 18、例 19)
- iv 「立ち居のむすびつき」(例 20)

これまでの存在文の研究では、構造やアスペクトを重視したものが多く(李临定 1993、宋玉柱 2007、张先亮 2010)、意味的な関係からのむすびつきを重視した、連語論的なアプローチが少なく、研究する余地がまだある。

2.2.2 連語論の観点について

鈴木康之(2011:5)は、連語論は「名付け的な意味をしめす単語と単語との関係付けを研究する」方法であると指摘している。連語は具体的な出来事を「名付ける」ための、二つ以上の具体的な意味を含む単語のくみあわせであり、単語より具体的な意味を表す単位である。

現段階では、日本語の「連語論」を中国語の存在文研究に活用するには、いささか困難がある。しかし、単語だけでは一類のモノ、又は動作の類型だけしか表せない

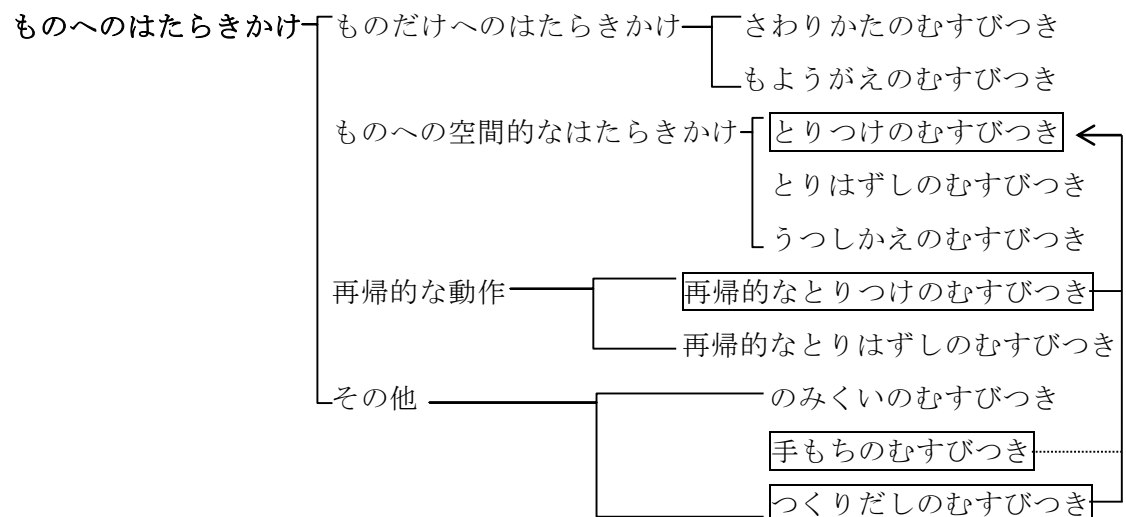
のに対して、単語と単語とのくみあわせによって、一つの具体的な事物、又は出来事を名づけることができる点においては、両言語は共通している。この共通項により両者の関係を検討する。

連語論では単語と単語とのくみあわせを「連語論的な意味」と「構造的なタイプ」とにより単語と単語との意味関係を表す「むすびつき」にまで分析できる。中国語の存在文は人やモノの存在などを表す文である。本節では連語論を用いて動詞を「核」とする名付け的な意味関係を研究する。

2.2.2.1 主体の「ものへのはたらきかけ」

鈴木康之(2011:10~22)は、「ものへのはたらきかけ」を「ものだけへのはたらきかけ」、「ものへの空間的なはたらきかけ」、「再帰的な動作」の3種類に大きく分けている。筆者は鈴木康之の「ものへのはたらきかけ」を下記に示す[表 2-3]のようにまとめる。

[表 2-3] 鈴木康之(2011)に基づき「ものへのはたらきかけ」の分類



[ナニカをいじる]、[ナニカをこわす]、[ナニカを食べる]のような「さわやかたのむすびつき」、「もようがえのむすびつき」「のみくいのむすびつき」は結果が残らないので、存在文として用いることができない。「とりはずしのむすびつき」と「うっしかえのむすびつき」では、結果的にモノが他の場所に移動するため、存在文として用いることは不可能である。

これらに対して、「結果残存」を表す連語は、一般的に「とりつけ」、「再帰的なとりつけ」、「手もち」、「つくりだし」などのむすびつきを表す。これらのうち「とりつけのむすびつき」だけは、ある場所における人間の行為に対する名づけなので、“在字句”や存在文で現すことができる。

●とりつけのむすびつき（附着关系）

～ に	～ を	～ する
場所的な名詞 ⁴⁶⁾	もの名詞	とりつけ動詞
处所性名詞	物体名詞	附着動詞

○かべにポスターをはる/把海报贴在墙上

(在)墙上 贴 海报 （笔者译）⁴⁷⁾

○アルバムに写真をはりつける/把照片贴在相册里

(在)相册里 贴 照片 （笔者译）

○くぎに帽子をかける/把帽子挂在钉子上

(在)钉子上 挂 帽子 （笔者译）

（鈴木康之 2011:13・彭广陆译⁴⁸⁾ 2013:16 より）

●再帰的なとりつけのむすびつき（反身性附着关系）

～ を	～ する
もの名詞	とりつけ的な再帰動詞
物体名詞	附着性反身動詞

○セーターを着る/穿毛衣

○ケタをはく/穿木履

○帽子をかぶる/戴帽子

（鈴木康之 2011:17・彭广陆译 2013:22 より）

●手持ちのむすびつき（携帯关系）

～ を	～ する
もの名詞	手持ちの動詞
物体名詞	携帯動詞

○カバンを持つ/拿包

○ごみぶくろをとりあげる/拿起垃圾袋

（鈴木康之 2011:21・彭广陆译 2013:28 より）

●つくりだしのむすびつき（生産关系）

～ を	～ する
もの名詞（つくりだされるもの）	つくりだし動詞
物体名詞（被生産的物体）	生産動詞

⁴⁶⁾ 本節が言う名詞は名詞と名詞性連語を含む。

⁴⁷⁾ 《現代日語詞組学》にある“把字句”の訳文は、施事の動作に注目している。本節では文成分を区分するため、例文に□を施し、連語の訳をつける。□にある成分はそれぞれが「空間名詞」、核の「動詞」、「モノ名詞」である。「空間名詞」を文成分として考えられていない場合もある。

⁴⁸⁾ 《現代日語詞組学》（彭广陆译 2013）が『現代日本語の連語論』（鈴木 2011）の中訳版である。

- きものをぬう/作 和服 ○なわをなう/搓 繩子
○小屋を建てる/建 小屋

(鈴木康之 2011:22・彭广陆译 2013:30 より)

「とりつけのむすびつき」は「(どこかに)ナニカを置く」のように、そのモノの存在する空間的な環境に関わって実現される人間の動作行為を意味する連語なので、とりつけるところの存在が義務的で、3 単語 (以上) の連語である。

「再帰的なむすびつき」、「のみくいのみすびつき」、「手もちのみすびつき」には、場所となる自分自身の体、口、手の状態に特に事情がなければ、とりつけるところをしめす必要がなく、2 単語の連語で表されるのである。この三種を「ものへの空間的なはたらきかけ」の具体的な応用として考えてよいであろう。

「つくりだしのむすびつき」ははたらきかけの結果を想定しての連語で、[ものにはたらきかけて、ナニカをつくりだす] という具体的な活動を繰り返して、[(米を)ごはんをたく]、[(水を)お湯をわかす] というような結果の状態を想定するようになる。これらは 2 単語で作る連語である。

主体の「ものへのはたらきかけ」と静態存在文の関係について、詳しくは本節の 2.2.3.1 で論じる。

2.2.2.2 主体の「場所へのかかわり」

鈴木康之(2011:22~36)では、「場所へのかかわり」とその下位分類について [表 2-4] のように分けている。

[表 2-4] 鈴木康之(2011:22-36)による「場所へのかかわり」の分類

場所へのかかわり	空間的な位置変化のみすびつき(村から町に行く)
	到着のみすびつき(学校に着く)
	進入のみすびつき(家にはいる)
	出発のみすびつき(家から出る)
	空間的な移動のみすびつき(山を登る)
	空間的な通過のみすびつき(税関を通る)
	立ち居のみすびつき (廊下に立つ)

「場所へのかかわり」の下位分類は「立ち居のみすびつき」を除いて、残る 6 種類は全部空間的な移動の経路を表しているので、静態存在文との関係がない。「立ち居のみすびつき」は場所を示す名詞と立ち居の動作を表す動詞による 2 単語の連語でできている。

●立ち居のむすびつき（坐立关系）

<div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">～ に</div> 場所的な名詞 处所名词	<div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">～ する</div> 立ち居の動詞 坐立动词
○いすにすわる/ <div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">坐在</div> <div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">椅子上</div>	
○ベットに寝る/ <div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">躺在</div> <div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">床上</div>	
○教壇に立つ/ <div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">站在</div> <div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">讲台上</div>	

（鈴木康之 2011:30・彭广陆译 2013:43 より）

「立つ」、「座る」など人間の立ち居の動作の他に、人間が「泊まる」、「暮らす」、「成長する」などの動作も主体の存在を表している。

奥田靖雄(1983:283)は「存在のむすびつき」について、[に格名詞は、存在動詞とくみあわさると、存在という状態が成立するため、ありかをしめす。] 日本語では存在動詞は[ある]、[いる]、[おる]、[ござる]に限られるが、連語の中には存在動詞のほかに、[住む]、[泊まる]、[滞在する]など存在動詞に近い動詞もあると指摘している。これらの存在動詞を用いる文に対応している中国語は「単純存在文」である。「存在動詞に近い」動詞に対応している中国語の動詞は「静態存在文」に用いられる。

●存在のむすびつき

<div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">～ に</div> ありかを示す名詞	<div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">～ する</div> 存在を意味する動詞
○母のそばにいる	○ベランダに出ている
○（祖父は）病床にあった	○ベンチに腰掛けている

（高橋弥守彦 2009:213 より）

高橋弥守彦(2009:215)による「存在のむすびつき」のなかに用いられるている主体の「存在を意味する動詞」は次のとおりである。

- i. 存在動詞（いる、ある）
- ii. 有様の動詞（住む、残る、つく）
 補助動詞を伴う有様の動詞（生きている、立っておいりました、泊まっている）
- iii. 補助動詞を伴う位置移動の動詞（入っている、帰っていた、出ている）
- iv. 補助動詞を伴う趨向移動の動詞（来ている）
- v. 補助動詞を伴う複合動詞（立ちつくしていた、むかいあっていた）
- vi. 補助動詞を伴う合成的な動詞連語（上京して来ている）

高橋弥守彦(2009)が指摘している「存在のむすびつき」は、奥田靖雄(1983)の「存在のむすびつき」より範囲が広い。「存在動詞」を用いる「存在のむすびつき」は単純な存在を表しているので、これらを区別するために、本節では上記の ii の場合を「存在方式のむすびつき」と呼ぶ。iii～vi の場合は、主体の移動動作の結果残存を表しているので、「出現文」、「消失文」に用いるであろう。

「立ち居のむすびつき」と「存在方式のむすびつき」はいずれも主体の存在方式を表し、主体自身の「場所へのかかわり」を表す連語である。静態存在文との関係は、次の節で論じる。

2.2.3 静態存在文に見られる名付けの意味

存在文の中にある述語動詞と客語（動詞＋名詞連語）を一つの連語とみなす。しかし、「連語論」では2つの単語でできる連語もあれば、3単語で作る連語もあると指摘している。すなわち、「とりつけ」の出来事を名付ける連語は、文中の主語の場所名詞も連語の成分として3単語の連語となる。静態存在文に見られる名付けの意味は主に二類ある。一つはモノへの処置を表す「ものへのはたらきかけ」であり、一つは有情物自身の空間配置を意味する「場所へのかかわり」である。

2.2.3.1 「ものへのはたらきかけ」

静態存在文に見られる「ものへのはたらきかけ」はさらに「とりつけのむすびつき」、「つくりだしのむすびつき」に分けられる。連語は一類の具体的な出来事を表し、静態存在文は、その客体の結果残存状況を陳述する。

A 「とりつけのむすびつき」

連語が「とりつけ」（例 21）を意味している場合、連語のなかに主語である空間名詞が求められている。連語が「再帰的なとりつけ」（例 22）、「手持ち」（例 23、24）を意味する場合、連語レベルでは、空間名詞が必要とされていないが、文レベルでは場面を陳述するために、空間名詞が求められる。連語はモノの位置変化を生じさせる有情物の「とりつけ」の行為を名付けている。主語となる名詞は動作主の身体の一部を意味する身体名詞である場合もある。以下のような例文が挙げられるであろう。

(21) 正中天然几上, 玻璃罩子里, 搁着 珙琅自鸣钟, 机括早坏了, 停了多年。(《倾城之恋》)

中央の天然木のテーブルの上のガラスケースのなかには、七宝焼のオルゴール時計が 納まっている。機械はとうに壊れていて、もう何年も止まったままだ。(『傾城の恋』)

・ (在)罩子里 搁 钟 / ガラスケースのなかに 時計を 納める

(22) 在一块小小的林间空地上，身穿**白纱裙**的小姑娘们**顶着****金色的小草帽**，**戴着****金色的小野花**，在金色的草坪上手牵着手儿翩然起舞，远远看去，她们欢快的身影就象跳动在金色地毯上的洁白的花环。（《轮椅上的梦》）

森の奥の小さな空き地で、**白い紗のワンピースを****着て****黄金色の麦わら帽子****に****野の花を****飾つた**娘たちが、枯れ草の上で輪になって踊っている。遠くから見ると、まるで金色の絨毯の上で白い花輪がクルクルまわっているようだ。（『車椅子の上の夢』）

娘たちの体に**白い紗のワンピースが****まとい**、**頭の上に****黄金色の麦わら帽子****に****野の花も飾って**ある。（筆者訳）

・**穿****白纱裙**、**顶****草帽**、**戴****野花** / **ワンピースを****着る**、**麦わら帽子を****かぶる**、**花を****かざる**

(23) 出乎众人意料之外的是后面还有一只，依旧泊在桥边，几个少女从船上走下来，正是淑英、淑华、淑贞三姊妹和丫头鸣凤，她们手里都**提着****灯笼**。（《家》）意外にもあとからもう一隻小船が着いて、やはり橋のほとりにとまり、女の子たちがおりてくる。淑英、淑華、淑貞、三姉妹が、**手に****灯笼を****さげ**ていた。（『家』）

手に**提灯が****持って**ある。（筆者訳）

・**提****灯笼** / **提灯を****持つ**

(24) （大白狗）……它嘴里**叼**着一只方方的小纸**盒子**，低着头挤过人群，来到炕前，将纸盒放在炕沿上，抬起湿漉漉的眼睛哀伤地望着秀娥大婶，又咬着她的衣裳轻轻地扯着。（《轮椅上的梦》）

小さな紙箱を**口に****くわえ**た大犬は、うつむいたまま人々を押し分け、炕の上に箱をおろすと涙目で秀娥を見上げて、そっと彼女の袖をくわえて引っ張った。（『車椅子の上の夢』）

大犬の口には**小さな紙箱が****くわえられ**ている。（筆者訳）

・**叼****盒子** / **小さな紙箱を****くわえる**

連語が「とりつけ」の行為を表す場合（例 21）、文はモノの「結果残存」のみ陳述している。連語が「再帰的なとりつけ」（例 22）、「手持ち」（例 23、24）、を意味する場合、文は「結果残存」を表す上に、有情物の動作が持続するので、モノの「存在方式」も表している。

B 「つくりだしのむすびつき」

連語が「つくりだし」を意味している場合、モノ名詞は結果目的語（客語）⁴⁹⁾である。しかし存在文によく見られる「つくりだしのむすびつき」は鈴木康之（2011）が言う「つ

⁴⁹⁾日本語の場合では「結果目的語」といわれているが、中国語の場合でも同じ現象があるので、本節では「結果客語」と呼ぶ。

くりだしのむすびつき」と若干の違いがある。例えば「(水)お湯をわかす」は「水を加熱して、お湯になる」ということを意味している。人間は「水がまるごとお湯になる」その変化を認識し、「(水)お湯」が動作の対象でありながら、結果状態でもある。そのような場合、場所名詞が連語の中に必要とされていないが。例(25)のように“烟管上刻花纹”/「煙管に模様を彫る」という語句を読んだら、誰かが煙管と彫刻刀を持っている場面を浮かんでくるであろう。ここの「煙管」が動作の対象で、「模様」が動作の結果である。「彫刻刀で煙管に彫って、ゼロから模様を作る」という創造の意味になる。すなわち、静態存在文によく見られる創造を表す「つくりだしのむすびつき」の連語は、「つくりだし」の動詞、「動作対象の場所・モノ」を示す名詞、「つくりだされるモノ」を意味する名詞からなる3単語の連語でできている。

●静態存在文に見られる創造義の「つくりだしのむすびつき」

～に	～を	～する
場所と見なされるもの名詞	もの名詞(つくりだされるもの)	つくりだし動詞

(25) 维嘉走过来坐在老人身旁，这会儿，他的视线又被老人手中那拳头粗的竹烟管吸引住了，烟管上 刻着一个奇怪的花纹，上端象半个被彩云环抱的月亮，泛着又红又紫的亮光；下端是一根又细又长的圆柄，象一个蘑菇的杆儿。(《轮椅上的梦》)

となりに腰をおろした維嘉は、拳のように太い煙管に奇妙な模様が 彫ってあるのを見た。上の方は、たなびく雲をまとった半月、その下に細長い取っ手が付いている。(『車椅子の上の夢』)

・ (在)烟管上 刻 花纹/ 煙管に 模様を 彫る

(26) 金线河两岸 筑起了高高的堤坝，在大堤上，能看到四周田野的景致和暮色中炊烟袅袅的村庄，还能听到河中流水发出哗啦啦的声响。(《轮椅上的梦》)

金線河の兩岸には高々と堤防が 築いてある。堤防の上にあがると四方に広がる畑が見え、夕暮れの光の中に炊事の煙がゆらゆらと立ちのぼる村も見えた。河の水はカラカラコロコロと笑っている。(『車椅子の上の夢』)

・ (在)河两岸 筑起 堤坝/ 河の兩岸に 堤防を 築く

(27) 山路旁出现了几片被开垦的土地，种着辣椒和几畦瓜菜。有片田垌上立着一些墨森森的架子，上面吊着许多硕大的冬瓜。(《轮椅上的梦》)

しばらくして山道の左右に開墾した土地が現れた。唐辛子と瓜がいく畝か植えられ、あぜの間に黒々とした棚がいくつか並んで、とても大きな冬瓜が下がっている。(『車椅子の上の夢』)

・ (在)土地(里) 种 辣椒和几畦瓜菜/ 土地に 唐辛子と瓜を 植える

(32) 王舜连忙拾起一看, 传国玺已摔缺了一角。(《千古疑案—“传国玺”失踪之谜》)

…(床に落ちて、) 傳国玺の角の部分が かけた。(筆者訳)

・(传国玺)的一角 摔缺/一部分が かける

本節で言う創造義の「つくりだしのむすびつき」に用いる中国語の及物動詞は「動作」と「結果」の両方に解釈できる。日本語の場合であれば、「動作」を表す他動詞と「結果」を表す自動詞が2つ存在する。例(31)にある不及物動詞の“裂”は、加害を意味する施事の動作による「結果」のみを陳述し、例(32)は複合動詞で、動作“摔”と結果“缺”を表す。日本語の場合は、何らかの原因によって結果を表す「傷口があく」に対して、故意を表す「傷口をあける」に訳すと場面が想像しにくい。すなわち「動作と結果」は「加害と被害」のような対応関係ではない、と言える⁵⁰⁾。

被害でつくりだされた“小口子”と“一角”はモノの全体に対する認識に基づいて、発覚した新情報の主体で、全体を意味する名詞“手上”、“传国玺”が話題である。例(31)のように、つくりだされたものを示す名詞“小口子”と残存する状態を表す動詞“裂”のできる2単語の連語である。本節では破損義の「つくりだしのむすびつき」と呼ぶ。

2.2.3.2 「場所へのかかわり」

静態存在文に見られる「場所へのかかわり」はさらに「立ち居のむすびつき」と「存在方式のむすびつき」に分けられる。連語は主体(施事客語)の動作を表し、静態存在文は主体の存在している結果と存在現状・方式を描写する。「立ち居のむすびつき」と「存在方式のむすびつき」の最も大きな区別は存続する時間の「長さ」であろう。それに対して、“是/有”を用いる「単純存在文」はほぼ恒久的な存在を表している。

C 「立ち居のむすびつき」

連語が人間など有情物の「立ち居」の動作を意味する場合、例(33)のように施事客語“庄稼人”の短時間の立ち居の動作を描写している。

(33) 桌边的长凳上 蹲着几个赶车的庄稼人, 他们把拧成麻花似的长鞭杆儿靠在肩头, 腾出手来掏出粗布手巾包着的黄面饼子, 掰到冲了开水的大海碗中埋头吃起来。(《轮椅上的梦》)

長い腰掛けに うずくまっていた男たちは、麻花のように皮紐を巻き付けた鞭を肩にかけ、引手ぬぐいの包みから粟の焼き餅を取り出して、どんぶりの湯につけガツガツ飲みこみ始めた。(『車椅子の上の夢』)

・ 蹲(在) 桌边的长凳上/長い腰掛けに うずくまる

⁵⁰⁾ 「加害と被害」、「動作と結果」いずれも「因果関係」であるが、“放書”のような場合、「動作」の「本を置く」の必然的な「結果」として「本が置いてある」。“傷口裂(开)”のような場合、「被害」の「傷口が開く」の原因はただ一つだけ存在しているというわけではない。

D 「存在方式のむすびつき」

連語が「存在方式」の意味を表す場合、例(34)、(35)のように、施事客語“叛徒、特务、反社会主義分子”、“奇异的树木和植物”の長時間渡る存在・存続の方式を表す。

(34) 黎江不由想起报纸上刚刚发表的那篇《横扫一切牛鬼蛇神》的重要文章，多么可怕的事实啊！在和平的生活中竟然隐藏着那么多的叛徒、特务和反党反社会主义分子！（《轮椅上的梦》）

黎江は、新聞に最近出たばかりの『一切の牛鬼蛇神を一掃しよう』という重要な政治論文を思い出した。何と恐ろしい現実だろう。大勢の裏切り者やスパイ、反社会主義分子が、平和な日常に 隠れているとは！（『車椅子の上の夢』）

・隱藏(在) 和平的生活中 / 平和な日常に 隠れる

(35) 一会儿，我是海的女儿，划着郁金香花瓣做成的小船来到大海边，蓝色的大海象最明亮的玻璃，铺满白沙的海底 生长着最奇异的树木和植物。（《轮椅上的梦》）

つぎの瞬間、私はチューリップの花びらのボートを漕ぎ、ガラスのように凧いだ静かな海を渡った。見おろすと白い砂を敷きつめた海底に おかしな草が 生え、ユラユラと私を手招いた。（『車椅子の上の夢』）

・生长(在) 铺满白沙的海底 / 白い砂を敷きつめた海底に おかしな草が 生え

2.2.4 おわりに

静態存在文に見られる動詞連語は、主に主体の「ものへのたらきかけ」と主体自身の「場所へのかかわり」の二類に用いられる。「ものへのたらきかけ」はさらに「とりつけ」と「つくりだし」という二つの意味関係によって分けられる。前者がモノの場所の変化を表しているに対して、後者はモノの状態変化を表している。「場所へのかかわり」も「立ち居」と「存在方式」の意味関係によって、2分類できる。それぞれ「比較的短い時間の存在」と「より長い時間の存在」を表している。

[表 2-5] 静態存在文に見られる名付け的な意味

静態存在文	ものへ	A とりつけ	“玻璃罩子里，搁着珐琅自鸣钟。”
	のはたらきかけ	(metaphor) 道具の使用	“腿上绑着铁链子。”
	場所へのかかわり	B つくりだし	“金线河两岸 筑起了高高的堤坝。”
		(metaphor) 破損義のつくりだし	“两只手，裂着许多小口子。”
	場所へ	C 立ち居	“长凳上蹲着几个赶车的庄稼人。”
		D 存在方式の出来事	“在和平的生活中竟然隐藏着那么多的叛徒。”

また、高橋弥守彦(2009:269)には、「電柱にもたれかかる」のように、空間領域のくみあわせのなかで、主体がある空間によりかかることを「空間的なよりかかりのむすびつき」と名付けている。

●空間的なよりかかりのむすびつき

～ に

場所を意味する名詞

～ する

よりかかりを意味する動詞

○壁にもたれる ○たんすに寄りかかる ○手すりによっかかる

(高橋弥守彦 2009:269 より)

「よりかかり」の動作も一種具体的な人間の立ち居の動作であるが、静態存在文のなかに用いる例文は少ない。

(36) 旁边还倚靠着几个战士在呵呵地笑。(《迷路》)

そばに数人の解放軍の戦士がよりかかって、声を出して笑っている。(筆者訳)

(37) 就这样，在黎明中，他倚着战马，再次向中央陈述了他的观点。(《我的父亲邓小平》)

こうして黎明の中で軍馬にもたれて、再度鄧は党中央に自分の見解を述べた。(『わが父・鄧小平』)

*战马(旁)倚着他(作例)

(38) 里边 靠墙站着一溜十几个用特种材料制成的机器人儿。(《健身房里的秘密》)

内側の壁にそって十数個特殊材料で作られたロボットが一列立てられている。(筆者訳)

例(36)に下線を引いた存在文の客語“战士”は、また後ろの文の主語となり、典型的な存在文ではない。例(37)はを場所名詞を主語に置き換える(“战马(旁)倚着他。”)と、非文となる。ここの“战马”やはり場所とするより対象として解釈しやすい。例(38)には動詞“站”が「立ち居のむすびつき」の中心となるので、やはり「よりかかりのむすびつき」ではない。の中国語の“靠(よせる)”、“依靠(もたれかかる)”、“依偎(よりそう)”などで検索をかけてみたが、なぜ「よりかかり」を意味する動詞が静態存在文と相性が悪いのかが本節の未解決問題となる。

第3節 動態存在文に見られる名付け的な意味

2.3.1 はじめに

以下に挙げる例文中の“奔驰着”“飘着”“摇曳着”などが動態を表す。このような文（“名_処+V着+名_物”）は普通「動態存在文」と呼ばれている。

(39) 草原上奔驰着一群骏马。（李临定 1993:335）

草原には駿馬の群れが疾駆しています。（李临定 1993:335）

(40) 空中飘着雪花。（李临定 1993:335）

空に雪がひらひらと舞っています。（李临定 1993:335）

(41) 夕阳中摇曳着羽毛草。（宋玉柱 2007:55）

夕焼けの中にはハブソウがゆらゆらと揺れています。（筆者訳）

(42) 草原上弥漫着晨雾。（宋玉柱 2007:56）

草原には朝霧が立ち込めています。（筆者訳）

しかしながら、次のような文を「動態存在文」として扱う研究者もいる。

(43) 台上正唱着绍兴戏。（《现代汉语存在句研究》2010:66）

舞台では紹興の地方劇が公演されています。（筆者訳）

(44) 收音机里播放着音乐。（《现代汉语存在句研究》2010:66）

ラジオでは音楽が流されています。（筆者訳）

(45) 心里惦记着孩子。（《现代汉语存在句研究》2010:66）

（頭の中には、）子供のことを気にかけています。（筆者訳）

(46) 山上架着炮。（《现代汉语存在句研究》2010:119）⁵¹⁾

山の上には大砲が据えられています。（筆者訳）

例（43）から（46）のような文も“名_処+V着+名_物”の構造で、述語が動作・行為の持続を表しているが、「動態存在文」ではない。本研究では「動態存在文」と例（43）から（46）のような文との区別について分析する。

2.3.2 動態存在文に関わる先行研究

2.3.2.1 動態存在文についての共通定義

動態存在文の定義について、代表的な先行研究では一般に以下のように述べられている。

从认知上看，“奔驰、飘”之类动词所表示的动作是一个持续的过程，在时间轴上不能确定一个起始点或终止点，因而可以称作无界动词，由“无界动词+

⁵¹⁾ 《现代汉语存在句研究》は“存在句的性质，范围等需进一步研究的几个问题”として、例（43）から（46）の例文を取り上げている。

着”动词构成的存在句也可称做“无界动词存在句”(动态存在句);“坐、挂”之类动词所表示的动作在瞬间完成,无持续的过程,起始点就是终止点,因此可以称作有界动词,由“有界动词+着”动词构成的存在句可以称作“有界动词存在句”(静态存在句)。

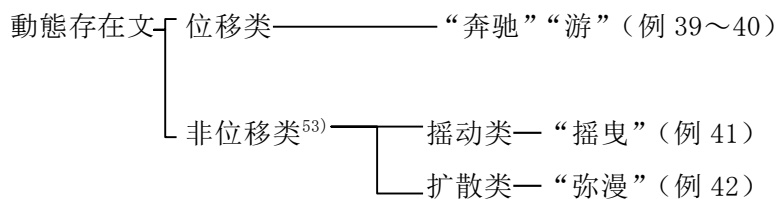
(张先亮、范晓など 2010:35)

细查各家⁵²⁾ 区别静态、动态之言论,实际上他们是看存在句里的动词本身是否表现事物的“活动”或“移动”:把“着”字存在句里不表示事物在空间活动或移动的句子说成静态存在句,把表示事物在空间活动或移动的句子说成动态存在句。

(张先亮、范晓など 2010:65)

動態存在文の存在を表す機能は、靜態存在文と同じだが、動態を表す“无界动词”を用いる点においては、靜態存在文と異なる。動態存在文には以下のような動詞が用いられる。

[図 2-5] 聂文龙(1989)、宋玉柱(2007)による動態存在文の動詞分類



2.3.2.2 「動態存在文」の範囲

上記に挙げる例(39)から(42)のような文が典型的な動態存在文である。例(43)から(46)のような文も“名_処+V着+名物”の構造の語順で、述語が動作・行為の持続を表しているなどの特徴によって、「動態」の存在文とみなす研究者もいる(范方莲(1963)、张学成(1982)など)。しかし、“V着”があるイベントの発生や進行などを表し、述語の前に施事者と副詞“正在/正”などがつけられる(例47)のに対し、普通の存在文のように、“在字句”に置き換えられない(例48)などの理由で、反対する研究者もいる(聂文龙(1989)、宋玉柱(1988、2007)など)。

(47) 台上演员们正/正在唱着绍兴戏。(张先亮、范晓など 2010:66)

舞台では役者が紹興の地方劇をやっています。(筆者訳)

⁵²⁾ “各家”は陈廷珍(1957)、范方莲(1963)、宋玉柱(1982、1988)、李临定(1986)、聂文龙(1989)などのことである。

⁵³⁾ ただし、张先亮、范晓など(2010:65)では、“‘摇动类’、‘扩散类’也是在空间带有活动或位移性质的。”と指摘している。

(48) 台上唱着绍兴戏。→*绍兴戏唱在台上。(张先亮、范晓など 2010:66)

上記にあげる例(46)“山上架着炮。”のような、動態存在文と混乱しやすい次のような文がもう一類ある。言語環境を離れると二通りに解釈できる。多義を区別しやすくするために、原文に記号を施す。

(49) a. 黄浦江上/架着/大桥。(张先亮、范晓など 2010:67)

黄浦江の上に大きな橋が掛かっています。(筆者訳)

b. 黄浦江上/架着大桥。(张先亮、范晓など 2010:67)

黄浦江の上で、大きな橋をかける作業が行われています。(筆者訳)

(50) a. 屋里/摆着/酒席。(张先亮、范晓など 2010:67)

部屋の中に酒宴の席が用意されています。(筆者訳)

b. 屋里/摆着酒席。(张先亮、范晓など 2010:67)

部屋のなかで、酒宴の席のセッティングがされています。(筆者訳)

例(49b)、(50b)の“架着大桥”、“摆着酒宴”が具体的なイベントを名づけて、文は出来事の進行状態を描写している。この場合、施事を省略した「主述文」である(黄浦江上工人们架着大桥)。例(49a)、(50a)がイベントの産物の“大桥”“酒席”のありかを描写する「存在文」である。以下に挙げるような文が十分ありうる。(宋玉柱:2007)では、このような文が“完成体動態存在句”であると主張し、范晓など(2010)では、“静态着字句”であると指摘している。本節では“静态存在句”と呼ぶ。

(51) 黄浦江上架着大桥, 黄浦江下卧着隧道。(张先亮、范晓など 2010:67)

黄浦江の上に大きな橋がかけるられて、その下にはトンネルもあります。(筆者訳)

(52) 屋里摆着酒席, 有几十桌, 相当丰盛。(张先亮、范晓など 2010:67)

部屋の中に酒宴の席が用意されてあります。テーブルが数十卓もあって、料理もかなり豊富です。(筆者訳)

例(43)から(52)のような文が表しているイベントは、典型的な「動態存在文」と異なる。本節では、例(43)から(52)のよな文を「動態存在文」ではないと判断する。

2.3.3 動態存在文の再整理

動態存在文の範囲について、多く議論されているが、さらに検討する余地がまだある。聂文龙(1989)、宋玉柱(2007)による動態存在文の動詞分類に基づき、文が反映するイベントの特徴によって、次のように分類する。

- i、「空間的な移動」(例 39、例 40)
- ii、「無情物の繰り返し」(例 41)
- iii、「無情物の膨張・放射」(例 42)

2.3.3.1 「空間的な移動」

鈴木康之(2011)は、「空間的な移動のむすびつき」(“空間性位移关系”)について、以下のように説明している。

空間的な移動のむすびつきとは、ヲ格のカザリ名詞でしめされる場所を舞台として、そこで一定の移動動作を実現させるというものである。……移動動詞が使用されるのだが、空間的な移動のむすびつきでは、どこからどこまでの移動であるかについては、まったく関心がない。

～を

～する

处所名詞

空間性位移動詞

- いなかの道を帰る/沿乡间小路回家
- 山を登る/爬山
- 公園を歩く/在公园里行走
- 校庭を走る/在校园里跑
- 森をさまよう/在树林里徘徊
- 駅前をぶらつく/在车站前溜达
- 海岸を散歩する/在海边散步

(彭广陆译 2013:40 より)

空間的な移動のむすびつきでは、どこからどこまでの移動を不問にし、もっぱら、そこでどのような移動動作を具体化しているかに関心が示されているかのようなのである。したがって、しばしば、一定の様態をともなう意味の動詞(たとえば、「歩く」「走る」「さまよう」「ぶらつく」「散歩する」など)が使用される。

(鈴木康之(2011:28~29)より)

空間的な移動のばあいでは、かなり一定の広範な空間(直線的な空間でもいいのだが)を必要とするようである。したがって、一定の空間性を獲得している場所名詞を原則としている。

(鈴木康之(2011:30)より)

文中の空間名詞は、一定(広い、もしくは境目が曖昧)な空間性を獲得している場所を示している。モノの移動している場所としての起点と終点は問わず、ある運動をしている有情物を一つの画面に納め、目の前の一瞬(一定時間のなか)を一種の状態として受け取っている。たとえば、例(53)のように、主体の“鴨子”がこの“湖”という「舞台」を離れないまま、「湖を移動している」状態で、視野の中に入って来る場

合である。“湖”が移動する場所(動作を行う場所⁵⁴⁾)でありながら、存在する場所でもある。主体は、例(39)の“骏马”のような有情物もあれば、例(40)の“雪花”のような無情物⁵⁵⁾もある。

(53)湖里游着一群鸭子。(李临定 1993:335)

湖ではアヒル⁵⁶⁾の一群が泳いでいます。(同上)

湖には、鴨が一群泳いでいます。(筆者訳)

(54)竟是曦的姐姐和妈妈，骂骂咧咧地走过来，后面跟着一群看热闹的孩子。(《一束金黄的阳光》钞金萍)

なんと曦の姉と母親です。(二人は)罵りあいながらこっちに向かって来ます。

後ろに見物する子供がたくさんついてきています。(筆者訳)

(55)山洞里虽然阴凉些，但是潮湿得很，地上湿漉漉的，石壁上也淌着一滴一滴的“汗珠”。(《北京人的故事》选)刘后一)

洞窟の中はひんやりとしていて、何もかも湿っぽく、地面がじたじたして、壁面からも一滴一滴汗の玉のように滴っている。(筆者訳)

2.3.3.2 「無情物の繰り返し」

「無情物の繰り返し」を表す動詞は、先行研究で述べる動詞“揺動类(揺動)”の他にも、モノの[回転]などを表す動詞もある。動詞はいずれも非限界的な動作を表している。主体は一定の空間の内部で[揺動](例56)、[自転](例57)、[回転](例58)するか、その場所を中心・円心として、[往復](例59)、[回転](例60)、[公転](例61)する。この類の動詞は、出来事の開始と終了についてはほとんど無関心である。

(56)宋庆龄的心总是和祖国的孩子们紧紧地连在一起。她的胸中，永远跳动着一颗“童心”！(《宋氏家族全传》之“国之瑰宝”宋庆龄)

宋慶齡はいつも祖国にいる子供たちのことを気にかけています。彼女の胸の中には、永遠に踊り続けている童心があります。(筆者訳)

(57)他痴痴地望着宋美龄，脑子里飞快地旋转着宋美龄的家庭、社会背景，旋转着宋家势力和财力以及孙、孔。(《宋氏家族全传》之“国之瑰宝”宋庆龄)

彼はぼかんとして宋美齡を見つめて、頭の中を駆け巡っているのは宋美齡の家族、社会地位、それに、宋家の勢力、財力などの問題です。そして、孫、孔両家のことにも思いを巡らしています。(筆者訳)

(58)韩淑珍眼里转着泪珠离开了。(《意难忘》四月菊)

韓淑珍は涙をこらえて離れました。(筆者訳)

⁵⁴⁾ 動態存在文の場合、原則として場所を離れることがないと想定しているので、「～を」格の訳が考えにくい。「移動」という様態の動作で捉えているのであろう。

⁵⁵⁾ 本稿では、自らの意識で運動するものを「有情物」、意識のないまたは自らの意識のない状態で動いているものを「無情物」と呼ぶ

⁵⁶⁾ “鸭子”を、著者訳では「アヒル」に訳しているが、本節では「鴨」に訳す。

(59) 忽然，他发现小星山附近的海面上，浮动着一个黑东西。《小星山歼敌记》张十里)

その時、彼は小星山の近くの海上に、何か黒い物体が浮いているのを見た。(筆者訳)

(60) 我受了这个场面的刺激，眼前似乎旋转着一个灼目的万花筒，终于仰面晕倒在操场上（《刘心武短篇小说》刘心武）

このショックで、目の前に眩しい万華鏡が回っているようで、とうとう気を失い、仰向けになって運動場に倒れこみました。(筆者訳)

(61) “啪”地一声，耳边顿时回旋着《丰收舞》的优美乐曲。（《翡翠岛》王金海）

「パッ」という物音がすると、耳もとでは、にわかに「豊作の踊り」の美しい曲が流れてきていました。(筆者訳)

2.3.3.3 「無情物の放射・膨張」

主体となる「無情物の放射・膨張」は、他の存在文と比較すると、その根本的な違いは、主体である。他の存在文の主体となる形体はきまっているが、「無情物の膨張・放射」で示す主体は形体が決まっていない。

空間に存在する主体は、以下に挙げる「放射する光」と「膨張する煙状のモノ」である。いずれも視覚、聴覚、味覚、嗅覚などで捉えられるが、触覚で限界を定められるモノではない。

筆者の分析によれば、存在文の主体は一般に場所名詞で示す空間内に存在する。しかし、「無情物の膨張・放射」で示す動態存在文では、主体の形体が決まっていなく膨張する可能性もあるので、下記の例文に見られるように、存在する主体が場所名詞で示す空間より広い場所に存在する場合も少なからずある。これは一般的な存在文に見られない特徴である。

A 放射する光

主体となる例(62)の“星辉”は、場所を表す場所名詞“晴空”のなかにあるが、例(63)から例(65)の光は、場所名詞が示す空間の体積より大きい(又は同じ大きさ)と判断できるであろう。光は様々であり、場所名詞が示す場所から放たれるが、空間名詞が開始点を示す場合(例 62~64)もあれば、光が場所を照らすように、空間名詞が終点を示す場合(例 65)もある。

(62) 在香港上机是晚上九点，天气那样好，寒冷的晴空上闪着星辉，微风中送来料峭的清寒。（《我们的歌》赵淑侠）

香港で飛行機に乗り込むのは夜の九時でした。天気はとても良く、寒い晴れ空には星光がきらめき、料峭たる微風が吹き渡っています。(筆者訳)

(63) 我看见一个细长的我，通体泛着银光。（《耳的恋歌》唐宁）

私には細長い自分が見えます。全身には銀色の光沢があります。(筆者訳)

(64) 他手里端着一大杯香槟酒，眼里发射着阴森森的光束，（《香港之滨》陈定兴）
彼はシャンパンを入れた大きなグラスを手にして、目からは射るような気味の悪い光線が感じられます。

(65) 大海满潮了，没有风，也没有吓人的涛吼，岛上洒满蓝幽幽的月光。（《太平洋上》金同悌）
満潮になると、風がなく、吠えているようなうねりくる大波もない。島にこぼれ落ちるようなかすかな青い月光があります。（筆者訳）

動態存在文の述語の後ろには、例（62）（63）（64）のように、一般に“着”を用いるが、例（65）の述語“洒满”では補語の“满”を用いている。“洒满”は動作範囲を限定しているが、動作のアスペクトについては限定していない。[こぼれ落ちる水]にたとえた月光によって[島が月光に照り映えている]。したがって“岛上洒着蓝幽幽的月光”[島には青い光がこぼれ落ちている]に書きかえることができる。このような場合、本節では「動態存在文」として扱う。

B 膨張する煙状のモノ

「膨張」する主体は大きさが変化している。空間と膨張する存在物の関係は、一般的な空間内における存在物の運動を表す場合（例 66 から例 68）もあれば、存在物が空間より大きい場合（例 69）や空間から拡散する場合（例 70）もある。

(66) 不同的只是书架之间散发着一股阴湿的霉味，像外婆家的蚕房。（《隐形伴侣》张抗抗）

異なっているのは本棚の隙間に湿っぽいカビの臭いがします。その臭いは外祖母の家の蚕部屋のとそっくりでした。（筆者訳）

(67) 变形、破缝的地板上开着小白蘑菇，空气里散发着一股腐臭味。（《招魂》栈桥）

変形して、ひびが入った床に小さな白いキノコができました。空気の中には腐った匂いがしています。

(68) 难怪那举世闻名的香妃墓，几百年了，至今墓室中依然飘逸着一股股奇异的枣花香呢。（《边陲异趣》吴泽林）

とおりであの世間に名が知れ渡っているアパクホージャ墓は、数百年を過ぎたにしても、今も玄室の中には、奇異な棗の花の香りが漂っています。（筆者訳）

(69) 清晨，大海上笼罩着一层浓雾，舰艇与舰艇都看不见了。（《海上看青岛》韩希梁）

夜明けに、海面は濃い朝霧に覆われています。軍艦と軍艦は互いのことが全く見えなくなっていました。（筆者訳）

(70) 山野间不时传来鞭炮声,久久不绝于耳,山谷中升腾着香火和鞭炮的蓝色烟雾。

(《壮族风俗志》梁庭望)

野山から、しばしば爆竹を鳴らず音が聞こえてきて、耳から離れません。谷の中から線香と爆竹の青い煙が立ち昇っています。(筆者訳)

上記の例文のように、存在物の空間における膨張を表す動詞はいずれも「動的な状態」として捉える。

2.3.4 おわりに

本研究では、存在物と運動の特徴によって、動態存在文を「空間的な移動」と「無情物の繰り返し」と「無情物の膨張・放射」の三類に分けている，その三分類の下位分類は、さらにそれぞれ二つずつに分けられる。これらは以下に表示する [表 2-6] のようにまとめられる。

[表 2-6] 動態存在文の分類について

動態 存在 文	空間的な移動	移動している有情物 “草原上奔腾着一群骏马。”
		運動している無情物 “天空中飘着雪花。”
	無情物の繰り返し	揺動している無情物 “夕阳中摇曳着羽毛草。”
		回転している無情物 “眼里转着泪珠。”
	無情物の膨張・放射	膨張する無情物 “通体泛着银光。”
		放射する無情物 “大海上笼罩着一层浓雾。”

第4節 単純存在文

2.4.1 単純存在文に関わる先行研究

単純存在文に関する分類や定義については、各専門家の観点は大筋では一致しているものの、細部では一致していないところもある。

呂叔湘(1980、1999:36)では、次のグラフの中の例文が“单纯存在”を表す存在文であると指摘している。

[表 2-7] 呂叔湘(1980:31、1999 重制)

处所(时间) 词语	状语	动词	名词	助词及其他
屋子里		有	人	
古代	曾经	有过	这么一个勇士	吗?
大门外		是	一个荷花池	

李临定(1993)では、呂叔湘の挙げる本動詞“有”、“是”の他にも、次の文を挙げ、“存在”を加えている。

(71) 这里边还存在着一些问题。(李临定 1993:336)

この中にはなおいくらか問題が存在しています。(同上)

宋玉柱(2007)では、本動詞が“有”、“是”の場合であれば、文意も静的な存在を表しているため、実義動詞を用いる“静态存在文”と同じ分類に入れている。また、次の例のような文中に本動詞のない場合であれば、それぞれ“定心谓语句”、“名词谓语句”と呼び、静態存在文であると考えられる。

(72) 山下一片好风光。(宋玉柱 2007:15)

山の下は素晴らしい景色です。(筆者訳)

(73) 满地垃圾。(宋玉柱 2007:15)

あちこちゴミだらけです。(筆者訳)

张先亮、范晓など(2010)は“定心谓语句”、“名词谓语句”をまとめて、“‘无动’存在句”と呼んでいる。“‘有’字存在句”、“‘存在’存在句”、“‘无动’存在句”は、一括して“单纯存在句”と呼んでいる。“‘是’字存在句”は、判断を表す“断定存在句”と呼び、“单纯存在句”と区別している。そして、“‘有’字存在句”と“‘是’字存在句”は、文中のVPの基本的な性質の“表示关系”の点において、両者は同じだと指摘している。また、次のような本動詞“存在”を用いる文は、存在文ではないと考えられている。

(74) 这台空调机存在严重的质量问题(张先亮、范晓 2010:30)

そのエアコンには大きな品質的な問題があります。(筆者訳)

単純存在文に用いられる本動詞は比較的少なく、上記の専門家の観点は次表のようにまとめられる。

[表 2-8] 単純存在文についての代表的な先行研究

谓 语 动 词	吕叔湘 (1980、1999)	李临定 (1993)	宋玉柱 (2007)	范晓など (2010)
有	类表示单纯存 在	单纯存在 句	静态存在句- “有”字句	单纯存在句- “有”字存在句
是			静态存在句- “是”字句	断定存在句- “是”字存在句
存在			--	单纯存在句- “存在”存在句
无 动 词	--	--	静态存在句- 定心谓语句/名词谓语句 ⁵⁷⁾	单纯存在句- “无动”字存在句

2.4.2 “有・是・存在”存在文と“无动(∅)”存在文

「静態存在文」は静的な対象がある方式(静的な状態)で存在することを表している。

「動態存在文」は動的な対象がある(動的な)状態で存在することを表している。

李临定(1993)の分類に基づき、本節では“有”、“是”、“存在”、“无动词(「∅」で表記する)”を用いる場合であれば対象の存在を表すとし、方式や状態などについて触れていない文であれば「単純存在文」とする。

2.4.2.1 “有・是・存在”存在文について

“Np+有+Np”の構文では、“領有”⁵⁸⁾と“存在”を表すことができる。“存在”を表す場合の“有字句”(“有”構文)は一番単純な存在文の形式として考えられている。他の存在文の構造と比較すると、“有・是・存在”を用いる存在文は、文頭の“Np”が場所を意味する成分だけでなく、時間を意味する文成分が用いられることも度々指摘されている。たとえば、例(75)が物語の時間とこれから登場する人物の“老头儿”を紹介し、例(76)では時間と物語が行われる場所を紹介する役割を担っている。2例はともに文頭で時間“从前”を表している。

⁵⁷⁾ 张先亮、范晓など(2010:95)には“(宾语的部分)都是由定心关系的偏正短语充当,如果说成‘屋外飞雪’,‘雪地上足迹’,‘远处绿洲’就成了定心结构的短语,也就不再是存在句了。”と指摘し、宋玉柱(2007)の“名词谓语句”が存在文ではないと考えられる。

⁵⁸⁾ “所有”を表す例えば“我有汉语词典。”(『中国語はじめの一步』2014:36)のような“有”構文は、日本語のコンテキストには普通「所有文」に訳す。しかし“今年,我们的导师有4名博士生。”のような文書では、「先生」と「四人の博士課程の学生」が「所有」関係のように理解することが難しい。よって本稿では所謂“所有”の言い方を変えて、「所属」と名付ける。

(75) 从前有个老头儿，住在大海边。(宋玉柱 2007:17)

大昔あるおじいさんが海の近くに住んでいました。(筆者訳)

(76) 从前有座山，山上有座庙，庙里住着个老和尚和一个小和尚。(cc1 語料庫)

大昔、ある山にお寺があります。そのお寺に年をとったお坊さんと幼いお坊さんが住んでいました。(筆者訳)

“有”を述語動詞とする中国語の存在表現を担う基本的な構文を木村英樹(2012)は「知覚」タイプと「知識」タイプの2類に分類し、前者を「時空間存在文」と呼んでいる。語用論の観点から“有”構文だけでなく、すべての存在文が「知覚」タイプと「知識」タイプを表す用法があると考えられるが、“有”構文は存在の方式について説明していないので、[表 2-9] でまとめるような場面が下記に挙げる A から H までの八種類がある。(そのうちの F から H までの用法は「所属」の用法に属する。)

[表 2-9] 木村英樹(2011:96~109)による“有”構文の機能論的、語用論的な条件

「知覚」 タイプ	A. 特定の時空間におけるリアルな具体物の存在 (P96)	花盆旁边有一块石头。 [植木鉢のそばに石が一つあります。]
	B. 特定の時空間におけるリアルな状況の存在 (P98)	火车站有情况。[駅に異状が発生した。] 今天有雨夹雪。[今日はみぞれが降る。]
「知識」 タイプ (恒久的な何らかの属性が存在する事柄。)	C. 構造体における構成部品の存在 (P99)	这把伞有 42 支伞骨。 [この傘(*に/)には 42 本の骨があります。]
	D. 範囲における成員の存在 (P100)	豆浆有咸的和甜的。[豆乳(*に/)には塩辛いものと甘いのがあります。]
	E. 事物における相対的関係者の存在 (P104)	太阳有八大行星。 [太陽(*に/)には 8 つの惑星があります。]
	F. 所有物としての存在 (P104)	我有这本字典，你有么？ [私(*に/)にはこの辞書があります(この辞書を持っています)。君はありますか？]
	G. 事物における質的属性の存在 (P106)	吸烟有这些坏处。[喫煙(*に/)にはこれだけの弊害があります。]
	H. 事物における量的属性の存在 (P106)	一年有十二个月。[一年(*に/*には)は 12 ヶ月(*が)あります。] 长江有 6211 公里。[長江(*に/*には)は 6211 キロメートル(*が)あります。]

「知覚」タイプと「知識」タイプとを区別する要因は数量詞にあるが、客語の前に用いられる数量詞については、本稿の第四章で考察する。

“Np+是+Np”の構文では、文頭の“Np”の前に“満、遍、全、通”など“周遍性”を表す限定語、また述語動詞の“是”の前に“満、遍、全、皆、尽”などの範囲を強調する副詞を用いる場合がよく見かける、と宋玉柱（2007:17）、范晓（2010:238）で指摘している。

一般的な観点ではあるが、文末のモノを表す“Np”が文頭の場所を意味する“Np”に充満しているか、或いは話し手にとって、目の前に文末のモノを表す“Np”が唯一注意力を払う対象となる場合にのみ“是”構文が用いられると考えられている。また、具体的な事物を表す語句が文頭の“Np”に用いられるのが一般的であり、“虚化的空间类词语”「虚化空間語句」を用いると、“是”の判断を表す機能と矛盾するので、ごく限られた場面にしか用いられないと王建军（2003:253）、范晓（2010:239）などは指摘している。

この点においては、文頭の場所を示す“Np”だけでなく、文末のモノを表す“Np”が抽象的なモノである場合(例 78)もあまりない。

(77) 白鹿村洋溢着一种友好和谐欢乐的气氛。(《白鹿原》)

白鹿村では友好的で、和やかな、愉快的な雰囲気に満ち溢れている。(筆者訳)

(78) *白鹿村 是 一种友好和谐欢乐的气氛。(作例)

“Np+存在+Np”の構文も単純な存在方式を伝える構文であり、一般には抽象的な存在を述べる場面に用いられ、使用範囲が限られている(李临定 1993:337)。

(79) 他的脑子里存在着不少糊涂的想法。(李临定 1993:336)

彼の頭の中には、バカげた考えがたくさんつまっています。(同上)

しかし、次のような具体的なモノと空間の関係を紹介する場合であれば、述語“存在”を用いる存在文もありうる。李临定(1993:337)が指摘する「抽象的な」ものではなく、人類が概念化した存在を述べる場合であれば、“Np+存在+Np”の構文を用いるのであろう。

(80) 原子核中存在若干个质子和中子，外围是超高速运动的电子。(作例)

原子核には若干の陽子と中性子が存在する。周りは超高速で電子が飛び回っている。(筆者訳)

(81) 在宇宙中存在着许多“宇宙隧道”，通过这些隧道可以大大缩短星际之间的距离，……(《奇异的飞行》)

宇宙にはたくさんの「宇宙トンネル(ワームホール)」が存在する。これらのトンネルを通れば、星と星の間の移動距離が大いに短縮できる。(筆者訳)

また、文頭の名詞が人、組織などを意味する場合、“Np+存在+Np”の構文は「所属」の事柄を表す用法がある。ここの“存在”と“有”は置き換えられる。(しかし、“存在(一些问题)”の後ろはマイナス評価のある語句であり、“有着(优良传统)”の後ろはプラス評価のある語句である。この問題を別稿に委ねる。)

(82) 过去, 我们存在着不大重视各种农业技术全面发展的倾向。(《中国农业结构研究》)

以前は、私達には各種の農業技術の全面的な発展をあまり重要視しない傾向がありました。(筆者訳)

2.4.2.2 “无动(Ø)”存在句について

先行研究によれば、“Np+Ø+Np”の構文は、述語の位置の“是”または“有”を省いて組み立てられた文だとする観点(范方莲 1963)もあれば、述語の位置には何もいらぬのだとする観点(吕叔湘 1979、宋玉柱 2007)もある。この2つの観点は主流と言える。例文を見てみよう。

(83) 门口 一排自行车。(范晓 2010:245)

入り口に自転車が1列ならべられている。(筆者訳)

(84) 窗外 一片黄昏的景色。(宋玉柱 2007:38)

窓の外は夕暮です。(筆者訳)

述語の位置に用いられるのは“有”、“是”、“V着”である。どちらも用いられる可能性がある。例(83)(84)は何かを省いて作られた文ではなく、述語動詞を必要としない文構造だと考えられている。以下の専門家が指摘するように、何も入れられないとする観点もある。

与有动存在句相比, 无动存在句的作用重在描写, 多用于文学作品里描写场景, 让人们去体会处所和事物之间的存在关系。

(张先亮、范晓などなど 2010:94)

定心谓语句的谓语, 如名称所示, 是由定语及其中心语所组成的偏正词组充当。……它主要出现在文学作品的描写段落中, 例如:

(85) 路旁两颗艳辣辣的凤凰木, 进门的石阶上一大盆芭蕉……客厅里一套沙发, 两只斗形藤椅, 一张长圆短茶几, 墙上一副水墨画。(宋玉柱 2007:38)

这段文字包含几个定心谓语句, 如果在它们的 NP_L 和 NP 之间各加进一个“有”字, 其描写作用怕要消失殆尽。

(宋玉柱 2007:38)

先行研究と实例によれば、上記の専門家が指摘するように、“Np+Ø+Np”構文の述語の位置で何かを省略したというより、むしろ何も入れられないと考える方が一般的であろう。

“Np+Ø+Np”構文はさらに2類ある。それぞれ“Np+数量词+Np”(例 83、84、85)と“Np+Np”(例 86、87)のように表記する。それらは“定心谓语句”、“名词谓语句”と呼ばれている(宋玉柱 2007)。後者について、宋玉柱(2007:46)は以下のように指摘している。

名词谓语句是存在句中结构最简单的一种。……NPL 一般由处所名词加上表示全部义的定义构成。定于最常见的是“满”，也有用别的词的。

例如：

(86) 满屋子灰洞洞的烟。(宋玉柱 2007:46)

(87) 第二天一早，漫天的大雾，山谷里潮冷潮冷的。(宋玉柱 2007:46)

(中略) 从语义上来说，此类句式表示存在主体充满整个处所，因此，重说话人的心理感觉来说，注意焦点不在事物的数量上，而是把事物看作充斥整个空间的一个整体。因此即使事物是可数的，仍不能带数量定语。

(宋玉柱 2007:46)

“Np+0+Np”構文には、特殊な状況がさらにもう一種類ある。名詞と名詞の間に“的”を入れてある場合である。この場合の“满街的”“满脸的”は限定語ではなく、口語化するために用いた修辞技法だと宋玉柱(2007:42)は指摘している。

(88) 这里确实热闹，吹吹打打，熙熙攘攘，满街的瓜瓜果果，白菜萝卜。(宋玉柱 2007:42)

ここは確かににぎやかで、あちこち楽器で囃し立て、人出で賑わっている。道沿いの露店には瓜や木の実、白菜や大根などがたくさん並んでいる。(筆者訳)

(89) 叶蒂从写字台后面钻出来，蓬头散发，满脸的汗水，满脸的得意……(宋玉柱 2007:42)

葉蒂はデスクの下から出て来た。髪は茫々と振り乱れ、満面には汗が垂れ、誇らしげな笑みが浮かんでいる。(筆者訳)

2.4.3 おわりに

本節では単純存在文についてのまとめと考察などを行った、存在文とは前節で分析した「静態存在文」、「動態存在文」と筆者が言う「単純存在文」である。本節では単純存在文の下位分類を次ように図式化できる。

[表 2-10] 単純存在文の下位分類

単 純 存 在 文	“有、是、存在” 存在文	“有”構文	“草原上奔腾着一群骏马。”
		“是”構文	“天空中飘着雪花。”
		“存在”構文	“这里边还存在着一些问题。”
	“无动” 存在句	“Np+数量词+Np”構文	“山下一片好风光。”
		“Np+数量词+Np”構文	“满地垃圾。”
		“Np+的+Np”構文	“满地的瓜果。”

言語資料

陈廷一《宋氏家族全传》之“国之瑰宝”宋庆龄、四月菊《意难忘》、章贵生《危石》、张十里《小星山歼敌记》、刘心武《刘心武短篇小说》、王金海《翡翠岛》、赵淑侠《我们的歌》、唐宁《耳的恋歌》、陈定兴《香港之滨》、金同悌《太平洋上》、张抗抗《隐形伴侣》、栈桥《招魂》、吴泽林《边陲异趣》、韩希梁《海上看青岛》、梁庭望《壮族风俗志》、张红华《千古疑案—“传国玺”失踪之谜》、《教学与研究》1981年02期、毛毛苗苗《迷路》、高越《健身房里的秘密》

北京日本学研究中心《中日对译语料库》(第一版)(2002、2003)《霜叶红似二月花》、《插队的故事》、《红高粱》、《盖棺》、《轮椅上的梦》、《天云山传奇》、《金光大道》、《倾城之恋》、《家》、《青春之歌》、《我的父亲邓小平》、

参考文献

- 范方莲(1963) <存在句>《中国语文》第五期
- 汤廷池(1977) 《国语的“有字句”与“存在句”》
- 吕叔湘(1980) 《现代汉语八百词》
- 言語学研究会編(1983) 『日本語文法・連語論(資料編)』
- 鈴木重幸、鈴木康之編(1983) 『日本語文法・連語論(資料編)』 言語学研究会編
- 聂文龙(1989) <存在与存在句的分类>《中国语文》第二辑
- 李临定著 宮田一郎訳(1993) 『中国語文法概論』 光生館
- 刘月华 潘文娛等著(1999) 『現代中国語文法総覧』 相原茂監訳、片山博美、守屋宏則、平井和之訳 ころしお出版
- David・Lee(2001)著 宮浦国江(2006)訳 『実例で学ぶ認知言語学』 大修館
- 王建军(2003) 《汉语存在句历时研究》 天津古籍出版社
- 高橋弥守彦(2006) 『実用詳解中国語文法』 郁文堂
- 宋玉柱(2007) 《现代汉语存在句》 语文出版社
- 王学群(2007) 「存在文における“V着”と“V了”」『中国語の“V着”に関する研究』。
- 陈忠(2007) 《认知言语学研究》 山东教育出版社
- 张先亮、范晓等(2010) 《现代汉语存在句研究》 中国社会科学出版社
- 鈴木康之(2011) 『現代日本語の連語論』 日本語文法研究会(彭广陆、毕晓燕 译(2013))
《现代日语词组学》 北京大学出版社)
- 刘街生(2013) 《存在句的动词考察》《汉语学习》
- 岡智之(2013) 『場所の言語学』 ひつじ研究所
- 辻幸夫(2013) 『新編認知言語学キーワード辞典』 研究社

第三章 存在文における「時間」

存在文は「場所語＋動詞＋客体」構造からなる文であり、文頭に場所語を用い、客体が場所語に存在する文を言う。存在文は一般に場所語に客体の単なる存在を表す単純存在文“桌子上有一台电脑。”[机の上にパソコンが一台ある。]、客体の静止状態を表す静態存在文“门口站着一个人。”[入口に人が一人立っている。]、客体の動態を表す動態存在文“草原上奔驰着一群骏马。”[草原では駿馬一群れ疾駆している。]の三類に分けられる。

これまでの存在文研究には、客体の「存在」と「空間」との関係についての研究が数多くある。客体の「存在」と「時間」との関係についての研究は、一般に存在文のなかの“有”構文の研究に限られている。また、存在文に用いられる動態助詞についての研究の多くでは、“NP_t+VP+NP”の“VP”で現す“V了”と“V着”が同じ意味を表す、というように考えられている。

場所名詞が主語となる「存在文」は、静態存在文であれ、動態存在文であれ、単純存在文であれ、客体と客体の存在する「時間」の関係については何も述べられていない。しかし、静態存在文は静止している比較的一時的な客体の存在を述べ、動態存在文は動いている目の前の存在について述べているのに対し、一般的には単純存在文は客体のほぼ恒久的な存在を叙述している。

本節では、存在文の文構造と「V＋動態助詞“了、着”＋客体」のなかの動態助詞“着、了”に焦点を当てて考察する。一般に動態助詞は運動の一局面を表し、“了”は完了の局面、“着”は持続の局面を表すので、運動の時間的な側面と関係を持つことになる。動態助詞“了、着”を分析し、静態存在文と動態存在文が反映する「時間(の推移)」に関わる情報について検討する。

第1節では存在表現の連語構造について考察して、第2節ではアスペクト研究の観点から存在文に用いる動態助詞“V了”、“V着”を分析する。そして、第3、4節では語用論の考えを用いて、それぞれ静態存在文、動態存在文に用いられている“V了”、“V着”の使用状況について論じる。最後に、第5節では動態助詞が“过”の場合について分析する。

第1節 存在文の語順について

－ “在字句” の構造との比較－

3.1.1 はじめに

李臨定(1993)には、“在+处所”⁵⁹⁾の構造を述語動詞の後ろに用いる場合、動態と静態の別があるとし⁶⁰⁾、次のように述べている。

(1) 一进屋，我们便都坐在沙发上。(李臨定 1993:207)

部屋にはいるや、我々はみなソファに腰を下ろしました。(同上)

(2) 他坐在沙发上，怎么叫他也不起来。(李臨定 1993:207)

彼はソファに腰をおろして、どんなに呼んでも立ち上がろうとしません。(同上)

上段の文の動詞“坐”は動態で(“坐”は腰を下ろしていない状態から、腰を下ろすまでの動作行為を表す)、介詞“在”の後ろには“了”を加えることができる“我们便都坐在了沙发上”。これに対して、下段の例文の“坐”は静態で(“坐”は静止の状態)、“在”⁶¹⁾の後ろには“了”を加えることができない⁶²⁾。

この文型では“躺(tǎng)”“坐(zuò)”“站(zhàn)”など、一部の身体の動作を表す動詞が述語になる時にのみ、動態と静態の別がある。

(李臨定 1993:207)

李臨定(1993)では“在字句”の場合、「状態を変える動作行為」を「動態」とし、動作行為の「静止状態」を「静態」と定義づけている。

また、同書の存在文⁶³⁾の部分では、静態存在文は「人あるいは物の静止している存在状態をえがくものである。」(李臨定 1993:332)と、動態存在文の述部、例えば“空中飘着雪花”の“飘着”が「動態であること」(李臨定 1993:335)と指摘している。し

⁵⁹⁾ 李臨定(1993)の指摘に従い、“在+处所名词”構造を用いる文を“在字句”と呼ぶ。空間詞を主語として、介詞“在”を前置する必要のない文が存在文となる。ただし存在文の主語に当たる名詞の前に“在”を用いることのできる場合もあるので、存在文と“在字句”は構造が一部重なっている。

⁶⁰⁾ 存在文は「静態存在文」と「動態存在文」のほか、通常「単純存在文」もあるが、単純存在文は本稿と直接的な関係がないので言及しない。

⁶¹⁾ 本稿では一般の文型に用いられる述語動詞の“在”を補語動詞と考えている。

⁶²⁾ 筆者の調査と分析によれば、意味上の違いは若干あるが、例(1)(2)の文はいずれも“坐在了沙发上”のように書き換えられる。

⁶³⁾ 李臨定(1993:330~337)、呂叔湘(1980, 1982 日本語訳版:29)などには、述語動詞が“是、有”の場合を除いて、存在文の述語には“着”を伴うことが多いが、動作の進行を表すのではなく、動作によって生じた状態を表すと指摘している。そのうち、静態存在文(门口站着一个人。)の中の“V着”は動詞の「静態」の意味を有するが、文中の“着”を“了”に書き換えたり、省いたりしても、「静態」の意味は変わらない。それに対して、動態存在文(湖里游着一群鸭子。)の中の“V着”は動詞の(持続)「動態」の意味を用いると考えられている。

たがって、「静的な結果残存」が「静態」、「均一的な動作や動き」などが「動態」となる。“在字句”と存在文における「静態」と「動態」との定義には、いささか異なるところがある。

李臨定(1993)の他に、多くの先行研究も「静・動態」について検討を重ねてきているが、“在字句”と存在文における二組の「静・動態」の異同については言及されていない。本節は“在字句”と存在文に用いる二組の「静・動態」の区別を比較し、その理由を検討してみる。

3.1.2 今まで「静・動態」についての先行研究

動詞の「静的な意味」と「動的な意味」との関係についての先行研究を見てみると、主に以下のような数種類の考え方があ

李臨定(1985:180)では、“挂”などは、「動態機能(“动态功能”）」と「静態機能(“静态功能”）」を同時に持っている“兼类动词”とみなされている。“名₁+正+动+名₂+呢(他正挂灯笼呢。)”は動詞の「動態機能」を有する文構造で、“处+动+着+名”(那儿挂着一盏灯笼。)の構造⁶⁴⁾は、動詞の「静態機能」を有すると指摘している。動詞の種類だけでなく、文中の副詞の“正”および動態助詞の“着”の役割も重視されていると言えよう。

徐峰(1998:3)では、動詞自身は“静态功能”を持たないが、“放置动词+着”の構造で“静态意义”を生み出したと考えている。この観点は直接「静態」と「動態」を動態助詞と関係づけている。

李臨定(1985)と徐崢(1998)では、文中の“着”は「静的な意味」を表すのに不可欠な要素のように考えられている。しかし、このような考え方は“上面放一只破脸盆。(《曹禺剧作选》)”[その上におんぼろな洗面器が置いてある。]が何故「静態」の意味を表すかを解釈できない。

陆俭明(1991)では、「動作(“动作”）」と「静態(“静态”）」の対立は例文を挙げて動詞の語義特徴の対立による現象だと考えている。“台上放着长条桌子。(陆俭明 1991:1)”[台の上に長いテーブルが置いてある。]の文では、文中の動詞は“附着于某物”の意味を持ち、「存在」と「静態」を表し、“台上演着椰子戏。(陆俭明 1991:1)”[壇上で椰子劇を演っている。]の述語動詞“演”は[+附着]の意味を持たないため、“活动、动态”を表すと指摘している。この考え方は文構造と動態助詞などを無視して、動詞の意味特徴によって「動態」と「静態」を区別していると言えるであろう。

⁶⁴⁾他の文構造に“名+动+着+呢(门开着呢。)”、“名+处+动+着+呢(灯笼在那儿挂着呢。)”、“名₁+动+着+名₂(他戴着一顶草帽)”のような構造もある。

李杰(2003:34)では、動態助詞“着”は単に持続を表しているに過ぎず、“挂”など“附着义”を表す動詞は完成後必ず静態の意味を表す、としている。よって、“静态义”は“放置义”に内在し、李临定(1985)が指摘した特定な文構造で表せるとみなしている。

刘街生(2010、2013)は構造及び動詞について調べ、文構造が表す“终点变化(telic change)”についての説明は、以下のように整理できる。

施事の及物動詞を使った「動作主+動作+対象」構造では、例(3)、(4)は動作主を意味する部分が文中に現れ、文は動作の側面を注目し、「動的」な意味を表している。刘街生(2013:14)では、この場合は“状态延续不需要外力，所以 A(论元⁶⁵)可以删除，于是构成‘墙上挂了一幅画’、‘墙上画了一幅画’这样的存在句”と説明している。例(3)(4)にある“他”の部分省くと、文は静態存在文になる。動作主を文中から削除することにより、出来事の“终点变化”を示すと考えている。

(3) 墙上他挂(了)一幅画。(刘 2013:14)

壁に彼は絵を一枚かけた。(筆者訳)

(4) 墙上他画(了)一幅画。(刘 2013:14)

壁に彼は絵を一枚描いた。(筆者訳)

また、動作・状態を表す不及物動詞の一般的な形式は「動作主+動作」である。例(5)から(8)までを一般的な述語文に直した場合、それぞれ“石狮子蹲着”、“人病了”、“乌鸦盘旋着”、“灯亮着”であるが、動作主は動詞の後ろに用い「動作+動作主」になり、“有或暗含终点变化的特征”と刘街生(2013:15)は指摘している。

(5) 门口蹲着一对石狮子。(刘街生 2013:15)

正門前に狍犬が一對うずくまっている。(筆者訳)

(6) 广场上已病了不少人。(刘街生 2013:15)

広場では病気になった人が少なくない/大勢いる。(筆者訳)

(7) 在她的头顶，盘旋着一群呱呱乱叫的乌鸦。(刘街生 2013:15)

彼女の頭の上では、「カーカー」と鳴いているカラスの群れが飛び回っている/いた。(筆者訳)

(8) 埃菲尔铁塔上亮着一闪一闪的灯。(刘街生 2013:15)

エッフェル塔ではネオンがキラキラと輝いている。(筆者訳)

非施事の及物動詞⁶⁶および結果を表す不及物動詞の場合⁶⁷は別稿に譲る。

⁶⁵ 刘街生(2013:13)には“存在句の局势结构是‘Loc+V+0/S’，V表示动词，A表示及物动词的主语论元，0表示及物动词的宾语论元，S表示不及物动词的唯一论元，Loc表示处所成分。”という指摘がある。

⁶⁶ “山上有树。”[山の中には木がある/あった。]と“屋外是一群狼。”[部屋の外は狼の群れだ/だった] (刘街生 2013:14)を挙げている。

⁶⁷ “不及无动词中，结果动词构成的存在句，一般表示出现或消失(“房间里跑出了一个小孩。”[部屋から子供が走って出てきた。])。状态动词构成的存在句一般表示存在(例7、8)。动作动词则相

3.1.3 述語の「静態」と「動態」

以下の例文(9)から(12)までのように、「場所名詞」が述語動詞の後に直接用いられる場合を、他の“在字句”⁶⁸⁾と区別し「直後式」と名付ける。

(9) 我站了起来，把烟尾扔在壁炉里，说：“对不起……”(《女》)

私は立ち上がり、たばこの吸いがらを暖炉の中に投げこんでから、「すみません…(《女》)

(10) 菜园的后面，简直像个动物园！十几只意大利的大白鸡，在沙地上吃食，三只黑羊，两只狼犬——我的那匹马也拴在旁边——还有小孩子养的松鼠和白兔。(《女》)

畑のむこう側は、まるで動物園だった、イタリア種のニワトリが十羽ほどえさをついばんでいた。黒羊が三匹、獵犬が二匹。私の馬も、そのそばにつな
がれていた。子どもの飼っているというリスにウサギもいる。(《女》)

(11) 中午开饭的时候，辛小亮排在四号窗口买米粥和炸糕。巧巧儿赶上卖饭的是孟蓓。(《丹》)

昼食のとき、辛小亮は四番窓口でお粥と揚げ饅頭を注文したが、偶然その窓口で応待していたのは孟蓓だった。(《丹》)

(12) 有一天，我下班回来，发现她躺在床上，看见我就要起来。我按住她……(《女》)
前にぼくが仕事から帰ってくると、横になっていてね、すぐに起きようとするからそのまま寝かせておいたんです。(《女》)

例(9)(10)は働きかけを意味する“扔”“拴”を用い、例(11)(12)は身体の動作(立ち居)を表す“排”“躺”を用いている。その中の例(9)(11)は「動態」を表す文であり、例(10)(12)は「静態」を表す文である。

李臨定(1993:207)の「一部の身体の動作を表す動詞が述語になる時のみ、動態と静態の別がある。」という指摘に従えば、例(10)の“拴在旁边”は「静態」状態に解釈することができなくなるが、実際は身体の動作でない場合も、「動態と静態」の別がある。

对复杂，构成的存在句，即可表示存在也可以表示消失或出现(例9、10)。”(刘街生 2013:15-16)と指摘した。

⁶⁸⁾ 筆者は“在字句”を分類する李臨定(1993:203-208)の分け方に倣い、用法及び語順の違いにより、以下に挙げる例1を基本用法として、“在字句”を以下の5種類に分ける。例1の“在”は文中の本動詞で、“在+处所”の基本用法だと見られている。例2から例4は、それぞれ場所名詞が文中の位置によって「文頭式」、「直前式」、「直後式」、「文末式」と呼ぶ。

1. 书在桌子上。/本は机の上にある。(作例)
2. 在桌子上他放了几本书。/テーブルのうえに、彼は本を数冊置きました。(李臨定 1993:204)
3. 他在桌子上放了几本书。/彼は机のうえに本を数冊置きました。(李臨定 1993:203)
4. 他把几本书放在桌子上。/彼は本を数冊、机の上に置きました。(李臨定 1993:206)
5. 他放了几本书在桌子上。/彼は本を数冊机の上に置きました。(李臨定 1993:207)

例(9)(11)では“扔”“排”という「動作の進行」を「動態」用法に解釈し、例(10)(12)の“栓”“躺”のような「動詞の完了」を「静態」用法と説明しているが、このような「静・動態」は「静・動態存在文」で言う「静・動態」とはいささか異なるところがある。

(13) 长眉妙目，脸上薄施脂粉，也淡淡的抹着一点口红。（《女》）

長い眉と美しい目元、薄化粧、淡い口紅。（《女》）

顔にファンデーションがほんのり塗られ、口紅も薄く塗っています。（筆者訳）

(14) 广告下面靠墙坐着一个女乞丐，她的脸上的黑泥使他心惊。（《女》）

広告の下の塀際に女の乞食がうずくまっている。顔にこびり付いた黒い垢にはギョッとする。（《女》）

(15) 在我国西北边疆的深山峡谷中，行驶着一辆哞哞地喘息着的长途客运汽车。

（《活》）

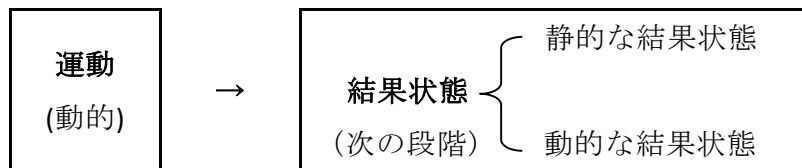
中国西北边境の山奥の峡谷を喘ぐように遠距離バスが走っていた。（《活》）

(16) 室内弥漫着一种烤红薯的麦芽糖与酒曲混合的香味。（《活》）

室内には焼芋と麦芽糖と酒麴の入混じった匂が充滿している。（《活》）

上記の例(13)(14)は静態存在文であり、例(15)(16)は動態存在文である。静態存在文は、“施”“抹”“(靠墙)坐”という動作が完了した後、結果の残存する状態を表している。動態存在文は何らかの運動で“汽车”“香味”が“峡谷中”“室内”に進入・出現し(出現する理由については、普通は無関心である)、目の前は“行驶”“弥漫”という運動する状態を伝えようとする表現である。

[図 3-1] 本節の「動態」と「静態」についての考え



要するに、先行研究では異なる観点があるが、筆者が [図 3-1] でまとめたように、直後式の“在字句”の場合、「動態」は「運動」の側面であり、「静態」は「静的な結果状態」を指している。存在文の場合、「静態」は“在字句”と同じく「静的な結果状態」を描いているが、「動態」は何らかの動作の次の段階として、「動的な結果状態」を目撃したことを描写している。

存在文における「静・動態」機能と区別するため、本校では直後式の“在字句”の「動態と静態」を「運動・結果」で説明する。直後式の“在字句”について、李临定(1993)には次のような例文も挙げている。

(17) 一支羽毛球落在我脚前。(李临定 1993:206)

バドミントンの羽根がひとつ、私の足の前に落ちました。(同上)

(18) 这时，一支羽毛球落在我脚前。(作例)

その一瞬、バドミントンの羽根がひとつ足の前に落ちた。(筆者訳)

(19) 一支羽毛球落在我脚前，我伸手要去捡起来。(作例)

バドミントンの羽根がひとつ、私の足の前に落ちたので、私は手を伸ばして拾い上げようとした。(筆者訳)

例(17)に倣い、例(18)(19)を作例した。文中の下線部はいずれも同じで、直後式の“在字句”である。例(18)は「運動」(従来で言う「動態」)を表す文であり、そして例(19)は「結果」(従来は「静態」と呼ぶ)を表す文である。例(17)から(19)、そして例(1)と(2)をもう一度比較してみよう。もしも言語環境を無視して、下線部の“一只羽毛球落在我脚前”、“坐在沙发上”だけを見れば、いずれも「動態」にのみ解釈できる。言いかえれば、下線部の直後式の“在字句”はただ「運動」の側面を伝えているが、言語環境やアスペクト助詞(“一只羽毛球落在了我脚前。”[バドミントンの羽根がひとつ、私の足の前に落ちました。])などの影響で「動的は側面が完了した」という情報が加わってくる。その上、“落”“坐”などは何らかの結果を残す動作なので、文レベルでは「静態」の意味が出てくるのではないだろうか。

以上により、直後式の“在字句”は目の前の「運動」に注目し、文レベルの情報が加わると「静的な結果状態」を伝えることもできる。それに対して、存在文は常に結果の状態を注視している。働きかけや立ち居など運動の静的な結果の状態を表すには、静態存在文で表現する。繰り返しや、膨張・放射など均一的な運動を表す場合、動態存在文で表現する。

3.1.4 場所名詞と連語のむすびつき

中国語(特に“在字句”と存在文)における連語の範囲について、鈴木康之(1983、2014)の指摘を参考にする。

動詞「流す」「動かす」は、なんらかの対象を想定したヒトの動作を意味していて、「汚水を流す」「電車を動かす」というような連語をつくる。また、その際には、モノの動きを意味する動詞「流れる」「動く」を使用して「汚水が流れる」「電車が動く」のような連語をつくることもできる。事実としては、ヒトの動作によって実現されるモノの動きである。

(鈴木康之 2014:1)

鈴木康之は、上掲のようにヒトの動作(「汚水を流す」「電車を動かす」とモノの動き(「水が流れる」「電車が動く」)の関係を連語レベルで明らかにしている。両者

の関係については、連語レベルで考えるべきであり、モノの動きについては主語と述語との関係でとらえられないとし、上記の観点を裏付ける考えを次のように示している。

そうだとすれば、「汚水が」「電車が」と「ながれる」「うごく」とのむすびつきを、主語と述語との関係として考えてはならない。

(鈴木康之 1983:39)

日本語は「主語+目的語+述語」のように文が作られることに対して、中国語の文構造はより複雑である。連語論の考え方を活用するには、中国語の連語は語順にとらわれてはいけなく、各文成分間の意味関係から着手すべきであると考えている。「汚水を流す」のような他動詞を用いる連語の主語は人間など「施事の主体」であるが、「水が流れる(流される)」の主語は「(受事)中性の主体」の「水」である。中国語には自他動詞の区別がないほか、動詞の形態変化もないので、核である動詞にスポットを当てるのではなく、文の主体と出来事を合わせて判断すべきである。

3.1.4.1 静態存在文の場合

[表 3-1] 静態存在文と“在字句”の連語レベルの語順について

	ものへのはたらきかけ	場所へのかかわり
存在文	【(在) 桌上】 放 书	【(在) 那里】 坐 人
文頭式	在桌子上 ⁶⁹⁾ 【他】 放 书	【在那里】 人 坐
直前式	【他】 在桌子上 放 书	【人】 在那里 坐
直後式	【他】 把书 放在 桌子上	【人】 坐在 那里
文末式	【他】 放 书 在 桌子上	—— (この語順の文は存在せず)

前章の結論では、静態存在文は主に「ものへのはたらきかけ」と「場所への関わり」の出来事の結果存在を表している。便宜上、本節では文レベルの要素—文中の数量詞、動態助詞、状況語などを省いて、連語構造のレベルから存在文と相応する“在字句”との関係について分析する。[表 3-1] の中では、【】の中の文成分は主語であり、文中の□の部分はある一種の出来事を名付ける「連語」である。文中の述語動詞を太字にしている。

上記の[表 3-1]の「ものへのはたらきかけ」では、「文頭式」と「直前式」の主語“他”を省くと、静態存在文になる。“放书”の結果として“(书)在桌上”になるの

⁶⁹⁾文頭式の“在字句”では、文頭の場所名詞を「に」格の空間詞に翻訳する場合は極少ない、「で」格に訳するのが普通である。例えば、“在中国则一切须靠佣人。(《女》)[中国ではすべて使用人に頼らないわけにはいかない。]”詳細は本稿の「1.1.3「文頭式」の“在+处所”」ご参照願いたい。

が普通であるが、動作が達する場所の“在桌上”が旧情報となり⁷⁰⁾、動詞の前に現れるのは、すでに「実現」した出来事を叙述する場合にのみ考えられる。このような場合、連語の語順により、動詞“放”の「静態」の意味が生み出され、文には主語の“他”が現れるか否かと関係なく、「実現」した動作(文頭式)・出来事(直前式)のことを表している。“在字句”を研究する多くの研究者は“在+处所”を動詞の前に置く場合、「動作の発生する場所と状態の現れる場所を示す」という指摘も本節の観点を裏付ける⁷¹⁾。

それに対して、「直後式」と「文末式」の場合、前者は「処置」に焦点を当てているが、後者は働きかけの出来事を時間の順序によって忠実に述べている。両者はいずれも場所の“桌子上”を新情報として扱い、“把那本书放在桌子上。/放一本书在桌子上。”[その本/一冊の本をテーブル上に置いて。]のように文を組み立てている。これは普通「動作の到達する場所あるいは状態の現れる場所を示す。」“在字句”の構造だと考えられる。

ここの「状態の現れる場所」はまさに「結果」の側面である。言語環境やアスペクトなどの影響により、「動作の達する場所」という「運動」の側面から生じた意味である。連語レベルでは「運動」の側面だけを表している。

本節で言う「実現」はアスペクトにおける「完了」とはやや異なる。静態存在文の場合(「働きかけ」や「立ち居」など)、「運動」が「完了」した後、次の側面は「結果」である。言い換えれば動作の「実現」は即ち「完了」である。動態存在文の場合ではそうではなく、目の前の「(結果)状態」は必ずしも前の動作が「完了」した結果とは限らない。例えば“空中飞舞着雪花”の場合、「ひらひらと舞っている雪」が見られるのは、「雪が舞った。」結果ではない。よって本節は「結果状態が見られる」ようになる「運動」から「結果」の転換を「実現」と呼ぶ。

[表 3-1] の「場所へのかかわり」にも同じようなことが言える。「文頭式」と「直前式」の“在那里人坐(着)”，“人在那里坐(着)”は静的な結果状態を伝え、「直後式」の“坐在那里。”[そこに座りなさい。]は、動作が達する場所を示すので、「運

⁷⁰⁾ “在教室里他写字。”[教室で彼は字を(どこかに)書く]の場合では、場所名詞の“在教室”の旧情報であるが、しかし動作の達する場所ではなく、動作の行われる空間なので、本節が言う「実現」ではない。

⁷¹⁾ 范继淹(1982:71-86)では“在字短语”“在”連語の機能を以下の三つに分類している。

- i、“在+处所名词”を文頭に置く場合は、“动作发生的处所”「動作の発生する場所」を指す。(“在北京，我跟他在这东饭店住在一个房间里。”[北京では、私は彼と遠東ホテルで同室だった。])
- ii、“在+处所名词”を動詞の前に置く場合は、“动作发生的处所和状态呈现的处所”「動作の発生する場所と状態の現れる場所」を示す。(“我们在椅子上坐着。”[私たちは椅子に坐っている。])
- iii、“在+处所名词”を動詞の後ろに置く場合は、“动作到达的处所或状态呈现的处所”「動作の到達する場所あるいは状態の現れる場所」を示す。(“我们坐在椅子上。”[私たちは椅子に坐っている。])

その他に、王还(1957:25-26、1980:25-29)、沈家煊(1999:94-102)など多くの研究者も同じように指摘している。

動」に注目しているのであろう。ただし、存在文を組み立てる連語の語順は“（在）那里坐人”であり、動作が達する場所が「旧情報」とされる点においては同じだが、中性(施事でも、受事でもない)を意味する主体“人”が述語動詞の“坐”の後ろに用いられる構造は、前項の「ものへのはたらきかけ」（“（在）桌上放书”の場合“书”は受事(中性)な主体である）と異なる。この特徴については、次の「4.2 動態存在文の場合について」で分析する。

3.1.4.2 動態存在文の場合

本論文では動態存在文は「移動」「繰り返し」「膨張・放射」のような出来事の進行中の状態を述べている、と説明している。[表 3-1]と同じように、動態存在文と“在字句”に用いられる連語を次の[表 3-2]にまとめる。

[表 3-2] 動態存在文と“在字句”の連語レベルの語順について

	移動	繰り返し/膨張・放射
存在文	【（在）空中】 飞舞 雪花	【（在）草原上】 弥漫 晨雾
文頭式	在空中 【雪花】 飞舞	【在草原上】 晨雾 弥漫
直前式	【雪花】 在空中 飞舞	【晨雾】 在草原上 弥漫
直後式	【雪花】 飞舞在 空中	【晨雾】 弥漫在 草原上
文末式	---	---

上記の「3.1.4.1 静態存在文の場合」で説明したとおり、達する場所が旧情報とされた連語（文頭式、直前式）は動作・出来事の「実現」を意味し、ある動作の「結果」（「動的な(結果)状態」）に注目している。場所を新情報とする語順（直後式）は動作の「運動」する側面に注目する。存在文は、その動作があるところに達して、そこにとどまり、空間の内部を移動したり、ある（静的/動的）な(結果)状態を表したりしていることを叙述する。

一般的には、運動の「源」となる主体が普通の動詞述語文の主語になるのは、話し手が運動中の「不定」の“雪花”、“晨雾”と静止状態にある不定の“人[表 3-1]”について十分な情報を把握していないからであろう。存在文は上記の“（在）空中飞舞雪花”、“（在）草原上弥漫晨雾”、“（在）那里坐人”のように中性主体が客語の位置に入り、新情報となる。そのため、不定な事物と特定の事物は全部静態存在文の客語に用いることができるが、特定の事物は動態存在文の客語に用いることができない。

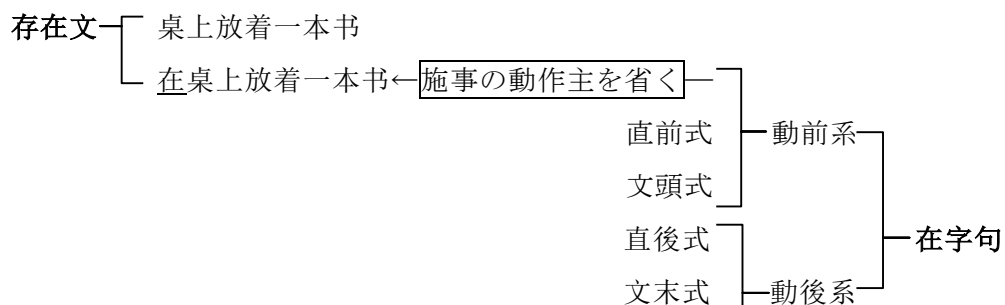
3.1.5 おわりに

筆者は、これまでの動詞の「動態」と「静態」の用法について、先行研究を調べ整理したが、まだ若干不十分なところがあるものの、今の段階では一応以下のように整理できる。

筆者の分析によれば、動後式の“在字句”に見られる「動態」と「静態」は「運動」と「結果状態」の側面を指している。存在文に用いられる「静態」と「動態」は「静的な結果状態」と「動的な結果状態」のことである。また、達する場所を動詞の前に用いる場合(施事の主体が現れない)、「状態が現れる」場所を意味している。このような連語構造はある状態の「実現」と考えられ、一種のアスペクトの意味を持っている。

存在文と“在字句”との文構造は、次の [図 3-2] のように関係付けて整理することができる。これにより、存在文と“在字句”との関係が明らかになる。

[図 3-2] 存在文と“在字句”の文構造



第2節 存在文における“V着”、“V了”

—アスペクト的観点から—

3.2.1 はじめに

本節では“NP_L+V+着/了+NP”構造⁷²⁾で組み立てられた存在文について検討する。存在文研究者の多くは文中の“着”、“了”について、以下に挙げる二説のように捉えている。

一説は李臨定(1993:329-337)の説であり、「文中の動詞の後ろに動態助詞“着”を伴うのが常で、“了”を用いることもできる。」である。

もう一説は宋玉柱(2007)の言うように、存在文の意味によって分類を行い、“着”と“了”とが「書き替えられる」場合と「置き換えられない」場合とがあると指摘する説である。

置き換えられる場合では、“‘了’字句是‘着’字句的一种变体可能受方言影响…一般认为完全可以将这个‘了’换成‘着’、意思不变。”と説明している。

(20) a. 照片两边摆放着两个精美的花篮，下边是一块大匾，上写“鞠躬尽瘁”四个金光耀眼的大字。(《文汇报》1979-1-9)

b. 照片两边摆放了两个精美的花篮，……(作例)

写真の両側に綺麗に作られた花かごが二つ置いてある、…(筆者訳)

(21) a. 广安虽然土气，但它的军阀可一点也不土气。在这所公馆里居然还修了一个网球场。(《我的父亲邓小平》)

b. ? ……。在这所公馆里居然还修着一个网球场。(作例)

广安は鄙びたところだが、軍閥はは全てもってハイカラだったのだ。公館には、なんとテニスコートまであった。(『わが父・鄧小平』)

(22) a. 草地上跑着一匹马。(宋玉柱 2007:55)

放牧地で馬が一頭走っている。(筆者訳)

b. ? 草地上跑了一匹马。(作例)

放牧地から馬が一頭逃げた。(筆者訳)

例(20)a、(21)a、(22)aは存在文である。原文に倣い、下線を引いた部分の動態助詞“着”を“了”に入れ替えてみても、(20)bは(20)aとほぼ同じ文意である。宋玉柱(2007)の分析によると、例(21)のような客語が受事客語で、動作・行為が完成した後に出現するのであれば、“着”を用いることができない。しかし、実際には(21)bも言うことができる。ただし(22)bでは、“着”から“了”に置き換えると、消失の意味を表すようになる。

⁷²⁾ 動詞“有”“是”を用いる存在文についての分析は別稿に委ねる。

三つの例文は、三種類のそれぞれ状況を表している。例(20)から(22)はそれぞれ“着”と“了”の両方が用いられる場合であるが、“了”を用いるのが一般的な場合(例20)、“着”を用いるとやや違和感のある場合(例21)、そして“着”を用いると存在文で、“了”を用いると存在文ではなくなる場合(例22)である。しかし、両者の関係がまだ十分に明らかにされているわけではないので、先行研究の分析では不十分であると考えられる。

中国語の存在文研究では、動態助詞の研究はほとんど見られない。本節の分析によれば、存在文における動態助詞は完成度を表しているのではなく、話し手の注目点を表していると思われる。上記の三種の状況について分析する。

3.2.2 今までの存在文におけるアスペクト研究

“NP_L+V+着/了+NP”構造の存在文に対する研究は、多くの研究者によってなされている。価値ある研究も多数挙げられる。存在文研究は二つの時期に大別される。一つは20世紀60年代から90年代までの存在文研究である。その代表として、李臨定(1993:329-337)の存在文研究が挙げられる。もう一つは21世紀に入ってからのものである。宋玉柱(2007)がその代表として挙げられる。同氏の存在文研究は、理論的に見ても存在文研究史の上からも詳細且つ重要である。

李臨定の説(1993:329-337)によると、“NP_L+V+着/了+NP”構造の存在文は「静態存在文」と「動体存在文」に分けられる。

「静態存在文」(例(20)a)の述語には、人間の動作(“放”、“写”、“穿”、“种”など)、および人間の行為(“躺”、“蹲”など)を意味する動詞が用いられる。[文中では動詞の後ろに動態助詞“着”を伴うのが常で、“了”を用いることもできる。]と指摘している。宋玉柱(2007)では、このような“着”を用いる場合を“着字句”と名付け、“了”を用いる場合を“了字句”と名付けている。また、“着字句”は目の前の状態に注目しているが、“了字句”は目の前の変化に注目していると指摘している。

“V”の部分[“飘(着)”、“游(着)”などの動態である。](李臨定1993:335)場合は、「静態存在文」と違い動態義を表すので、「動態存在文」(例22a)と名付けている。一方、宋玉柱(2007:55)は“进行体动态存在句”「進行体動態存在文」と名付け、述語は「移動」「揺れ」「拡散」などの意味を表せる、としている。

例(21)aのような存在文は、李臨定(1993)の分類のなかには挙げられていない文である。宋玉柱(2007)では、これらを“完成体动态存在句”「完成体動態存在文」と名付け、客語は“受事宾语”「受持客語」とであると指摘している。

李臨定(1993)が言う「単純存在文」の“有字句”、“是字句”(宋玉柱2007)、及び“经历体存在句(窗子上贴过几张剪纸)”、“定心谓语句(山下一片好风光)”、“名词谓语句(满

地垃圾)”(宋玉柱 2007:15)などは、今回の問題との関係がないため、本節での研究対象から外す。

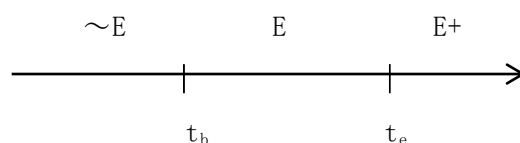
上記の例 (20) a、(21) a、(22) a のアスペクトは、それぞれ特徴が異なるので、本稿第二章の分類によって、本節は「はたらきかけの静態存在文」、「つくりだしの静態存在文」、「動態存在文」と名づける。

3.2.3 はたらきかけの静態存在文

3.2.3.1 「継続動詞」“放”など

例(20)aのような文では、文は一般にとりつけを表す出来事の結果状態を叙述し、VPの位置に「継続動詞」(金田一春彦 1950、Vendler1967⁷³⁾)“放(花籃)”などが用いられる。継続動詞について、町田健(1989:25)は、「継続動詞の表示する事象は、その開始点と完結点とが明確に捉えられる性質のものである。」と、指摘している。図示すると、以下ようになる。

[図 3-3] 町田健(1989:25)にある「継続動詞」の説明図



[図 3-3]の「~」記号は「否定」を表し、「t_b」「t_e」の記号はそれぞれの事象の開始点と完結点を表す。従って、事象は「E」、事象の結果は「E+」のように表せる。

町田健(1989:37)は、以下のように述べている。

[走る]、[泣く]のような動詞によって表示される事象は…その主体に意志と力さえあれば、いくらでも[走る]という行為を続けることができる。

継続動詞は、ある条件が満たされれば、それで完結するという性質の動詞ではない。このような事象を Comrie (1976:71) に従って、「非限界的」(atelic)事象と呼ぶこととする。これに対し、[家を建てる]、[椅子を作る]のような連語によって示される事象は、家や椅子が完成してしまえば、必ず完結するという性質を持っている。このような事象は、「限界的」(telic)事象である、という指摘がある。

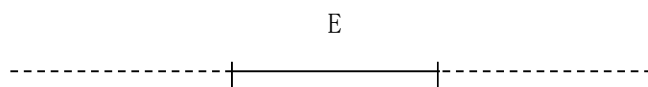
⁷³⁾ 寺村 (1984:124) には金田一 (1950) の要約が載せられている。日本語の動詞句を「状態動詞」、「継続動詞」、「瞬間動詞」、「第四種の動詞」のように四つに分ける。町田 健 (1989) によると、Vendler (1967) は金田一 (1950) を知らずに英語の動詞句を分類し、Vendler (1967) で行われている分類と金田一 (1950) と基本的には共通するものであることが分かった。日本語と英語だけでなく、この分類は中国語にも通用できると思う。(Vendler (1967) の中訳版では、状態 (state)、活動 (activity)、達成 (accomplishment)、到達 (achievement) というふうに分けているらしい。)

「静態存在文」で言う「人間の場所に関わる働きかけの行為(“放”、“写”、“穿”、“種”など)」、および「人間の立ち居の行為(“躺”、“蹲”など)」は、いずれも「非限界的」事象である。つまり一般動詞文の場合では、主体に意志と力さえあれば、主体の行為が続けられる。

静態存在文には「非限界的」な「継続動詞」が用いられている。現実を見て、話者は経験や常識などにより、例(20)を事象の“放两个花篮”は“放(下)了两个花篮(所以存在)。”[花かごを置いた(そのことによって存在する)。]のように「動的な動作が完結、静的な状態が含意する。」のように理解できるし、“放着两个花篮”[花かごが置いてある。]のように、「静的な状態が継続している」とも理解しうる。前者は「段階的完結」として理解できるし、後者は「段階的完結の後、持続している」として理解することができる。

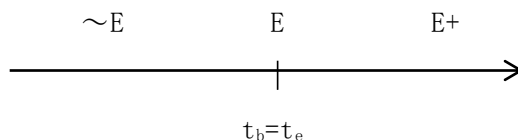
例(20)aのように、動詞の後ろに“着”を用いる場合であれば、事象の継続の局面を言う。町田健(1989:11)が言う「非完結相」(imperfective)に当てはまるであろう。次のように表示する。

[図 3-4] 町田健(1989:11)にある「非完結相」の説明図



この事象の時間的性質に対する話者の捉え方は、上掲の図のように、同じ事象E(“放一本书”、“放两个精美的花篮”)なのに、「 $\sim E$ 」と「 $E+$ 」は存在せず、しかも、Eが真である区間⁷⁴⁾の開始点と完結点である「 t_b 」、「 t_e 」も明示されない(町田 1989:11)と述べている。つまり話者は目の前の事(目の前のことを言う場合ではよく存在文で表す。よって“着字句”が一番よく見られる存在文の形式となるのであろう。)だけに注目している。

[図 3-5] 町田健(1989:11)にある「完結相」の説明図その二



例(21)bを見てみよう。動詞の後ろに“了”を用いる場合は、結果の継続する局面を言っている。町田(1989:11)が言う「完結相」(perfective)に当てはまり、[図 3-3]

⁷⁴⁾ 「動作や状態などが実現する段階の開始点と完結点が明示しない。」ということである。

のように、事象の全体を見ている。このような場合であれば、[図 3-5] のように、事象 E の開始点「 t_b 」から完結点「 t_e 」まで、全体的に見ることもありうる。

3.2.3.2 「継続動詞」「放」などと動態助詞“了”、“着”

[図 3-4] と [図 3-5] とを比較すると、両者では表現することが相当違っていることが分かる。静態存在文の場合であれば、動詞の後ろに“着”を用いると、目前の事象の継続する局面(継続する状態)で、動詞の後ろに“了”がつくと「事象」をまとめて認識し、動作が終わってから、その結果の継続する局面(結果の残存する状態)を表している。よって、実際の文では、伝わる意思の「ポイント」が違い、両者を用いる言語環境もやや異なる。

(23)= (20) a. 照片两边摆放着两个精美的花篮，下边是一块大匾，上写“鞠躬尽瘁”四个金光耀眼的大字。(《文汇报》1979-1-9)

写真の両側に綺麗に作られた花かごを二つ置いている/いた、…(筆者訳)

b. 照片两边摆放了两个精美的花篮，……(作例)

写真の両側に綺麗に作られた花かごが二つ置いてある/てあった、…(筆者訳)

(24) a. (身上)穿了件半截袖横罗旗袍，白缎子绣花便鞋，头发松松的往耳后一拢，用珍珠色大发片卡住，鬓角插了一朵白兰花。(邓友梅《那五》)

横縞生地の半袖のチャイナドレスを身にまとい、白い緞子で作った刺繍入れの布靴を履き…(筆者訳)

b. (身上)穿着件半截袖横罗旗袍、白缎子绣花便鞋……(作例)

横縞生地の半袖のチャイナドレスに、白い緞子で作った刺繍入れの布靴…(筆者訳)

(25) a. 柜台一侧，悬着一方小牌子，上面写着一位中国摄影家协会上海分会会员的名字。(《文汇报》1987-7-21)

…その上に中国撮影者協会上海支部会員の名前が書かれている/ていた。(筆者訳)

b. ……上面写了一位中国摄影家协会上海分会会员的名字。(作例)

…その上に中国撮影者協会上海支部会員の名前が書いてある/てあった。(筆者訳)

(26) a. 这天，我专程到星落村采访，一进村，见槐树底下蹲着个老头儿。(《老寿星传奇》李凤琪)

…槐の木の下に、老翁がしゃがんでいるのが見える。(筆者訳)

b. 见槐树底下蹲了个老头儿。(作例)

…槐の木の下に、しゃがんでいる老翁が見える。(筆者訳)

(27) a. 我步出门来，打算到温床里看看小苗有没有被昨夜的风雨冻坏，不料玻璃窗前已经蹲了一个人，我大吃一惊。(田作文《老师敲门来》)

…思いもかけず、誰かがもうガラス窓の前にしゃがんでいたの、びっくりした。(筆者訳)

b. ……不料玻璃窗前已经蹲着一个人……(作例)

…思いもかけず、ガラス窓の前にすでに誰かがしゃがんでいたの、びっくりした。(筆者訳)

原文の例(23)a から(27)a に倣って、例文中の“着”と“了”を入れ替えて、それぞれ例bを作例した。“着”を用いる場合は、目の前の事象の継続を直接に表しているが、“了”を用いる場合では、前の行動を見て、結果的に何かが存在していることを含意している。

3.2.4 つくりだしの静態存在文

3.2.4.1 「継続動詞」 “修” など

例(21)aのような「つくりだしの静態存在文」は、一般に“修(橋)”のような動詞を用いる。これらは金田一春彦(1950)が言う「継続動詞」に属している。「はたらきかけ静態存在文」は「非限定的」な事象を言う継続動詞であれば、「つくりだしの静態存在文」は「限定的」な事象を述べている。例(13)aにある動詞“修”は、[橋]や[テニスコート]ができたことによって、動きが完結したと判断できる。

なぜ話者によって“修着”が言える場合と言えない場合との揺れがあるのだろうか。まず、[橋]や[テニスコート]ができていない段階では、それを対象とする存在文が作れない。また、[橋]や[テニスコート]ができると、これらは恒久的施設と考えられる。第三者から見て、“有橋/网球场”[橋/テニスコートがある]のように表現するであろう。以前から“修橋网球场”[橋/テニスコートを作る]という工事をよく知っている人、または同じような工事を何度も見てきている人なら、[橋]や[テニスコート]の存在(持続)を以前にあった工事と関連させて、一つの事象として捉えられる。そういう人は“修着一座橋/一座球场”[橋/テニスコートが作られている]のように表現し、「段階的に完結」した後の継続する側面を見ている。その人が過去を振り返って、工事のことを回想する場合、“修了一座橋/网球场。”のように、工事の全過程を再現して表現する。

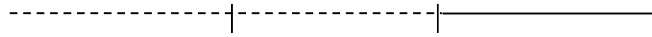
そうであれば、工事が終わったばかりの時点では、その人が工事の全過程を表するだけで十分なので、“已经修了一座橋/网球场。”[橋/テニスコートがすでに作られた。]のような文になる。時間が立ってから、橋の存在する原因と現在の状況を表したいのであれば、“修着一座橋/网球场。”[橋/テニスコートが作られてある。]のような文になる。その人が存在する原因をあまり必要な情報ではないと判断したら、恒久的な事実のように“有一座橋/网球场。”[橋/テニスコートがある。]と表現するであろう。目の前に

ある橋に向かって、土地勘のある人なら、“V着”が言える。土地勘のない第三者なら“有”を使うのが一般的である。

上記の[図 3-4]に倣って[図 3-6]を作り、“V着”を使う場合の注意点を説明してみる。

[図 3-6] 「完結相」の「結果の継続」の説明図

E+



日本語では(町田健 1989:42)が継続動詞について「この種の動詞は一般に他動詞で、目的語をとるから、その目的語の指示する対象が発話時点においてとる状態が知覚可能である場合が多い。従って『テイル』形で『結果の継続』を意味することができる。」と述べている。

中国語にも同じような言語現象がある。例えば、「つくりだしの静態存在文」と同様、“着”を用いる場合、動作の完結後は継続している局面(E+)だけに、話者は注目している。[図 3-6]は「~E」と「E」も、いずれも前の動作の「t_b」と「t_e」に注目していない。

(28)=(21)a. 广安虽然土气, 但它的军阀可一点也不土气。在这所公馆里居然还修了一个网球场。(《我的父亲邓小平》)

广安は鄙びたところだが、軍閥は全てもってハイカラだったのだ。公館には、なんとテニスコートまであった。(『わが父・鄧小平』)

b. ……在这所公馆里居然还修着一个网球场。(作例)

…テニスコートまで作ってあった/てある。(筆者訳)

(29) 海滨有洁白平整的沙滩, 沙滩上搭着一座座茅草凉棚, 供游客们乘凉、歇息。(《中国和巴哈马互免签证协定将于2月12日生效》人民网 2014-1/26)

…砂浜に茅葺きの掛け小屋がかけられていった/あった…。(“搭凉棚”は砂浜で行う行為として一般的に考えられているが、そのまま「掛け小屋」を砂浜に運んでいくこととしても理解しうる。そうであれば「静態存在文」として分析する方が妥当であろう。)

b. ……沙滩上搭了一座座茅草凉棚……(作例)

…砂浜に茅葺きの掛け小屋がかけられている/あった…(筆者訳)

(30) a. 随着宝钢建设的发展, 吴淞区新建了友谊、月浦、马泾桥、盛桥等居民生活区, 市区有四万多人迁居那里。(《解放日报》1983-11/24)

…吳淞区には友誼、月浦、馬涇橋、盛橋などの住宅地(居住地)が新たに建てられた/ていた…(筆者訳)

b. *……吴淞区新建着友谊、月浦、马泾桥、盛桥等居民生活区……(作例)

*……吴淞区には着友谊、月浦、馬涇橋、盛橋などの住宅地(居住地)が新たに建てられている…(筆者訳)

(31) 况且那六重坡的山窝，三年前就修了个大水库，几户姓李的社员，全迁到别队去了。(姜之虎《夜渡》)

…三年ほど前に、ダムが(すでに)作られた/ていた…(作例)

?……三年前就修着个大水库……(筆者訳)

?…三年ほど前に、ダムが(すでに)作られている/ていた。(筆者訳)

例(28)(29)の動態助詞の“了”と“着”は入れ替えても、基本的な意味は変わらない。上掲のように、動詞の後ろの“了”は動作によって結果的な存在の意味も含まれる。それに対して、“着”は直接ものが存在していることを表す。ただし、文構造としてよく似ている文であっても、例(30)(31)は、“了”と“着”を入れ替えることができない。文中に“随着……新建”、“三年前就”があるため、動作を描写する文にしか読み取れないからである。

3.2.4.2 破損着の「継続動詞」

例(32)と(33)は、譚景春(1996)の言う“破損义存在句”「破損義存在文」である。“碰缺”と“一角”は動作と受事客語の関係であり、「つくりだしの静態存在文」であるが、“碰缺”などの動詞は、金田一春彦(1950)が言う「瞬間動詞」として捉える。

町田健(1989:48)は、瞬間動詞について「瞬間動詞には持続時間がないから、『テイル』を付けて、発話時点において、それが示す事象が継続していることを示すことができない。」と述べている。一方、「反復することの容易な行為を意味する動詞の場合は、その一連の反復を一つの事象としてとらえることは可能である…『テイル』形で反復された事象の継続を示すことができる。」と述べている。もう一方で瞬間動詞の特徴を捉え、「多くの瞬間動詞は、そもそもその結果によってその事象が真であることが知覚されるのであるから、当然結果が残る。『テイル』を伴うと、結果の継続を示すことになる場合が多い。」と述べている。

“破損意存在句”は、二番目の「もう一方」に当てはまるはずだが、日本語と違って中国語では“着”を用いる場合(例32)もあれば、“了”を用いる場合(例33)もある。例(32)が「傷口がある」ことを表しているが、例(33)をあえて単純存在文に直すと“有一个角”ではなく、“没(了)一个角”になる。このような文は多分モノの「有無」に関心を払っているのであろう。この問題も単純存在文と一緒に次回の研究に譲る。

(32) 被几个人扯住不放的那两只手，裂着许多小口子，往外边渗着血珠子。《金光大道》

何人にもつかまれている両手にいくつも小さな傷口があいて、血がにじんでいる。『輝ける道』

(33) 王舜连忙抬起一看，传国玺已摔缺了一角。(张江华《千古疑案 传国玺失踪之谜》)

…(床に落ちて、)传国玺の一部分が(碎けて)なくなった。(筆者訳)

上記の例文からみれば、つくりだしの静態存在文と同じく、はたらきかけの存在文も静的な「存在」を表している。静態存在文は「非限界的」な事象によるものモノの存在を表している。それに対して、完成体は「限界的」な事象によるモノの存在を表している。

3.2.5 動態存在文

3.2.5.1 動態存在文に用いられる動詞

動態存在文は、例(21)aのような文であれば、よくVの位置に“跑(一匹马)”などの「継続動詞」“跑”、および“闪烁(光芒)”(例39)のような「瞬間動詞」“闪烁”が用いられている。

(34) a. 这一次满天飞着那种巨鹰。(吴岩《日出》)

今回は、大空にあのとても大きな鷹が飛んでいる。(筆者訳)

b. *满天飞了那种巨鹰。(作例)

*今回、大空に巨大な鷹が飛んだ。(筆者訳)

(35) a. 王宽没有叫醒他，自己一个人从舵楼里跳出来，天空还飘着小清雪，棉胶鞋踩在薄薄的积雪上，发出吱嘎的声响。(梁国伟《金矿的雪夜》)

…空に小雪が舞っている…(筆者訳)

b. *……天空还飘了小清雪……(作例)

*…空に小雪が舞った…(筆者訳)

(36) a. 大树底下走着一个人。(宋玉柱 2007:50)

大きな木の下で誰かが一人で歩いている/ていた(筆者訳)

b. 大树底下走了一个人。(作例)

大きな木の下から誰かが一人去った。(筆者訳)

(37) a. 格列科在画面上主要使用金色和黑、黄、深兰几种色调，整个画面弥漫着一种严肃、安谧而抒情的神秘气氛。(赵海江《文艺复兴时期的艺术大师》)

…画面には厳かで、静穏で、抒情的で神秘的な雰囲気漂っている。(直訳)

…全体から見ると、厳かで、静音で、抒情的で神秘的な感じを人に与えている/いた。(意訳)

b. *……整个画面弥漫了一种严肃、安谧而抒情的神秘气氛。(作例)

*…画面には厳かで、静穏で、抒情的で神秘的な雰囲気が漂っていた。(筆者訳)

(38) a. 奇怪的是，火堆仍燃着小火，附近却没有人。(奚青《天涯孤旅》)

不思議なことに、たき火がまだ少し燃えていたが、周りには人がいない。(筆者訳)

b. *……火堆仍燃了小火……(作例)

*…たき火がまだ少し燃えた…(筆者訳)

(39) a. 静静的湖泊，绿色的小岛，风平浪静的时候，阳光灿烂，安静，舒适，可以在甲板上唱歌，睡觉……最北的拉不拉多海，真漂亮，一个个冰山从海面飘过来，晶莹剔透，靠近海面的地方，闪烁着蓝光，被海浪冲刷成海蚀穴；高纬的海空，极光帷幕般地垂落下来……风暴到来时，铅灰色的云，黑色的海岸，白浪滔滔……自然界有粗犷的美，大海有变幻的美。(《中国青年报》1985-4-17)

…(冰山のある)海面に近いところで、青い光がきらきら光っている。あれは波の侵食によりできた海蝕洞である。(筆者訳)

a.*……闪烁了蓝光……(作例)

*…青い光がきらきら光った…(筆者訳)

原文の例(34)a から(39)a に対応して、“了”を用いる例(34)b から(39)b は非文である。文中の動詞連語が「非限界的」な事象を表しているからである。

3.2.5.2 動態存在文に用いる「継続動詞」

例(34)a から(38)a のなかには「非限界的」な「継続動詞」が用いられている。動態存在文が表している事象はまた「はたらきかけ、つくりだしの静態存在文」と違って、後者の対象がVの客体であれば、動態存在文の対象は主体である。客体は動作が完結した後に、持続の状態で認識されるが、主体は運動がないと、認識できないし、存在文を作ることもしない。よって、例(27)a から(31)a のなかの“V着”は「結果の持続」ではなく、「動作の進行」を意味している。

各原文の a に対応させて作った b は非文になる。たとえば例(34)では、“飞了”は動作の完結を意味する⁷⁵⁾。そうであるならば、表している事象は“鸟飞了”になる。

「鳥が飛んでしまって」結果的に「いなくなる」意味になる。前の場所 NP_Lが場所ではなく、もし「鳥の群れ」、「鳥かご」などであれば、消失文になりうる。

「消失文」も「単純存在文」と同様は他の研究に委ねる。

3.2.5.3 動態存在文に用いられる「瞬間動詞」

動態存在文に用いられる例(39)のVのところに、“闪烁(光)”のような「瞬間動詞」を用いる場合もある。「3.2.4.2」に引用した一つ目の「一方」に当てはまる。つまり“闪烁(光)”のような「反復しやすい」と認識される事象に“着”がつくと、日本語

⁷⁵⁾ “汉语谓词的光杆形式倾向于表达客观上已经确立起来的这一情况”(杉村 2009)なので、ここの“飞了”は全体の完結として理解している。“飞起”とか“飞”の内部の「段階的な完結」として理解し難い。動的動作と静的状態療法の切り替えがないのが原因であろう。

の「テイル」の形と同様、「反復された事象の継続を示す」ように扱っていいだろう。これらは、「3.2.5.1」にある「継続動詞」と同じ特徴を持っているので、上掲の分析を参考にしてもらいたい。

3.2.6 おわりに

“V+着/了+NP”に焦点を当てる連語論の観点をういた本節での存在文の分析により、以下の2点が明らかになった。

i. “着”、“了”を用いる存在文（例 20a. 20b）はすでに実現しているリアルな現実を陳述する文であるため、動態助詞の“着”、“了”は一般に言う完成度を表しているのではなく、話し手が存在（継続）する局面と「V」が意味する動作状態との前後関係を表している。

ii. 動詞の「継続動詞」（例 21a. 21b）、「状態動詞」（例 38）、「瞬間動詞」（例 39）（本節の対象から外している出現消失文によく出る）の種類の違いと動詞連語の意味する事象が「限界的」（例 31）か「非限界的」（例 34）かの区別により、“着”、“了”が表している内容が異なる。

第3節 静態存在文に用いられる“着”、“了”

—語用と構造から—

3.3.1 はじめに

存在文研究を代表する宋玉柱（2007）は、存在文に関する以下のような例文を挙げている。

(40) 坟上^{種着}一排小杉树。(宋玉柱 2007:28)

墓には、若い杉の木が^{一列植えられている}。(筆者訳)

(41) 坟上^{种了}一排小杉树。(宋玉柱 2007:28)

墓には、若い杉の木が^{一列植えられた}。(筆者訳)

宋玉柱（2007:28）は、例（40）は“着眼于眼前状态的描写”「眼前の状態の描写」であり、例（41）は“眼前情况变化的描述”「眼前の新たな変化の描写」であると指摘している。たとえば、「土地勘」のない旅人に状況を紹介する場合であれば、例（40）の文を使うが、故郷に帰ってきた「土地勘」のある人に、「新たに植えられた木がある」という変化を紹介する場合、例（41）の文を使うであろう、ということである。同じ「杉の木」に対しても、話し手の認識によって、動態助詞“着”、“了”の使い分けをするのである。

例（40）と（41）から、動態助詞の“着”、“了”は、互換可能であることが分かる。両者が互換可能なのは静態存在文に限ると言われている（聂文龙 1989）。例（40）、（41）はいずれも墓に杉の木があるという場面を描写している。しかし、例（40）は視覚的なイメージを直接的に陳述しているのに対して、例（41）は動き“種”をまとめて、「植えられたばかり」のような経験を表し、「杉の木」の存在は含意的な情報となっている。例（41）の「植えられたばかりの杉の木」と比べると、例（40）の場合は「植えられた」時期が不明で、「杉の木」が存在している時間がより長いと解釈できる。本節のタイトルにもなっている「長」と「短」というのは、存在する時間の「長さ」を表している。“着”と“了”は、相対的に動作が完了した時点から時間の長短を表す「長」（長い時間が立っている）、「短」（成立したばかり）という概念をもって規定できることが考えられる。

本節は語用論と統語論の角度から、例（40）、（41）のような存在文にしかない時間の「長」と「短」の関係について研究する。

3.3.2 語用論における「長」と「短」

宋玉柱（2007）の挙げる例文を比較して見れば、動態助詞の“着”“了”の違いにより、確かに時間上の違いがあるが、実際の言語環境においては、このような違いが

出るかどうかを確かめるため、“種着”と“种了”で検索を掛けて見ると、100 例ずつの例文が集められた。

(42) 所有的街道两旁都**种着**树、草、花，每幢房子的屋顶都**种着**草，看上去，成了一座绿色的城市。（《小灵通再游未来》叶永烈）

すべての道の両側に木や草や花などが植えられ、建物の屋上にさえも草が植えられている。遠くからは、緑の町のように見える。（筆者訳）

(43) 去年，我初到南京，就发现多条马路两旁，几乎都**种了**法国梧桐，树杈都伸过来，互相搭接在一起，形成了宽阔的天棚。（解放日报社 1982-6-23）

去年、初めて南京に行った時、両側にプラタナスの木が植えられていた道路がたくさんあることに気づいた。そのほとんどがプラタナスで、木の枝が全部道路側に向かって伸び、両側の木の枝が重なって、広い天井のようになっていた。（筆者訳）

例（42）は、おとぎ話に出る主人公が未来を訪ねる時の見聞を描写している。その世界にある草や木や花などと遭遇する時の場面をそのまま叙述している。主人公が「未来の緑の町」を訪ねて行くおとぎ話で、未知の世界にある草木について、植える人や時間などについては分かっていない、「主人公と同じく、聞き手にとって、この世界の草木は全く未知（初対面）なものだ」と判断し、話し手が“種着”を用いて、客観的に述べている。

例（43）は、著者は“法国梧桐”が植えられた様子を描写している。文の最初に“去年，我初到南京”と紹介したが、「植える人や時間などについて、すべて知っている」ので、“种了法国梧桐”と動態助詞“了”を用いている。資料を調べたところ、1980年ごろ南京の緑化率が史上最高になったことで、政府が大いに宣伝している。このような時代の背景があるので、話し手と聞き手の双方にとって、「プラタナスの木」は「既知の情報」である。話し手が“种了”を使ったのは偶然ではないと判断できる。

このように、話し手と聞き手の双方にとって、客語であるモノが「既知か未知か」について、実例を整理してみれば、以下の傾向が見られる。

[表 3-3] モノの既知および未知について

	…种着…		…种了…
	既知	未知	既知
話し手	既知	未知	既知
聞き手	未知	未知	既知

上田裕（2012:81）は「存在情報はあらゆる情報の中で最も基本的な情報である。」と述べている。この観点に従えば、存在情報は場所とモノに焦点をあて、把握できるであろう。

話し手はモノについて「既知か、未知か」に関わらず、聞き手にとって「未知だ」と判断すれば、場面の叙述をする“種着”を使って、基本的な情報だけを伝達する。話し手と聞き手双方がモノについて存在情報以上の共通の認識を持っている場合、つまり「既知」であれば、“種了”を使って、話し手の経験を表す。聞き手が詳しく知っている想定し、話し手自身が「未知」である場合、疑問文を使って尋ねるケースもある。

“種樹”[木を植える]のような現象を見れば、すぐに反応できるため、“有樹”ではなく、“種樹”と言うであろう。事件の種類が既知情報である以上、“種着”と“種了”を比較すると、“種了”の方の情報量が豊富である。“種了”が“種着”より多い情報は事件の完成時期と仕手である。存在を報告するには、仕手の情報はあまり重視されていないと思われるが、事件の実現する時期は存在する時間の長さとは直接関係しているため、完成度の情報までを報告した“種了”は、事件の種類だけを報告する“種着”より、遥かに具体的で、存在時間が「長くない」感じが出る。具体的に表現できない場合であれば、「長い」感じが出る。

なぜ“種着”、“種了”は上掲のような語用論的意味が出てくるのかについて、統語論の角度から存在文における“V着”、“V了”の用法を検討してみよう。

3.3.3 構造から見る存在文の“V着”、“V了”

先行研究によれば、上記に述べるように、静態存在文に限って“V着”、“V了”は互換が可能であると言われている。静態存在文に用いられる述部では、いずれも「付着（とりつけ）」という意味特徴が内在している（王学群 2007:208）。この一類の出来事の現れる段階から見れば動きが終了した時点から、ものが出現、存在する特質がある。

日本語は異なる格助詞、動詞の形態変化を使って動きが終了したか否かを判断できるが、中国語では語順を利用している（動態助詞の“了”、“着”ではないと考えている）。よって中国語の動作を言う文と状態を言う文（存在文）との一番大きな違いは語順である。連語の種類に状態を意味する語順、そしてアスペクトマーカの“着”、“了”はお互いに影響しあっている。連語の種類については、確かに王学群（2007:208）の指摘するように「付着（とりつけ）」という意味特徴が内在している。本節では文構造とアスペクトマーカの役割について分析してみる。

3.3.3.1 “種樹”の“種”が表す動作の側面について

ここで、“種樹”の“種”が表せる動作の側面を考えてみよう。本章の第1節で分析したように、存在文そして“在字句”の語順は「実現」の意味を持つ。「実現」とは動作・行為の「完成」とは異なる概念であり、出来事がある段階を終えて、次の段階

の静的または動的な（存在）状態を示すことである。本節の場合、“種”という動作が「実現」というのは、“種樹”の「動的な側面」が完結し、出来事が「静的な側面」に発展するということを意味する。

次の〔表 3-4〕に示すように、“種樹”の側面はグラフの左側にある時間の前後関係によって3つに分けられる。右側にあるのは動作の各側面と対応している出来事の段階である。

〔表 3-4〕 動作の側面と出来事の段階

動作の側面	出来事の段階
<p>① <u>実行の側面</u>——某人+種樹（植えているところ）</p> <p>i 他 正在山上 种 杉树。 彼は 山で 杉の木を 植えている。</p>	} 動的な段階
<p>② <u>完了の側面</u>——某人+种了树（木を植えた）</p> <p>ii 在山上 他 种了 杉树。（文末の“了”もありうる） 山で 彼は 杉の木を植えた。 <u>某处+种了树（木が植えられた）</u></p>	
<p>iii 山上 种了 杉树。（文末の“了”もありうる） 山に 杉の木 が植えられた。</p>	} 静的な段階
<p>③ <u>結果が持続する側面</u>——某处+种着树（木が植えられている）</p> <p>iv 山上 种着 杉树。 山に 杉の木が 植えられている。</p>	

動作の「実行する側面」では、必ず仕手が文中に出てくる。場所名詞は動作を行う場所であると同時に、動作が実現した後で、モノが存在する場所でもある。この場合一般的に動詞述語文を使うのは、話し手が出来事の「動的な段階」に注目しているからである。

動作の「完了の側面」は人によって異なる。例 ii のように動作を叙述する場合もあれば、例 iii のように状態を述べる場合もある。例 ii のような動作を叙述する場合であれば、話し手は出来事の「動的な段階」に注目している。例 iii のように状態を述べる場合であれば、モノが意味上の主語で、話し手は出来事の「静的な段階」に注目している。

「木を植える」を例として、日本語では、「動的な段階」を表す場合に「植えている」の形を用いる。「静的な段階」では「植えられている」、「植えてある」などであり、状態を描写している。日本語では動詞の変化で出来事の段階が伝えられる。それに対して、中国語ではいずれの段階も“种树”を使って表現する(述語“种”と客語“树”が同じであるが、連語の構造は異なる)。

3.3.3.2 動態助詞“了”、“着”

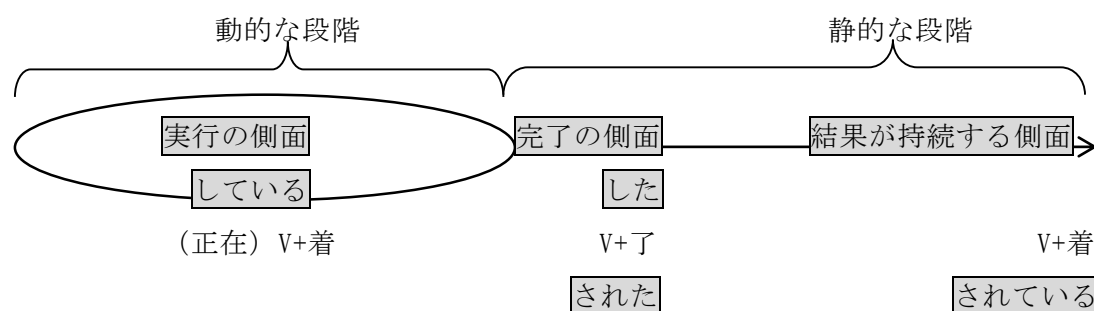
一般的な考え方では、“V 了”を完成相とすれば、“V 着”はその対立としての持続相である⁷⁶⁾。このような考え方は直接英語、日本語研究のテンスとアスペクト理論の延長線上にあると思われる。

讚井唯允(2002:74)は、「中国語のアスペクト(“了”、“着”、“过”)はそもそもコムリー(1988)の言うような二項対立ではなく、三項鼎立である」と述べている。「動態助詞“了”は「動作・状態の発生する局面」を特に強調する場合にのみ使われ、発生したのち持続するか、完結するかについては、何も積極的に主張することはない。文脈によって、動作の持続を含意することもあるれば、動作の完結を含意することもありうる。“着”は「動作・状態が発生し、一定時間持続する局面」を積極的に主張し、それが既に完結しているかについては常に文脈に左右されるのである」ということになる。

讚井(2002)の学説を単純化すると「“着”は持続のマーカーで、“了”は変化のマーカーである」と理解しうる。本節では「動的な段階」と「静的な段階」のように分けて分析してみる。

「動的な段階」では、“(正在)种树”[木を植えている]は動作を実行する側面を表している。“种了树”[木を植えた]は完了の側面を表している。人によっては、“种了树”[木が植えられた]のように、「動的な段階」をまとめて、「静的な段階」の起点として捉えている場合もある。そうすると、“种着树”[木が植えられている]のように、結果が持続する側面を表している。

【図 3-7】「動的な段階」と「静的な段階」について



⁷⁶⁾ 奥田靖雄『ことばの研究・序説』(1984:105~143)、胡裕树ら《动词研究》(1995:41-110)、戴耀晶《现代汉语时体系统研究》(1997:33-93)、王学群『現代中国語の“V着”と“V了”について』(2002:95)では、このように考えられている。

本稿の第三章の第一節「存在文の語順」で分析したように、存在文の構造について「出来事は静的な段階に入った(実現)」話者の認識を表明したのであり、「着」又は“了”はいずれも「静的」な意味を表している。出来事の発展から見れば、完了してから、結果状態が続く。中国語も同じように、完了を表す“V了”「された」が先にある。その後結果状態を表す“V着”「されている」がある。

“种了树”と言う場合、話し手は「動的な段階」をまとめて、経験として考えているのであろう。話し手は動きの終了を言っている。発話時点からすると、動きはつい先ほど行われ、終わったのであり、モノの存在する時間も長くない。“种着树”と言う場合では、「動的な段階」を全く見ていなく、「静的な段階」ばかり見ているので、原因となる動きはより遠い過去の時点に行われて、モノの存在する時間が短くないように捉えられる。統語論角度からの文の分析と、語用論角度からの「既知・未知」の条件の分析が結果的に合致している。

3.3.4 おわりに

存在文の場合では、“种了树”は話し手が現在「目の前のモノの存在状況」だけでなく、その以前の「モノに関わる動作」も含まれることを表している。それに対して、“种着树”は単に現在「目の前のモノの存在」を陳述している。その以前の「モノに関わる動作」については何も主張していないので、モノが存在する場所の一部分として、ずっと存在しているように解釈されやすい。両者を同一時間点に限定する場合であれば、“种着树”は“种了树”より、“树”が植えられてから、存在する時間が「長い」と言えるであろう。

“种(树)”の他に、静態存在文(李临定 1993)によく用いられる動詞、たとえば、モノを場所に附着する動作を意味する“放(书)”、“贴(窗花)”、モノを創造する動作を意味する“修(桥)”、“建(住宅区)”、有情物の体の動作を意味する“蹲”、“趴”、有情物の状態を意味する“生活”、“长”などは、いずれも「動的な段階」と「静的段階」に分けて考えられる。“了”と“着”の区別により、時間の長さを表す「長」と「短」の違いが出てくる。

第4節 動態存在文に用いられる動態助詞について

3.4.1 はじめに

以下の文は、ある空間で客体が動的な運動をしているので、一般的に「動態存在文」と呼ばれる。

(44) 草原上奔驰着一群骏马。(李临定 1993:335)

草原には駿馬の群れが疾駆しています。(李临定 1993:335)

(45) 空中飘着雪花。(李临定 1993:335)

空に雪がひらひらと舞っています。(李临定 1993:335)

(46) 夕阳中摇曳着羽毛草。(宋玉柱 2007:55)

夕焼けの中でハブソウがゆらゆらと揺れています。(筆者訳)

(47) 草原上弥漫着晨雾。(宋玉柱 2007:56)

草原では朝霧が立ち込めています。(筆者訳)

例(44)(45)の訳文中の[草原には][空に]は、[草原にはテントがたくさん張ってある。][空に雲が浮かんでいる。]のように客体の静止状態を表す場合に用いる。客体が動的な運動をしているばあいであれば、デ格で訳す「草原では」「空では」のほうが適訳と言えるであろう。

上記の文はVPが常に“V+着”である点から、動態存在文はまた“动态‘着’字句”「動態“着”字文」とも呼ばれる。以下のような置き換えが可能な場合もある。

(48) 不同的只是书架之间散发着一股阴湿的霉味，像外婆家的蚕房。(《隐形伴侣》张抗抗)

異なっているのは本棚の隙間に湿っぽいカビの臭いがすることだけです。その臭いは外祖母の家の蚕部屋のとそっくりです。(筆者訳)

→……书架之间散发 ∅ 一股阴湿的霉味…… (作例)

→……书架之间散发出 ∅ 一股阴湿的霉味…… (作例)

→……书架之间散发出了 ∅ 一股阴湿的霉味…… (作例)

しかし、例(48)のような文では、“V+着”を“V+∅”、“V+出+∅/了”に置き換えても、モノの存在を表す意味は変わらない。本節では“着”が置き換えられる幾つかの状況について分析する。また、動態助詞が置き換えられる前後のモダリティの意味についても検討する。(本節の“∅”は動態助詞を用いないことを意味する。)

3.4.2 動態存在文の“着”と“了”についての先行研究

存在文に用いられる動態助詞の“着”と“了”について、宋玉柱は以下のように説明している。

(动态存在句) 句中の VP 都表示正在进行的行为, 其中“着”不表示动作产生的状态, 而表示正在进行的状态。这就是进行体动态存在句, 或者叫动态“着”字句。它与静态存在句中的“着”字句虽然形式相似, 但两者表示的语法意义不同, 应属于存在句中的两种不同句式。

(宋玉柱 2007:50)

扩散类动态“着”字句存在主体呈放射状或弥漫状。所形成的存在系列没有“消失”的环节, 只有出现环节, 但它的“出现”环节和“存在”环节都呈动态, 而几乎分不出时间和空间的界限, “出现”即“存在”这类存在句与相应的隐现句语义基本相同, 两种句式互换之后很难说出语义上有什么变化。例如

草原上弥漫起晨雾→草原上弥漫着晨雾

眼睛里闪出恶魔似的光→眼睛里闪着恶魔似的光

(宋玉柱 2007:56)

宋玉柱は存在文について、構造と意味の面から分析している。宋玉柱によれば、存在文には動態存在文と静態存在文とがある。両者はともに“名_処+V 着+名_物”の構造で組み立てられている。しかし、文中の「動詞+“着”」は、それぞれ「(動作・行為の)進行」(動態)と「(結果の)状態・方式」(静態)とを意味している。宋玉柱により、存在文研究が新たな段階を迎えたと言えるであろう。

宋玉柱はまた動態存在文のなかの「拡散」を意味する場合“草原上弥漫着晨雾。”[草原では朝霧が立ちこめている。]“眼睛里闪着恶魔似的光”[眼では悪魔のような光が放たれている。]であれば、動詞には「消失の段階」がないばかりか、「出現」即ち「存在」の意味合いもあるため、動態助詞“着”を用いずに“起”、“出”と共起して、「出現」を表すこともできる、と指摘して例文“草原上弥漫起晨雾。”[草原では朝霧が立ちこめている。]“眼睛里闪出恶魔似的光。”[眼では悪魔のような光が放たれている。]も挙げている。

3.4.3 “着”が置き換えられる場合

宋玉柱(2007)では、動態存在文の述語は“无界动词+着”を用いていると指摘している。宋玉柱は、それを“进行体动态存在句”「進行体動態存在文」と名付け、“动态‘着’字句”「動態“着”字文」と呼ぶ場合もある、と述べている。宋玉柱では、「進行体動態存在文」であれば、述語の後ろの動態を表す動態助詞“着”を必須成分として考えているのである。

宋玉柱などの先行研究では、動態存在文は述語動詞の後ろに動態助詞“着”を用いるのが一般的であると指摘しているが、動態助詞“着”を“了”に置き換えたり、省略したりすることについての検討がなされていなかった。

しかしながら、述語が無情物の動作と状態を意味する動詞を用いる場合(例 48、49、50)であれば、述語動詞の後ろは動態助詞“着”ではなくても、動態助詞のない場合“散发一股霉味”(例 48)、または動態助詞“了”の場合“洒满了蓝幽幽的月光”(例 49)、“笼罩了一层浓雾”(例 50)であっても原文との意味合いの差はほとんどみられない、と言えるであろう。

(49) 大海满潮了，没有风，也没有吓人的涛吼，岛上洒满蓝幽幽的月光。(《太平洋上》金同悌)

満潮になると、風がなく、吠えているようなうねりくる大波もない。島にはこぼれ落ちるようなかすかな青い月光がさしています。(筆者訳)

…岛上洒满蓝幽幽的月光。→岛上洒满了蓝幽幽的月光。

(50) 清晨，大海上笼罩着一层浓雾，舰艇与舰艇都看不见了。(《海上看青岛》韩希梁)

夜明け、海面は濃い朝霧に覆われ、軍艦と軍艦は互いに全く見えなくなっていました。(筆者訳)

…大海上笼罩着一层浓雾…→大海上笼罩了一层浓雾。

「はじめに」にある例(48)の“散发着”は状態の「持続」を表しているに対して、動態助詞のいない“散发 \emptyset ”では“散发”の状態を表している。動態助詞“着”を用いる場合は場面を描写しているが、動態助詞のない場合は状況の判断を表しているのであろう。“散发出(了)”は無情物の動作(変化)の「実現」と「完了」に焦点を当てている。

例(49)の“岛上洒满蓝幽幽的月光。”の場合、動態助詞“着”を用いることができず、補語の“满”は動作の量的程度を示し、程度の限界を伝えている。その場合動態助詞“了”を用いると、上記と同じように“洒满了”は動作(変化)の「実現」と「完了」に焦点を当てているのである。

例(50)の“大海上笼罩着一层浓雾。”は“笼罩 \emptyset ”、“笼罩满 \emptyset ”、“笼罩满了”に置き換えるのも可能であり、その理由も上記と同じである。

3.4.4 おわりに

先行研究では動態存在文の文中に用いる動態助詞は、必ず“着”であるように考えられているが、しかし、言語事実としては、例(48)のような他の成分を用いる場合や動態助詞を省く場合もある。

本稿の第二章第3節の動態存在文についての分析では、動態存在文で表す出来事を「空間的な移動」「無情物の繰り返し」「無情物の放射・膨張」の3つにまとめたが、そのうち、本節で反例として挙げる例(48)(49)(50)は、いずれも「無情物の放射・膨

張」のような出来事であり、動的な存在を表す動態存在文である。その他の「空間的な移動」「無情物の繰り返し」の出来事を叙述する動態存在文の文中であれば、動態助詞“着”しか用いることができない。

第5節 動態助詞が“过”の場合

3.5.1 はじめに

以下に挙げる例(51)、(52)は一般に存在文として捉えられ、動態助詞“了”と“着”を交換しても存在を表す意味機能はほとんど変わらない。例(51)のような文は“了字句”⁷⁷⁾「“了”構文」、例(52)のような文は“着字句”「“着”構文」と言われている(宋玉柱 2007)。“着字句”と“了字句”を合わせると、李临定(1993)のいう“静态存在句”「静态存在文」に相当する。

一般的には例(53)のような動態助詞“过”を用いる文は存在文として扱われていないが、宋玉柱(2007)では例(53)のような文も存在文としてとらえ、“经历体存在句”「経験体存在文」と言っている。本稿では例(53)のような文を“过字句”「“过”構文」と呼び、存在文の一種と見なす。この観点に立てば、動態助詞“了”・“着”・“过”はいずれも存在文のなかに使えることになる。

(51) 坟上种了一排小杉树。(宋玉柱 2007:28)

墓には、小さな杉の木が一行植えられた。(筆者訳)

(52) 坟上种着一排小杉树。(宋玉柱 2007:28)

墓には、小さな杉の木が一行植えられている。(筆者訳)

(53) 坟上种过一排小杉树。(作例)

墓には、(かつて)小さな杉の木が一行植えられてあった。(筆者訳)

例(51)(52)の文意は「存在」を表しているが、一般的に例(53)のような“过字句”は「消失」を表し、[ある時期には存在していたが、現在は存在していない。]という意味を表している。しかし、すべての“过字句”が「消失」を意味しているわけではなく、一定の条件を満たしていれば、今でも[存在している。]ことを表す“过字句”もある。

(54) 班里的黑板上写过这样一段文字。(作例)

クラスの黒板に、(かつて)このような話を書いてあった。(筆者訳)

(55) 他的日记里写过这样一段文字。(作例)

彼の日記に、このような話を書いてあった。(筆者訳)

例(54)と(55)は消失・存在の意味から見た典型的な文であろう。例(54)は、黒板に[現在、話がない。]と解釈されるのに対して、例(55)は彼の日記のなかに[現在、話がまだある。]と一般的に解釈されやすい。2つの例文中の行為[書く]はすでに完結したと言える。しかし[書いた後]の状態は、例(54)の場合はすでに完結(消失)しているが、例(55)はまだ完結(消失)していない。

⁷⁷⁾ 静态存在文“NP_L+VP+NP”の“VP”が“V+着”である場合、“着字句”と名付ける(宋玉柱 2007:21)。“VP”が“V+了”である場合では“了字句”と名付ける(宋玉柱 2007:27)。

本節では、“过字句”と存在文との関係进行分析する上で、例(54)のような[過去に存在していたが、現在は存在しない。]を意味する“过字句”(略して「過去の“过字句”」)と例(55)の[現在も存在している。]を意味する“过字句”(略して「現在の“过字句”」)を比較検討する。

3.5.2 “过字句”についての先行研究

3.5.2.1 動態助詞“过”と存在文

存在文であれば、“着字句”“了字句”と比べ、動態助詞が“过”である場合は極めて少ない⁷⁸⁾。一般的に、動態助詞が“过”である文は存在文として考えられていないからである。

宋玉柱(2007)は“过”を用いる存在文を“经历体存在句”と名付け、以下のように指摘している。

我们经过长时间的调查,发现VP为“V+过”的存在句是有的,虽然不是很多。这种存在句我们称做“经历体存在句”。(宋玉柱 2007:30)

经历体存在句的最突出特点表现在Vp上,即这种句式的Vp都是“V+过”,其中动词表示存在方式,“过”表示这种方式曾经有过,也表示一种经历。动词前面有时可以出现副词,最常见的是“曾经”、“未曾”这类表示经历的时间副词。总之这种句式中的Vp整体上表示一种经历体的存在方式。

能进入这种句式的动词都是表示静止状态的,其中有非动作动词,如“有”“住”,也有动作动词的静态用法,如“贴”“挂”。这一点与“着字句”完全相同。(宋玉柱 2007:30)

经历体存在句与“着”字句有着十分密切的关系。如果不计其时态意义,两种句式中的“过”和“着”完全可以自由替换我感到,经历体存在句实际上是“着”字句的一种过去时的表现方式。他是从现在追怀过去曾经有过的存在方式的一种句式。(宋玉柱 2007:35)

上掲のように、動態助詞“过”を用いる場合、普通は過去に経験した「存在」の出来事を陳述している。

3.5.2.2 動態助詞“过”

一般的なことを言えば、動態助詞“过”は[「かつてあることをしたことがある。」ことを表し、過去に経験したことを表す場合にしか用いられない。形容詞の後ろに用いられると、ふつう過去と現在を比較するという意味を含む。]と劉月華(1999:321)は指摘している。

⁷⁸⁾ 范方莲先生说：“B段动词只能加‘着’，表示状态的持续；不能加“过”，也不能加表示完成态的‘了’。”（《存在句》《中国语文》1963年 第5期）ここにある“B段动词”は述語動詞のことである。

讚井唯允(2002)によると、“过”は〔動作・状態が発生し、現在とは切り離された過去においてすでに完結している局面を特に強調する〕場合にのみ使われる、ということである。

(56) 这儿 以前 有过 一座大楼。(讚井唯允 2002:76)

ここ 以前 あった 一つのビルが (同上)

ここには以前ビルがひとつあった。(同上)

この場合には、〔ここにはかつてビルがあったが、今はない。〕ことを含意する表現になっている。この解釈は、“过”が現在と切り離された過去を積極的に主張する文法的意味に基づくものである。(讚井 2002:76)

(57) 王明 来过 电话。(讚井 2002:76)

王明 よこした 電話を (同上)

王明さんから電話がありましたよ。(同上)

この場合にも過去において〔電話があったけれども、今はすでに切れている。〕ことを含意する。この含意も、その文法的意味によって生じると解釈ができる。(讚井 2002:77)

例(56)と(57)の場合であれば、それぞれの“过”は、“有过”はかつての客体の状態、“来过”は客体の動作がかつてあったが、それがすでに完結している局面を表している。

3.5.3 過去の“过字句”

“过”については、先行研究で述べる通り、例(54)のような“过字句”がほとんどであり、「ある→ない」という前後の区別を表している。

(58) a. 他脖子上长过火疖子。(宋玉柱 2007:30)

彼の首にできものがあった。(筆者訳)

b. 他脖子上长了/着火疖子。(作例)

彼の首にできものができている。(筆者訳)

(59) a. 它让我想起，这里挂过一把小吉他。(宋玉柱 2007:30)

これを見ると、ここにウクレレが掛けてあったことを思い出した。(筆者訳)

b. 它让我想起，这里挂了/着一把小吉他。(作例)

これを見ると、ここにウクレレが掛かっていたことに気がついた。(筆者訳)

存在文の例(58)b、(59)bはモノの存在を意味しているが、例(58)a、(59)aは〔“火疖子”、“小吉他”がかつて存在していたが、今はない。〕ことを表している。例(58)b、(59)bに過去を意味する副詞“曾经”などを入れて、“曾经长着/了一个火疖子”〔かつてできものがあった〕、“曾经挂着/了一把小吉他”〔かつてウクレレが掛けてあった〕と表現すると、“过字句”と類似する意味が表せる。

主語の“脖子（上）”、“这里”はモノの存在・消失する場所である同時に、モノの動きの行われる場所でもある。“脖子上”、“这里”という場所で動作(行為)“长”、“挂”によって、存在物の“火疔子”、“小吉他”が消失したり、ある場所に移動したりする。文は客語の消失と移動を表しているが、主語の場所にはなんの変化も起きていない。

例(58)b、(59)bの“着字句”、“了字句”は[あるものが存在している。]という目の前の場所における新しい変化を表している。それに対し、“过字句”は[なんの変化もない場所で、現在と切り離された時点ですでに完結した動作について述べる。]文である。

一般的な会話が話題についての新情報を求めていることを想定しても、一般的な会話だけでは欲しがっている話題についての新しい情報が入ってこない場合がある。そうであれば、話の効率が悪い。そこで昔話をする。[昔話をするというのは、つまり現在と過去とを比較することによって、本当に言いたいことは、もしかしたら現在の消失ではないか。]という聞き手の発想もあり得る。そのため、[文字通りの動作だけでなく、含意的な状態まで変わった。]というような結論を出すのであろう。そのことによって「過去の“过字句”」は「動作と状態」の完結を表現する文と解釈すれば解釈しやすい。

しかし、“过字句”は話し手が直接[現在はもう存在しない。]というふうに言っているわけではないので、“过字句”のなかには、現在は客体がまだ存在しているか、または現在の存在状況を判断しにくいという文もある。このような場合は、次の文のように、文は昔の場面を説明するだけで十分であり、読者の注意力は存在以外のことに払われるのであろう。

(60) 我想起旅馆某个房间门上似乎贴过一张某出版社笔友会报到处的告示，原来他们就是那伙写东西的骗子。（王朔《一半是火焰一半是海水》）

確かに旅館のある部屋のドアに、ある出版社のペンクラブの募集所が出す通知が貼られていたようなあやふやな記憶があることを思い出した。あいつらだったのか、偽通知書を書いた詐欺師は！（筆者訳）

例(60)のように、客体がまだ存在しているか、または現在の存在状況を判断しにくい文であれば、読者は[通知での知らせがあるか、ないか。]という存在状態ではなく、詐欺師の行為に感心を払っている。

3.5.4 現在の“过字句”

上記に挙げる例(55)のような「現在の“过字句”」を表す例文は多いとは言えないが、実際には若干ある。

(61) a. 有一篇外国小说中写过这么一件事:一个负责计划生育的官员,到贫民地区调查情况……” (《插队的故事》)

b. 有一篇外国小说中写了/着这么一件事…… (作例)

ある外国の小説の中にこんな話がある。家族計画を担当する役人が貧民地区へ実態調査に行き、……」 (『明日来る人』)

(62) a. 在公元前3世纪战国时期的著作《韩非子》中就记录过凿刻脚印岩画的事。
(CCL 語料庫)

b. 在公元前3世纪战国时期的著作《韩非子》中就记录了/着凿刻脚印岩画的事。
(作例)

戦国時代の紀元前3世紀にできた著『韓非子』の中には、石に彫った足の絵のことが記録されている。(筆者訳)

場合によってであるが、例(61)、(62)のような“过”用いた文では、[話がある][記録がある]ことを表している。このような文であれば、文中の“写过”の“过”を“了”、“着”に置き換えても、意味はほとんど変わらない。このような場合、かつて起きた出来事の結果が残存することを表している。動詞は普通[ナニカを創り出す]意味を持つ。

施事の及物動詞、たとえば“放(一本書)”の客語であれば、動作が行われた前後の性質は変わらないが、“写(小説)”、“记录(韩非子)”などのモノを創り出す意味を持つ動詞の客語であれば、動作が完結した後に創り出すモノを想定して連語を作る。例(54)のような“过字句”は、「3.5.3、過去の“过字句”」で説明した通り、過去に[黒板に文字を書いた。文字がしばらく存在していた。今は文字が黒板に存在していない。]という「動作と状態」の完結を言う文である。しかし、同じ“过字句”を使う文であっても、例(55)は残存状態が例(54)とやや違う。

例(55)と同様、例(61)、(62)の主語である“外国小说”、“韩非子”は客体の存在する場所であると同時に、意味上では「書く」「記録する」の動作対象でもある。すなわち、客語の“一件事”、“凿刻脚印岩画的事”は、主語の“外国小说”、“韩非子”の一部分でもある。人間の創り出しの行為によって、部分である“一事情”、“岩画脚印的事情”が実現され、結局全体を意味する“外国小说”、“韩非子”が存在する。

“过字句”は「現在と切り離された時点において、すでに完結した動作により、客体の実現している。そして客体は主題の一部分である」ということを表している。「現在の“过字句”」は「動作」の完結を表しているが、「状態」の完結を表しているわけではない。「状態」の残存は、客体と主題との関係によって表されている。よって“着”、“了”、“过”いずれの動態助詞を用いても、「存在」を表す基本義は変わらないのである。

例(59)のように、聞き手が主題についての新しい情報を取得したのであれば、その次の文は、一般的に客語について説明する。これが一般的な文の展開としての原則である。

3.5.6 おわりに

例(53)“坟上种过一排小杉树。”のような“过字句”を例(51)“坟上种了一排小杉树。”、(52)“坟上种着一排小杉树。”のような典型的な存在文と比較してみれば、それぞれの文意の特徴を見出しやすい。

“了”を使った例(51)は、存在する原因となる動き“种”を表している。[杉の木を植える動作が完結して杉の木が存在している。]という意味を表している。ただし存在しているか否かについては前後の文によって判断する。“着”を使った例(52)は結果状態を表している。[目の前に杉の木が存在している。]という解釈のみが可能である。例(53)のような“过”用いた文では、[かつて動作が完了している]意味であり、[杉の木はかつて存在したが、今はない。]というように捉え易い。しかし、文字通りに解釈すれば、歴史上の一時的な存在を表しているので、存在文として考えられる。

例(55)“他的日记里写过这样一段文字。”のような“过字句”の場合であれば、存在場所と存在物は全体と部分との関係があるので、文字通り「動作・状態」の完結を表しているが、「状態」が続くことも示している。文中の動作動詞は一般に[ナニカを創り出す]意味を表している。意味上では、主語と客語はいずれも動作動詞の対象である。

本節では動作動詞の例文を分析したが、“有”などの関係動詞を用いる“过字句”についてまだ言及していない。たとえば、以下に挙げる例(63)のような場合であれば、主題が時間名詞であるが、主語の“古代(历史上)”と客語の“勇士”との関係も一種の「全体と部分」の関係となるとも考えられるので、文中に“过”を用いても用いなくても、“勇士”の存在状態は変わらない。

(63) 古代曾经有过这么一个勇士。(高橋 2006:352)

古代、かつてこのような勇者が一人いました。(高橋2006:352)

文中には動作を意味する成分がない。本節の考え方に従い、状態を表している“有”の完結というふうに解釈するなら、明らかに事実と異なっている。このような問題を今後の課題とする。

言語資料

《文汇报》1979.1/9、《解放日报》1983.11/24、《中国青年报》1985.4/17、《文汇报》1987.7/21、《中国和巴哈马互免签证协定将于2月12日生效》人民网2014-1/26、《老寿星传奇》、《老师敲门来》、《那五》、《夜渡》、《金矿的雪夜》、《文艺复兴时期的艺术大师》、《天涯孤旅》、
北京日本学研究中心《中日对译语料库》（第一版）（2002、2003）
《我的父亲邓小平》《日出》

参考文献

- 吕叔湘(1943) 《中国语法要略》商务印书馆。
金田一春彦(1950) 「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
周祖谟(1957) 〈表示存在或出现的宾语和表示处所的状态〉《语法和语法教学》
陈廷珍(1957) 《汉语中处所词作主语的存在句》
范方莲(1963) 〈存在句〉《中国语文》第五期。
汤廷池(1977) 《国语的“有字句”与“存在句”》。
吕叔湘(1980) 《现代汉语八百词》
张静(1980) 《新编现代汉语》上海教育出版社
范继淹(1982) 〈论介词短语“在+处所”〉《语言研究》第一期
言語学研究会編(1983) 『日本語文法・連語論』
鈴木康之(1983) 「連語とは何か」『国語教育73号』むぎ書房
寺村 秀夫(1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
Comrie,Bernard(1976) Aspect.Cambridge University Press,Cambridge [山田小枝訳(1988) 『アスペクト』むぎ書房]
李临定(1988) 《汉语比较变换语法》中国社会科学出版社
聂文龙(1989) 〈存在与存在句的分类〉《中国语文》第二辑。
町田健(1989) 『日本語の時制とアスペクト』株式会社アルク
李临定(1993) 『中国語文法概論』宮本一郎訳光生館。
李临定(1995) 〈“有界”与“无界”〉《中国语文》
谭景春(1996) 〈一种破损意的隐现句〉《世界汉语教学》第二期
刘月华潘文娛等著(1999) 『現代中国語文法総覧』相原茂監訳、片山博美、守屋宏則、平井和之訳くろしお出版。
沈家煊(1999) 〈“在”字句和“给”字句〉《中国语文》第二期
任鷹(2000) 〈静态存在句中“V了”等于“V着”现象解析〉《世界汉语教学》
王健(2001) 〈光杆动词句中动词对主语的语义选择限制〉《常熟理工学院学报》

- 古川裕(2001) 〈外界事物的“显著性”与句中名词的“有标性”——出现, 存在, 消失与有界, 无界〉《当代语言学》
- 潘文(2002) 〈20世纪80年代以后存在句研究的新发展〉《语文研究》
- 鈴木康之(2002) 「アスペクト研究の半世紀」『日本語と中国語のアスペクト』白帝社
- 讚井唯允(2002) 「コムリーのアスペクト論と日本語・中国語のアスペクト体系」『日本語と中国語のアスペクト』白帝社
- 王学群(2002) 「“V着(zhe)”再考」『日本語と中国語のアスペクト』白帝社
- 王建军(2003) 《汉语存在句历时研究》天津古籍出版社
- 北京大学中国語言文学系現代漢語教研室(2004) 『現代中国語総説』三省堂
- 高橋弥守彦(2006) 『実用詳解中国語文法』郁文堂
- 宮浦国江(2006) 訳デイヴィッド・リー(David・Lee2001)著 『実例で学ぶ認知言語学』大修館
- 宋玉柱(2007) 《现代汉语存在句》语文出版社
- 王学群(2007) 「存在文における“V着”と“V了”」『中国語の“V着”に関する研究』
- 陈忠(2007) 《认知言语学研究》山东教育出版社
- 任鷹(2007) 〈存现句的句式特征及其语序原则〉《日本现代汉语语法研究论文选》
- 杉村博文(2009) 〈事件脚本和“了₂”的用法表述〉《对外汉语研究》
- 张先亮、范晓等(2010) 《现代汉语存在句研究》中国社会科学出版社
- 鈴木康之(2011) 『現代日本語の連語論』日本語文法研究会(彭广陆、毕晓燕译(2013))
《现代日语词组学》北京大学出版社)
- 木村英樹(2011) 「「存在文」が表す〈存在〉の意味及び‘定不定’の問題」《汉语与汉语研究》
- 木村英樹(2012) 「“有”構文の諸相および「時空間存在文」の特徴」東京大学中国語文学研究室紀要 第14号
- 王学群(2011) 〈“了₁”和“了₂”〉
- 曹爽(2011) 〈静态存在句中“着”“了”使用的南北方言差异研究〉《兰州学刊》
- 上田裕(2012) 「発見表現が成立するための語用論的条件」《中国语学》
- 李所成(2012) 《日汉存在表现的对比研究-知言语学的视角》外国语学与研究出版社
- 刘琛琛(2012) 〈结果持续表达方式的中日对比分析-テアル与存在句中的“了”、“着”、“过”〉《日语语言研究》第4期
- 刘街生(2013) 〈存在句的动词考察〉《汉语学习》
- 岡智之(2013) 『場所の言語学』ひつじ研究所
- 辻幸夫(2013) 『新編認知言語学キーワード辞典』研究社
- 鈴木康之(2014) 連語論講義録(2014年度版、大東文化大学大学院)

第四章 存在表現における「報告・発見」

地の文にも会話文にも存在文を用いる場合がある。地の文には空間を旧情報とする存在文が「場面描写」の場合に用いられると、これまで多く指摘してきた。地の文に対して、会話文は語用の区別によって「報告⁷⁹⁾」、「発見⁸⁰⁾」のように分けられると考えられる。

文は一般に「旧情報」から「新情報」へと展開する。「旧情報」は話し手と聞き手両方が共有している「既知」の情報のことであり、一般には主語となる。「新情報」は一般には平叙文の客語のことである。例(1)のような地の文の場合、目の前の様子を伝えたり、昔の情景を再現したりして、いずれも(著者にとっての)「既知」の「情報」を「新情報」として読者に伝える。会話文の場合では、客語(新情報)が「既知」(報告文)なのか「未知」(発見文)なのかは、場合によって異なる。

本節では、存在文の「地の文」と報告を表す「会話文」はいずれも「既知」の情報を叙述する共通点があることにより、便宜上両者を「報告文」と呼ぶ。「発見」を表す会話文は「発見文」と呼ぶ。

- (1) ……灯旁有一张圆圆的小机，嵌着一层一层的玻璃……(《日出》)
…そのよこに低い円形のテーブルがあって、ガラスがなん段もはめ込められていて…(李临定/宮田一郎訳 1993)
- (2) 候车室里有电脑，你可以过去上网查查看。(木村 2011:115)
駅の待合室にパソコンがあるから、ネットで調べて来るといい。(同上)

例(1)は地の文であり、例(2)は報告文(会話に用いられると想定する)である。「場面描写」(例1 数量詞を用いる)と「報告」(例2 数量詞を用いない)の文に客語の“小机”、“电脑”は話し手にとっての「既知」の情報である。上記の例文中の下線部だけを取り出し、その文頭に“诶/啊/呀”などの語気助詞を入れて、“诶! 灯旁有一张圆圆的小机”、“呀! 候车室里有电脑。”と表現すると、客語が「未知」の対象を表し、「発見文」になる。しかし、全ての存在文の文頭に語気助詞“啊/呀”などを入れて、「発見文」になれるわけではない。

- (3) “今天午后少东家回来了，我到他屋里去看他，看见他桌上放着一张像片，——大娘，您猜这照片是谁? 正是我!……”(《青春之歌》)

⁷⁹⁾ 例(2)の存在文は、所謂報告文であり、聞き手にとって非既知のパソコンが駅の待合室に存在するという状況を、単に事実として聞き手に伝えることをもくてきとするものである。(木村英樹 2011:115)

⁸⁰⁾ 発見表現とは、当該発話が現場密着的であり、対象を認知してから瞬間的に発せられるものである。(上田裕 2012:70)また、感嘆詞を使用する動機は、直感的な反応の現場性と瞬間性に求められる。人が個別の対象に遭遇した際には、多少なりとも驚きの感情が生じ、発話に際して感嘆詞を伴う場合が多い。(刘丹青 2011: 152)

「今日の午後、若旦那が帰ってきたので、部屋にあいさつにいったの。そして、テーブルの上に、写真が一枚のっていたの。おばさん、だれの写真だったと思う？わたしのなの！」(同上)

日中対訳コーパス CJCSLAB で調べると、“放”のような実義動詞を用いた存在文が会話文に用いられる場合は極めて少ない(“放”の場合、例(3)を入れて2例しかなく、しかも2例はいずれも「報告文」である)、ということが分かる。例(3)のように述部が“動作动词+着”の構造の存在文は、「場面描写」の地の文によく見られるが、会話文では滅多に見られない構造である。上記の例文中の客語“像片”は「既知」の特定事物であり、「未知」に解釈することには無理がある。実際の場合、以下に挙げる「発見」を表す存在文はほとんどが“有”構文である。

(4) 候车室里有电脑，你可以过去上网查查看。(木村英樹 2011:115)

駅の待合室にパソコンがあるから、ネットで調べて来るといい。(同上)

(5) a. 候车室里摆着/了/0 一台电脑。(作例)

b. 候车室里摆着/了/0 电脑(作例)

(6) a. 啊，候车室里有 电脑。(作例)

b. 啊，候车室里有一台电脑。(作例)

例(4)の下線部が“有”構文(単純存在文)であり、“电脑”が話し手にとって、すでに把握している旧情報である。例(5)(6)を例(4)のように訳すことはできるが、意味が若干異なる。例(5)の述部は、“摆着/了/0(光杆动词)”を用いる静態存在文である。数量詞の有無にかかわらず、“电脑”は「既知」にしか理解できない。例(6)は例(4)の後半の分文を外し、文頭に感嘆詞“啊”を加えて組み立てられた単純存在文である。ここの“电脑”は「既知」と「未知」の二通りに解釈できると考えられる。「未知」として理解する場合は、例(6)aにある“电脑”が求められているモノとして解釈されやすい(独り言の場合は“有了!”[あった!])と、表現することが考えられる)。それに対して、例(6)bにある“一台电脑”は、単なる初めて気づいた物体である。この三例から、述部の種類と数量詞が「既知」、「未知」を区別する要素となることが分かる。

「既知」、「未知」を意味する存在文(“在字句”にも少々触れたので、本節の題目に「存在表現」を用いる)に、「既知」か「未知」かについて区別する要素は、たとえば言語環境とか、ほかにも幾つかある。「既知」と「未知」の「新情報」をどのように文に反映するかを本節の課題とする。

本章の第1節では、存在文に用いられる数量詞、および発見表現に関する先行研究について考察、分析し、第2節では「報告文」、「発見文」の用法について調査、分析する。

第 1 節 数量詞および発見表現についての先行研究

4.1.1 数量詞

木村英樹(2012: 96~109)は、筆者が拙論で検討する“有”を述語動詞とする基本的な構文で作る中国語の存在表現を「知識」タイプと「知覚」タイプの2類に分類し、場所を表す存在文と関係する後者を「時空間存在文」(本節の第二章第四節を参照)と呼んでいる。

木村英樹は、存在文を分析することにより、存在文中の客語は一般的に言えば、数量詞または量詞を伴う不定(indefinite)名詞であり、数量詞も量詞も伴わない裸名詞や定(definite)名詞ではあってはならない。現行の多くのテキストや主要な文法書の記述に見られる「存在文」の特性に関する一般的な理解は、凡そこのようなものである。また、何らかの条件——機能論的な条件や語用論的な条件など——が加わることによって、定名詞や裸名詞が用いられることも可能になるという状況もある、と指摘している。

話し手(または聞き手)の脳裏には、特定の事物(人、物、事)がすでに知識(範疇)として登録されている既知の対象として数多く存在する。「知識」タイプの“有”構文に比べ、「知覚」タイプは「非既知性」の持つ未知(unidentifiable)の「誰か」あるいは「何か」が実体として存在することを述べる文である。非既知の具象的な個別の事物の存在を述べる場合、個別性を明示するには、数量詞が客語としての名詞に付加される傾向が強くなる。

この点について、たとえば、「個体化(individualization)の機能(大河内康憲 1985:56)」、「‘有界’概念(李臨定 1995:360)」、「显著性原則(古川裕 2001:265)」、「李所成(2013:120)」などの研究では、いずれも数量詞(普通は単数形式を指す)を付加することによって、客語に登録されている既知の対象の一つとして、個体化することを示唆している。さらに数量詞による個体化機能は、その輪郭化(profiling)機能について、「知覚」タイプの存在文の表現対象の視覚性、形象性を補完し、個別の実体としての輪郭をあたえることには大きく貢献する。また上に述べた事柄は、当該存在対象が限界的(bounded)、または離散的(discrete)な非連続体としての事物(例7の“小石子”)である場合にのみ該当するものであり、非限界的、非離散的な連続体事物(例7の“水”)、または常に一期一会の状況(例8の“雪”)については、その限りではない(木村英樹 2011:112)、と述べている。

(7) 乌鸦看见一个瓶子，瓶子里有水。……乌鸦看见旁边有许多小石子，想出了一个办法。(《小学语文》)

カラスには一本の瓶が見えた。瓶のなかに水がある…カラスはそばにたくさんの石ころがあるのを見て、ある方法を思いついた。(木村 2011:114)

(8) 下班出去的时候才发现外面有雪。(木村 2011:98)

仕事を終えて外に出た時には、はじめて外が雪だということに気づいた。(木村 2011:98)

4.1.2 発見表現

上田裕(2012)では、ある事物を発見した際に用いられる表現形式のタイプについて、文末助詞“了”を用いる文と“有”を述語動詞とする存在文に分類し、両者を中心に考察を行っている。

(9) (お湯が湧くのを待っていたところ、目の前でお湯が沸騰状態に達した。)

噢，水开了。(よし、沸いた。)(上田 2012:73)

(10) (昨日まで元気だった籠の中のペットの小鳥が、朝起きたら死んでいた)

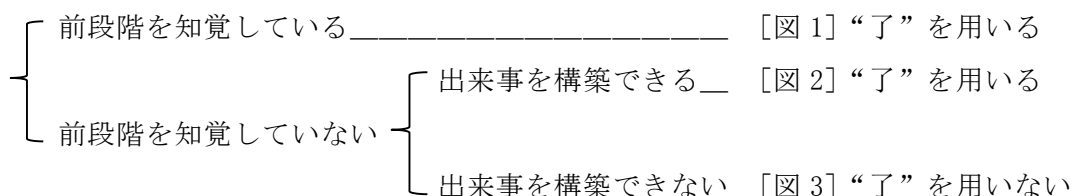
啊，鸟死了。(あ、鳥が死んでる。)(上田 2012:81)

(11) (近所を一人で散歩していたところ、道端で小鳥の屍骸を見つけた)

欸，地上有只死鸟。(あれ、地面に死んだ鳥がいる。)(上田 2012:80)

話用論的な観点から、発見の状況における文末助詞“了”の使用条件を次のように具体的に提示している。

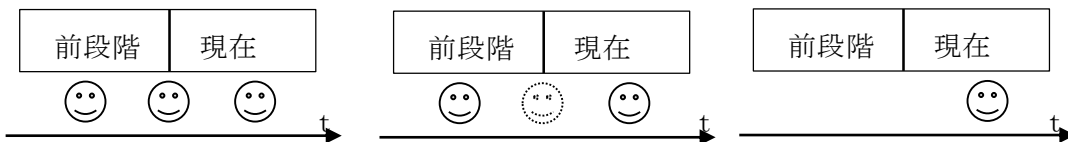
[表 4-1] 上田裕(2012:83)による文末助詞“了”の使用条件



[図 1] = 例(9)

[図 2] = 例(10)

[図 3] = 例(11)



※顔マーク「☺」は話し手の焦点を意味する、

※点線の「☺」出来事を主観的に構築することを意味する。

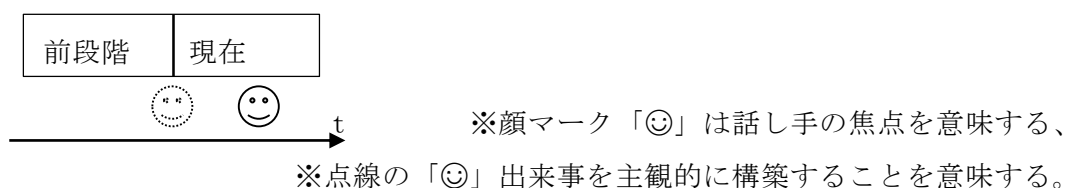
文末助詞“了”を用いた発見表現は、話し手が前段階を把握していること(例 9)、または眼前の状況から出来事を主観的に構築していること(例 10)を表す表現形式である。それに対して、“有”を述語動詞とする存在文は、対象の存在について、話し手の主観的な解釈を加えず、客観的に叙述することを目的とする表現形式(例 11)である。

前段階や背景となる状況を把握できれば、文末に“了”が使える。(杉村博 2009:1-12/上田裕 2012:71)したがって、“了”(動態助詞“了₁”または文末助詞“了₂”)を用いない存在文、すなわち“着字句”、単純存在文などの場合は、前段階や背景となる状況が把握できていない、ということが言えるであろう。しかし前段階や背景となる状況を把握していない場合は、すべて存在文で表すわけではない。

(12) 不好，有人溺水了，赶快报警！（上田 2012:81）

いけない、誰かが溺れている。(同上)

[図 4] =例(12)



静的な結果状態を発見した例(11)と異なり、動的な状態を表す例(12)では、溺れるという動作が眼前でまさに進行している。人が溺れるという一刻を争う動作が眼前で進んでいるため、話し手にとって、その動作が第一の注目点となりやすい。存在文の“有一个溺水的人”のように進行している動作に焦点を当てずに、対象の存在に焦点を当てて客観的に叙述すると、この状況を叙述するのに必要な情報量が満たされず不自然になる。一方、この状況では、対象が発見時から、その遠くない過去に、その場所で水に落ちて溺れるに至ったという出来事を主観的に構築することが容易であるため、前段階や背景となる状況を把握していないにもかかわらず、文末に“了”を用いる。(上田裕 2012:81)

4.1.3 本節の観点

水、光、雪、風などの「限界性、離散性に乏しい連続体」であれば、裸名詞であることも許容される。実際の場合、以下の様な実例がある。

(13) 任何植物的种子都与小麦种子一样，不管怎么晾晒，总是或多或少地含有一些水分。(《植物学》初中全一册)

あらゆる植物の種は、小麦と同じで、いくら日で乾かしても、水分が多少残ります。(筆者訳)

(14) 总而言之，大多数的人心里，还有一线的曙光。(《中华民族眼里的基督》)

要するに、大多数の人の心のなかには、一筋の光がさしこんでいます。(筆者訳)

「限界性、離散性に乏しい連続体」「水、曙光」が存在する空間に充満しているか、または一番目立つ対象とされる場合であれば、例(7)“瓶子里有水。”のように、一般には裸名詞のまま文中に用い、数量詞を用いない。例(13)(14)の“水分”“曙光”は存在する空間の一部を占めているため、連続体であっても、数量詞がつけ加えられる。ただし、例(7)の“瓶子里有水。”に“一些水”を加えて、会話文として“瓶子里有一些水。”のように分量“一些水”まで述べる場合であれば、「未知」として解釈するのには無理がある。

(15)居然有一丝风！（《大典》李黎）

まさかそよ吹く風があるとは！（筆者訳）

(16)昨夜下了一场雨，河里水还在哗哗地流着。（《默契》）

昨夜雨が降りました。川の水がザーザーと流れています。（筆者訳）

一期一会の状況“有风”“（有）下雨”では、経験したあと初めて輪郭、範囲を定めることができるようになる。例(15)(16)の場合は経験した状況を述べている。よって、「現在・ここ」で気づいた「未知」の何かを表すには、風や雨などに数量詞を付加することができる。その上、「一期一会の状況」においては、状況のなかの「ひとしきりの風」や「一粒の雨の水滴」は全体的な状況の象徴とされ、物と物の間の存在を意味する事柄が重視されていない。

存在文の構造で“外面下着雨”[外では雨が降っている]、“外面下了雨”[外では雨が降った。]のように「既知」の情報は伝えられるが、「発見」の意味は伝えられない。新しい状況を言うには、やはり“下雨了。”[(そろそろ)雨が降る。/(今)雨が降っている。/雨が降った。]、と表現するであろう(杉村博文 2009)。こう言う場合、例(17)と同じように主体と空間との関係は背景化されている。

(17)春禧拍着两只小手说：“嘿，冒芽了。”周丽平一看，墙下边是一排小杨树苗。

（《金光大道》）

春禧は小さな手をたたいて、「ホラ、芽が出てる」見ると、かわやなぎの苗木が一行に植わっている。（同上）

連続体事物の存在を叙述するには「知覚タイプ」（数量詞付きの）存在文の形が用いられるが、いずれも「既知」を伝える文になる。

上記の上田裕(2012)の分析によると、動的な主体の存在に気付いた場合、“草原上奔驰着一匹骏马。”のような「動態存在文」の形で表現することができない、と言えるであろう。動的な対象を「発見」した場合であれば、普通は“（有）一匹马在奔走着。”のような、動作を強調する存在表現(兼語文)を用い、動作運動をする主体が場所の代わりに注目の焦点となり、主語になる。たとえば時間、空間的に変化、移動しつつある「水(水流)」では、状態を見るか動作を見るかによって、下記のように表現され、文の構造が違ってくる。

(18) 尸体已经发臭，门板边缘上流着黄色的浊水。（《红高粱》）

死体はもう臭気を発しており、戸板の縁には黄色く濁った水が流れていた。

（同上）

(19) 循声望去，只见一条小渠在不远处缓缓地流着，清清的水流不断地注入路旁的稻田。（《轮椅上的梦》）

音をたよりに探すと、そう遠くないところに細い水路がゆったりと水をたたえて、清らかな水を田に注いでいた。（同上）

上記の2例では、いずれも“浊水”、“小渠”の存在を伝える文であるが、例(18)が普通の存在文で“流着”という(動的)状態を表しているのに対して、例(19)は兼語文を用いて、“流着”という動きに注目をしている。

第2節 「報告」、「発見」を表す存在表現

前節の数量詞に関わる先行研究を整理してみると、「存在文」の客語に数量詞を付加するか、または付加しないか、という2つの場合がある。先行研究によると、「離散的な非連続体としての事物」を表す存在文の客語に数量詞を用いる場合、存在文は視覚の輪郭を強調した個別の実体としての存在を叙述する「知覚」のタイプである。数量詞を用いない場合の存在文は、知識に登録した対象が存在する事柄⁸¹⁾を伝える「知識」のタイプになる。

4.2.1 「既知」を伝える場合

地の文において、存在文はしばしば「情景描写」の場面に用いられる。例(20)は新劇《日出》の脚本であり、話し手(著者)が舞台にある道具の設置を説明する場面である。存在文の客語の前に数量詞を用いず、「知識」に登録した対象が存在する事柄を叙述する存在文で表現している。例(21)は小説の中の「情景描写」の実例である。話し手(著者)は背景を生き生きと描写するため、数量詞を用い、聞き手(読者)に対しても実際に見ているように状況を伝える。(本稿第二章で述べるすべての存在文は、「既知」の情報を伝えることが可能である、と考えられている。しかし、会話文に用いられる存在文の構造は限られている。)

(20) 正中立着烟机。围着它横着竖着摆着方圆的，立体的，圆锥形的小凳和沙发。

上面凌乱的放些颜色杂乱的坐垫。……(《日出》)

真ん中に灰皿スタンドが立ててある。それを囲んで、角、丸、立体、円錐形の小さい腰掛けとソファーがばらばらにおいてある。そしてその上には、まちまちの色をしたクッションが騒然とにおいてある。…(李临定/宮田一郎訳 1993)

(21) ……对面灯光辉耀的是四叔克安的住房，中间隔了一个天井，天井里有一个紫藤花架。(《家》)

向い側の煌々と灯火が輝いているのは四叔克安の住居である。そこまで中庭で隔てられ、藤棚が架けてある(同上)

会話文(肯定文)には、「既知」の存在物を表す「報告文」と「未知」(初めて気付いたモノ)の存在物を表す「発見文」とがある。例(22)から(26)が「報告文」である。例(22)(23)は数量詞を付加せずに、「知識」に登録した対象の存在という事柄を叙述する。例(24)(25)にある“这一片(荔枝林)”“新的《少年中国》”は特定したものである。例(26)は数量詞を付加して、非限定の個別実体の“起坐间”[居間]が存在することを伝えている。

⁸¹⁾木村英樹(2011)には「事柄」という言葉を用い、「もの」と「出来事」のことを表している。

- (22) “我房里有签。喊鸣凤把签筒拿来罢，”瑞珏这样提议。(《家》)
 「あたしの部屋に籤があるわ。鳴鳳に籤の筒を取りにやらせましょう」瑞珏が提議した。(同上)
- (23) “妈说花园里头有鬼，”淑贞捏着鸣凤的手，用颤抖的声音分辩道(《家》)
 「母さんがいったわ。花園にはお化けがいるって」淑貞は鳴鳳の手をいじりながら、ふるえ声でいいわけをした。
- (24) 觉民笑了，说：“琴妹，我这儿有新的《少年中国》，你看罢。(《家》)
 覚民も笑いながら「琴妹、ここにも新しい『少年中国』があるよ。見たまえ」(同上)
- (25) 在校门口的大学位置示意图上，显眼地标着“荔枝园”，司机指给我：“你看，还有这么一片。”(《中日飞鸿》)
 大学の正門にある構内案内地図にも、「レイシ林」と目立つ表記があり、運転手は「ごらんなさい。まだ残ってるんですよ」と言った。(同上)
- (26) 徐太太开门放他们进来道：“在我们这边吃茶罢，我们有个起坐间。”(《倾城之恋》)
 徐夫人がドアを開け、ふたりを招じ入れた。「お茶をあがってらっしゃいな。ここには居間もついでるのよ。」(同上)

上の「情景描写」に用いる地の文と「報告」を表す会話文の場合、話し手(著者)がすでに把握している情報を聞き手に伝える点においては共通である。たとえば、例(20)を“中间立着一台烟机…”に、例(22)を“我房里有一套签…”に置き換えても、つまり文中の客語の前の数量詞(単数)省いたり、付加したりしても、文章の話し手の意図においてはほとんど変化がない。(例(23)は“有鬼”が状況を伝えているため、「鬼」の数を問題視されていないので、例外である)

上記の話し手の意図について、大島吉郎(2013)では次の表のように整理している。

[表 4-2] 大島吉郎による「不定」、「定」情報について

I、時間/場所+有+数量詞+人/物	II、時間/場所+有+人/物
話者にとって初めて気付いた時の、見たままの情景、事実を述べる表現	聞き手の暗黙の求めに応えようと、あらかじめ認識、把握している情報を提供する善意の表現(善意が過剰と受け取られる場合はお節介ともなりかねない)
明天有一个联欢会。	明天有联欢会。

数量詞を省いた場合(“明天有联欢会。”) [明日、親睦会があります。] は [明日、(親睦会)があるけど(あなたはどうしますか。)] の意味であり、数量詞を用いる場合

(“明天有一个联欢会。”)における話者の意図は、まず事実を端的に述べ、話題を次の段階つなげようとするものである、と大島吉郎(2013:22)は指摘している。

4.2.2 「未知」を伝える場合

例(27)から(30)の下線部は「発見文」である。「発見文」の対象は、話し手と聞き手双方が(発話時に)初めて気づいた事物であり、数量詞を用いる例(27)(28)と数量詞を省く例(29)(30)とがある。

(27) “你看，那儿有一枝很好的，” 他高兴地说。(《家》)

「ほら、あそこにとってもいい枝があるぜ」彼は嬉しそうにいった。(同上)

(28) “怎么只有两杯？我明明叫你倒三杯！” 他依旧高声问。(《家》)

「どうして二杯しかもってこないんだ。僕は三杯とはっきりいったぞ」彼は相変わらず高い声でいう。(同上)

(29) 他把她的辫子捏住，却被淑芬看见了，她笑着叫声：“二姐，背后有人！” 淑英连忙掉过头去看……(《家》)

覚新が彼女のお下げをつかんだとたんに、淑芬に見つけられ「うしろに人がいるよ」と笑っているの、淑英があわててふり返ったが……(筆者訳)

(30) “不要响，” 她突然抓住他的左臂低声说，“听，下面有人。” 两个人静静地倾听。……但是他们知道是觉民在下面唱歌。(《家》)

「ちょっと、だまって」彼女はとつぜん彼の左腕をとらえた。「ね、下に誰かいるわ」二人は息を殺して耳をそばだてた。…二人には覚民が歌を唱っているのだとわかった。(同上)

例(27)(28)が数量詞を用いた典型的な構造の「発見文」である。文は視覚でとらえた不定個体の“一支很好的(花)”、“两杯(酒)”の存在を伝えている。主体は一般に話をしている双方が捜し求めている物で、話し手と聞き手の双方が同じ事物に注目しているため、文中の客語が省略されて、数量詞だけで対象の輪郭を強調することになる。初めて気がついた無情物の静態的な(受事の主体)個体の存在を伝えるには「知覚」タイプの存在文を用いる。

例(29)(30)の客体はいずれも“人”である。言語環境によると、話し手が視覚か聴覚かで対象を識別して、その人のことを知っているのに、“背后有觉新”“下面有觉民”というふうに組み立てて、名前と呼ぶことはなく、逆に「知識」に登録した「人」で表している。また“*二姐，背后有一个人。”“*听，下面有一个人。”のように数量詞をつけることで「発見」を伝える言語環境がなくなる。この場合“有人”が「人がいるという状況」を伝えているのであろう。よって一定の空間内にいる・ある人間など

有情物(施事の主体、中性の主体⁸²⁾)に気がついた場合であれば、新しい状況を伝えて、準備と対応を呼びかけるので、「知識」タイプの存在文を用いる。

4.2.4 「発見」を表す存在文の述語

上記の「はじめに」のところで説明したように、「発見」を表す存在文は、一般に“有”を述語動詞とする構文である。まず、動的な対象に気づいた場合であれば、話し手は動作を第一の注目点とし易く、文末助詞“了”を用いる構造で表現するであろう。静的な対象が存在する事柄を叙述する場合であれば、単純存在文か静態存在文を用いる。ただし、静態存在文は「あるところにある方式で人またはある物が存在していることを表している。」(李臨定 1993:332)という特徴を持っている。発話時に「前段階や背景となる状況」を把握できないのに、物が存在する「(動作結果残存の)方式」などを把握することは難しい。「発見」を表す静態存在文の実例もほとんどない。しかし、以下に挙げる文のような例外がある。

(31) “哟，全贴着封呐!” (《大宅门》)

「おや、完全に封がされているぞ!」(上田 2012:70)

一般に静態存在文は“墙上挂着海报”[壁にポスターが掛けてある。]、“村口修着一座桥”[村の入り口で橋を造っている。]のような「とりつけ」の出来事、または「創り出し」の出来事によって、出現、存在する対象が「残存する」という結果を表している。目の前の物だけを見ていると、そもそもここにあるのか、また人の動作によって現れたのかが分からない。その結果に至る原因となる動作が数種類存在しているはずであり、簡単に再構築することは難しい。例(31)の“貼封条[封緘紙を貼る]”は「とりつけ」の出来事であるが、“用封条贴(门)[封緘紙で門を封じる]”のように、「道具の使用」という解釈も可能である。道具の“封条”を「発見」して、文中で前段階の状態そして存在の原因となる動作の“貼”を再構築することが容易なのである。

5、おわりに

本節は会話文に現れる存在文の語用的使用環境について分析し、その使用傾向について述べている。本節は存在文が「報告」「発見」を表す場合で、条件となる「数量詞」「動詞」について考察した。しかし、存在文は一般に小説、舞台劇などの言語作品に現れ、物語の背景、舞台について説明するのに用いられるが、存在文で会話文の実例を集めることは、地の文での存在文を集めるより困難である。本節の考察の資料として不足なところが多々有り、さらに深く調査、分析する必要がある。

⁸²⁾本稿の第二章第1節の「2.1.4」をご参照願いたい。

言語資料

《小学语文》、《家》、《倾城之恋》、《植物学》、《中华民族眼里的基督》、《大典》、《默契》、
《大宅门》、《中日飞鸿》

北京日本学研究中心《中日对译语料库》（第一版）（2002、2003）

《日出》、《家》、《金光大道》

参考文献

言語学研究会編(1983) 『日本語文法・連語論』

河内康憲(1985) 「量詞の個体化機能」《中国語学》『中国語学』

聂文龙(1989) 〈存在与存在句的分类〉《中国语文》第二辑。

李临定(1993) 『中国語文法概論』宮本一郎訳光生館。

李临定(1995) 〈“有界”与“无界”〉《中国语文》

古川裕(2001) 〈光杆动词句中动词对主语的语义选择限制〉《常熟理工学院学报》

王建军(2003) 《汉语存在句历时研究》天津古籍出版社

高橋弥守彦(2006) 『实用詳解中国語文法』郁文堂

宋玉柱(2007) 《现代汉语存在句》语文出版社

杉村博文(2009) 〈事件脚本和“了₂”的用法表述〉《对外汉语研究》

张先亮、范晓等(2010) 《现代汉语存在句研究》中国社会科学出版社

鈴木康之(2011) 『現代日本語の連語論』日本語文法研究会(彭广陆、毕晓燕 译(2013))
《现代日本语词组论》北京大学出版社)

木村英樹(2012) 「“有”構文の諸相および「時空間存在文」の特徴」東京大学中国語文学研究室紀要 第14号

上田裕(2012) 「発見表現が成立するための語用論的条件」《中国語学》

大島吉郎(2013) 「存在文における発話の意図に関する若干の考察-動詞“有”の例を中心に-」『外国語学研究 第14号』

李所成(2013) 「日中存在表現における数量詞「一個」について」『連語論研究<II>』
日本語文法研究会 研究会報告 第34号

刘街生(2013) 《存在句的动词考察》《汉语学习》

終章

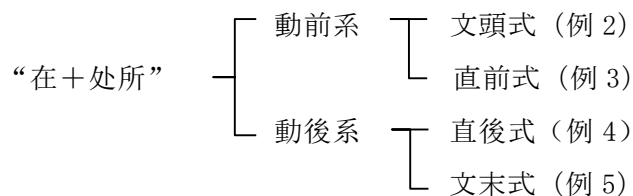
5.1 結論

拙論は先行研究と例文とによる存在表現に関する研究である。存在表現を明らかにするために、一般に言われている存在文と“在字句”について、構造上、意味上の考察と分析を行った。構造上の分析は主に日本語連語論の分析方法を活用し、空間詞の「格」および連語レベルの各文成分の関係について調べた。意味上においては、連語論の出来事を分類する考え方と認知、語用論の若干の概念を拝借し、存在文および“在字句”の使用上の問題について分析した。

本論の部分は全部で4章から構成されている。

第一章の「“在字句”と存在文」では、存在文と関連する“在字句”について検討している。特に存在文と同じ単語を用いて異なる連語構造を作る“在字句”について考察した。“在”の基本用法である述語動詞としての使い方を除いて、“在字句”を[表5-1]（第二章の[表1-1]に同じ）のように[文頭式][直前式][直後式][文末式]に分け、“在”の品詞分類をして、それぞれの文法的な特徴を述べている。

[表 5-1] “在字句”の全体像



本章の第1節から第4節は上記の4つ“在字句”の文法的な構造を考察して、日本語訳との比較を行った。第5節は小説に用いられている“在+处所”の例文を集め、各構造におけるそれぞれ現実のなかの使用傾向を調べ、4つ“在字句”を用いる言語環境を明らかにした。第6節では存在文と“在字句”との関係を連語論の角度から整理した。

第二章では、連語論、認知論などの観点に基づき、第一章における“在字句”を分析する方法を用いて、存在文の下位分類を行った。当章の第1節は存在文における「焦点(図)」と「背景(地)」との関係について論じた。第2節から第4節では空間詞と関係する連語論の観点を用いて、李臨定(1993)の存在文に対する分類「静態存在文」、「動態存在文」、「単純存在文」に倣い、李臨定が存在文を分類する順序でを考察した。結論は次の表で示すとおりである。

[表 5-2] 本稿における存在文の再分類

静態存在文	ものへのはたらきかけ	A とりつけ “玻璃罩子里，搁着珐琅自鸣钟。”
		(metaphor)道具の使用 “腿上绑着铁链子。”
		B つくりだし “金线河两岸 筑起了高高的堤坝。”
		(metaphor)破損義のつくりだし “两只手，裂着许多小口子。”
場所へのかかわり	C 立ち居 “长凳上蹲着几个赶车的庄稼人。”	
	D 存在方式の出来事 “在和平的生活中竟然隐藏着那么多的叛徒。”	
動態存在文	空間的な移動	移動している有情物 “草原上奔腾着一群骏马。”
		運動している無情物 “天空中飘着雪花。”
	無情物の繰り返し	揺動している無情物 “夕阳中摇曳着羽毛草。”
		回転している無情物 “眼里转着泪珠。”
	無情物の膨張・放射	膨張する無情物 “通体泛着银光。”
		放射する無情物 “大海上笼罩着一层浓雾。”
単純存在文	“有、是、存在”存在文	“有” 構文 “草原上奔腾着一群骏马。”
		“是” 構文 “天空中飘着雪花。”
		“存在” 構文 “这里边还存在着一些问题。”
	“无动”存在句	“Np+数量词+Np” 構文 “山下一片好风光。”
		“Np+数量词+Np” 構文 “满地垃圾。”
		“Np+的+Np” 構文 “满地的瓜果。”

第三章では存在文の文構造、そして存在文に用いる動態助詞について分析した。第1節は存在表現の連語構造について考察して、第2節はアスペクト研究の観点から存在文に用いる動態助詞“V了”、“V着”を分析した。第3、4節では語用論の観点から、それぞれ静態存在文、動態存在文に用いられる“V了”、“V着”の使用状況について論じた。第5節では存在文に動態助詞“过”の用いられている例文を分析し、なぜ存在文にも動態助詞“过”が用いられるのかを分析した。

第四章では先行研究と例文とにより、存在文で旧情報の「報告」または新情報の「発見」を陳述する場合の使用状況を考察して、存在文と“在字句”の使い分けについて検討した。当章の第1節は存在文に用いられている数量詞、発見表現の先行研究について分析し、考察した。第2節では「報告文」、「発見文」の用法について調査、分析した。

5.2 今後の課題

拙論を作成する途中で発生した未解決な問題が多々ある。それらの問題は、主に関連する各章、節の「おわりに」のところに記録し、今後の学習、研究を進めるなかで、解決しようと考えている。

参考文献

- 中国語の部
- 吕叔湘(1943) 《中国文法要略》商务印书馆。
- 吕叔湘(1946) 《从主语、宾语分别谈国语句子的分析》商务印书馆
- 周祖谟(1957) <表示存在或出现的宾语和表示处所的状态语>《语法和语法教学》
- 陈廷珍(1957) 《汉语中处所词作主语的存在句》《中国语文》
- 王还(1957) <说“在”>《中国语文》第二期
- 丁声树(1961) 《现代汉语语法讲话》商务印书馆
- 范方莲(1963) <存在句>《中国语文》第五期
- 汤廷池(1977) 《国语的“有字句”与“存在句”》
- 吕叔湘(1980)(1999) 《现代汉语八百词》商务印书馆
- 张静(1980) 《新编现代汉语》上海教育出版社
- 王还(1980) <再说说“在”>《语言教学与研究》第二期
- 范继淹(1982) <论介词短语“在+处所”>《语言研究》第一期
- 宋玉柱(1982) <定心谓语句存在句>《语言教学与研究》
- 李临定(1986) 《现代汉语句型》商务印书馆
- 李临定(1988) 《汉语比较变换语法》中国社会科学出版社
- 聂文龙(1989) <存在与存在句的分类>《中国语文》第二辑。
- 吕叔湘(1990) 《吕叔湘文集》商务印书馆
- 戚雨村(1993) 《语言学百科辞典》汉语辞书出版社
- 李临定(1995) <“有界”与“无界”>《中国语文》
- 谭景春(1996) <一种破损意的隐现句>《世界汉语教学》第二期
- 沈家煊(1999) <“在”字句和“给”字句>《中国语文》第二期
- 任鹰(2000) <静态存在句中“V了”等于“V着”现象解析>《世界汉语教学》
- 王健(2001) <光杆动词句中动词对主语的语义选择限制>《常熟理工学院学报》
- 古川裕(2001) <外界事物的“显著性”与句中名词的“有标性”——出现，存在，消失与有界，无界>《当代语言学》
- 潘文(2002) <20世纪80年代以后存在句研究的新发展>《语文研究》
- 王建军(2003) 《汉语存在句历时研究》天津古籍出版社
- 宋玉柱(2007)《现代汉语存在句》语文出版社
- 王学群(2007) 「存在文における“V着”と“V了”」『中国語の“V着”に関する研究』。
- 陈忠(2007) 《认知言语学研究》山东教育出版社
- 任鹰(2007) <存现句的句式特征及其语序原则>《日本现代汉语语法研究论文选》
- 杉村博文(2009) <事件脚本和“了₂”的用法表述>《对外汉语研究》

- 邢福义(2009) 《汉语语法学》 东北师范大学出版社
- 张先亮、范晓等(2010) 《现代汉语存在句研究》 中国社会科学出版社
- 单宝顺(2011) 《现代汉语处所宾语研究》 中国社会科学出版社
- 王学群(2011) <“了₁”和“了₂”>(日中对照月例会资料)
- 曹爽(2011) <静态存在句中“着”“了”使用的南北方言差异研究>《兰州学刊》
- 李所成(2012) 《日汉存在表现的对比研究-知言语学的视角》 外国语学与研究出版社
- 刘琛琛(2012) <结果持续表达方式的中日对比分析-テアル与存在句中的“了”、“着”、“过”>《日语语言研究》第4期
- 刘街生(2013) <存在句的动词考察>《汉语学习》

・日本語の部

- 金田一春彦(1950) 「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 呂叔湘編、牛島徳次、菱沼透訳(1982) 『中国語文法用例辞典—『現代漢語八百詞増訂本』日本語版』東方書店
- 言語学研究会編(1983) 『日本語文法・連語論』
- 山口直人(1983) 『文中における‘在+处所’の位置とその意味の研究』(未出版)
- 鈴木康之(1983) 「連語とは何か」『国語教育 73号』むぎ書房
- 寺村秀夫(1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 大河内康憲(1985) 「量詞の個体化機能」『中国語学』232、1-13
- Comrie, Bernard(1976) Aspect. Cambridge University Press, Cambridge [山田小枝訳(1988)『アスペクト』むぎ書房]
- 町田健(1989) 『日本語の時制とアスペクト』株式会社アルク
- 李临定、宮田一郎訳(1993) 『中国語文法概論』宮本一郎訳光生館
- 刘月华潘文娛等著(1999) 『現代中国語文法総覧』相原茂監訳、片山博美、守屋宏則、平井和之訳くろしお出版。
- 刘月华潘文娛等著(1999) 『現代中国語文法総覧』相原茂監訳、片山博美、守屋宏則、平井和之訳くろしお出版。
- デイヴィッド・リー(David・Lee2001) 著 宮浦国江(2006)訳 『実例で学ぶ認知言語学』大修館
- 鈴木康之(2002) 「アスペクト研究の半世紀」『日本語と中国語のアスペクト』白帝社
- 讃井唯允(2002) 「コムリーのアスペクト論と日本語・中国語のアスペクト体系」『日本語と中国語のアスペクト』白帝社
- 王学群(2002) 「“V着(zhe)”再考」『日本語と中国語のアスペクト』白帝社
- 北京大学中国語言文学系現代漢語教研室(2004) 『現代中国語総説』三省堂
- 高橋弥守彦(2006) 『実用詳解中国語文法』郁文堂

- 高橋弥守彦(2009) 『格付き空間詞と〈ひと〉の動作を表す動詞との関係-日中対照研究を視野に入れて-』 語学教育フォーラム第 17 号
- 三原健一(2008) 『構造から見る日本語文法』 開拓社
- 成戸浩嗣(2009) 『トコロ表現をめぐる 日中対照研究』 好文出版社
- 鈴木康之(2011) 『現代日本語の連語論』日本語文法研究会(彭广陆、毕晓燕 译(2013) 《现代日语词组学》北京大学出版社)
- 木村英樹(2011) 「「存在文」が表す〈存在〉の意味及び‘定不定’の問題」《汉语与汉语研究》
- 上田裕(2012) 「発見表現が成立するための語用論的条件」《中国語学》
- 岡智之(2013) 『場所の言語学』ひつじ研究所
- 辻幸夫(2013) 『新編認知言語学キーワード辞典』研究社
- 大島 吉郎(2013) 『存在文における発話の意図に関する若干の考察』大東文化大学 外国語学研究
- 鈴木康之(2014) 「モノの動きを意味する連語の特徴…連語論に関心をもつ若い研究者達に…」授業用プリント